伊久間原遺跡 下原

1991・3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

伊久間原遺跡 下原

1991・3

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

伊久間遺跡下原面遺構群（北より）

30号住居址出土土器

序

「社会福祉法人りんどう信濃会」が設置運営している悠生寮の建設が，精神薄弱者の福祉向上を願って伊久間原下原地籍に決定され，現在工事が進行中であります。伊久間原は，重要な遺跡であり，昭和27年・29年農道開発の際，縄文時代・古墳時代の住居址が検出されたのを始め，その後の開発事業実施に伴う文化財保護の立場から工事実施前の調査により，数多くの貴重な遺構や遺物が検出されている地籍であります。

今度の下原地籍は末調査の地籍であるが，伊久間原遺跡の重要な一部と考えられるため，工事の実施に先立ち発掘調査を行いました。

調査の結果は，縄文時代早期から後期にかけての永い年月にわたっての住居址が数多く発見された外，屋外での生活の場とみられる集石炉や，完形の土器をはじめ多くの土器片・石器類などが発見され，先人達の厳しい自然に堪えながらの生活をしたであろう事がしのばれ，貴重な成果を上げる事ができました。

調査にあたりましては，炎天の下または，寒風の吹く季節までの長期間にわたる発掘調査・報告書作成に格別の御盡力を賜りました佐藤甦信団長を始め調査員・作業員の方々の御努力，地区の方々・土地所有者の御理解，御援助のあったことを厚く御礼申し上げます。

平成３年３月２日

喬木村教育長　　下　岡　重　尊

例　　言

1．本書は長野県下伊那郡喬木村伊久間原遺跡下原面の発掘調査報告書である。
2．伊久間原遺跡下原面に社会福祉法人悠生寮建設に伴う事前の発掘調査を喬木村教育委員会が実施した。
3．調査は平成元年（1989）8月～11月にかけ発掘し，平成2年度に報告書を刊行した。
4．本書の記載については，住居址を優先し，時代順を原則とした。遺構図・遺物図は本文と併せ挿図とし，写真図版は本文末に付した。
5．報告書は佐藤がまとめたが，一部の執筆「土壙及び石器一覧表」は牧内が分担した。
6．遺構・遺物の実例は佐藤が行い，牧内が補佐し，製図は田口が担当した。
7．本書の遺構図に記した数字はそれぞれの穴の深さをcmで表わした。
8．出土遺物・地層については，松島信幸・神村　透・宮内恒之・伴　信夫の四氏から指導を受け，縄文中期土器の復原は福沢幸一氏による。
9．遺物は喬木村歴史民俗資料館に保管してある。

目　　次

序……1
例　言……2
目　次……2
挿図目次……3
Ⅰ　環　境……5
　1．自然的環境……5
　2．歴史的環境……6
Ⅱ　経　過……10
Ⅲ　調査結果……11
　(I)　遺構・遺物……11
　　1．住居址……12
　　(1)　縄文早期……12
　　(2)　縄文前期……20
　　(3)　縄文中期……30
　　(4)　縄文早・前・中期とみる住居址……36
　　(5)　縄文後期……51
　　2．土　壙……53
　　3．柱列址・柱穴群……59
　　4．集石炉……60
　　5．竪穴遺構……62
　　6．方形周溝……62
　　7．溝　址……62
　　8．出土石器一覧表……65
Ⅳ　まとめ……69
図　版……73
調査組織

挿　図　目　次

第１図　伊久間原遺跡位置及び周辺主要遺跡図……6
第２図　〃　地形図及び今次調査図……7
第２図Ｂ　〃　立合調査における遺構分布図……8
第３図　土層断面図及び土層調査図……9
第４図　遺構確認調査図……10
第５図　遺構分布図……11
第６図　伊久間原下原面１号住居址……12
第７図　〃　〃　出土遺物……13
第８図　〃　８号・９号住居址……13
第９図　〃　９号住居址出土遺物……14
第10図　〃　13号住居址……15
第11図　〃　〃　出土遺物……16
第12図　〃　14号住居址……17
第13図　〃　〃　出土遺物……18
第14図　〃　17号住居址……19
第15図　〃　〃　出土遺物……19
第16図　〃　38号住居址……20
第17図　〃　〃　出土遺物Ⅰ……23
第18図　〃　〃　〃　Ⅱ……24
第19図　〃　〃　〃　Ⅲ……25
第20図　〃　11号住居址……22
第21図　〃　〃　出土遺物Ⅰ……26
第22図　〃　〃　〃　Ⅱ……27
第23図　〃　〃　〃　Ⅲ……28
第24図　〃　〃　〃　Ⅳ……29
第25図　〃　30号住居址……30
第26図　〃　〃　出土遺物Ⅰ……31
第27図　〃　〃　〃　Ⅱ……32
第28図　〃　〃　〃　Ⅲ……33
第29図　〃　４号住居址……34
第30図　〃　〃　出土遺物……35
第31図　〃　２号住居址・土壙20号・土壙21号……36
第32図　〃　３号住居址……37
第33図　〃　６号　〃　……37
第34図　〃　10号　〃　……38
第35図　〃　２号・３号・６号・10号・12号・15号・16号出土遺物……39

第36図　伊久間原下原面12号住居址……38
第37図　〃　15号　〃　……40
第38図　〃　16号　〃　……40
第39図　〃　18号住居址・土壙16号……41
第40図　〃　19号　〃　・土壙24号……41
第41図　〃　20号住居址……42
第42図　〃　22号・23号住居址……42
第43図　〃　25号・26号住居址・土壙30号……43
第44図　〃　21号・24号・28号住居址・土壙25号……44
第45図　〃　29号住居址……45
第46図　〃　31号　〃　……46
第47図　〃　27号　〃　……46
第48図　〃　32号　〃　……47
第49図　〃　19号・20号・22号・26号・27号・29号・
32号・33号・34号・35号・37号住居址出土遺物……49
第50図　〃　34号・35号・36号住居址……48
第51図　〃　37号住居址・土壙３号……50
第52図　〃　５号住居址……51
第53図　〃　７号　〃　……51
第54図　〃　５号・７号・８号住居址出土遺物……52
第55図　〃　33号住居址……47
第56図　〃　土壙郡Ⅰ（土壙１号・２号，土壙10号～15号）……56
第57図　〃　土壙郡Ⅱ（土壙４号～９号）……56
第58図　〃　土壙郡Ⅲ（土壙17号～19号）……58
第59図　〃　土壙出土遺物（１～４…土壙10号，５・６…土壙号14，７・８…土壙17号，
９・10…土壙20号，11・12…土壙23号，13…土壙24号，14～21…土壙28号，
22…土壙29号）……57
第60図　〃　土壙22号・28号……58
第61図　〃　〃　26号・29号……58
第62図　〃　〃　31号・32号……58
第63図　〃　柱列址Ⅰ……59
第64図　〃　柱穴郡Ⅰ……60
第65図　〃　集石炉Ⅰ……61
第66図　〃　〃　Ⅱ……61
第67図　〃　竪穴遺構Ⅰ……62
第68図　〃　方形周溝Ⅰ……63
第69図　〃　溝址Ⅰ・Ⅱ……65
第70図　〃　集石炉Ⅰ・Ⅱ，竪穴遺構，溝址Ⅱ，柱列址Ⅰ，囲溝址出土遺物……64
第71図　〃　縄文早期末住居址地分布図……69
第72図　〃　出土縄文早期末土器……70

Ⅰ 環　　境

1．自然的環境

伊久間原遺跡下原面は長野県下伊那郡喬木村伊久間原下原に所在し，伊久間原遺跡群の一環をなす。

長野県飯田・下伊那地方は東に赤石山脈が連なり，西に木曽山脈が聳え，その中間を天竜川が南下してその両側に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸一竜東地区は背後には赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が大西山（1741m），鬼面山（1889m），氏乗山（1818m），金森山（1702m）となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが，西面は数列の断層による起伏をもちながら段丘面に達し，天竜川の西岸一竜西地区に比し山麓からのびる扇状地は狭小で段丘面の幅員も全般的には狭いが，豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく，特に北から豊丘村の田村原，林原，伴野原，喬木村の城原，帰牛原，伊久間原，さらに飯田市下久堅の中尾，庚申原と続く伊那谷中位段丘面の幅は広く典型的な段丘地形を形成している。

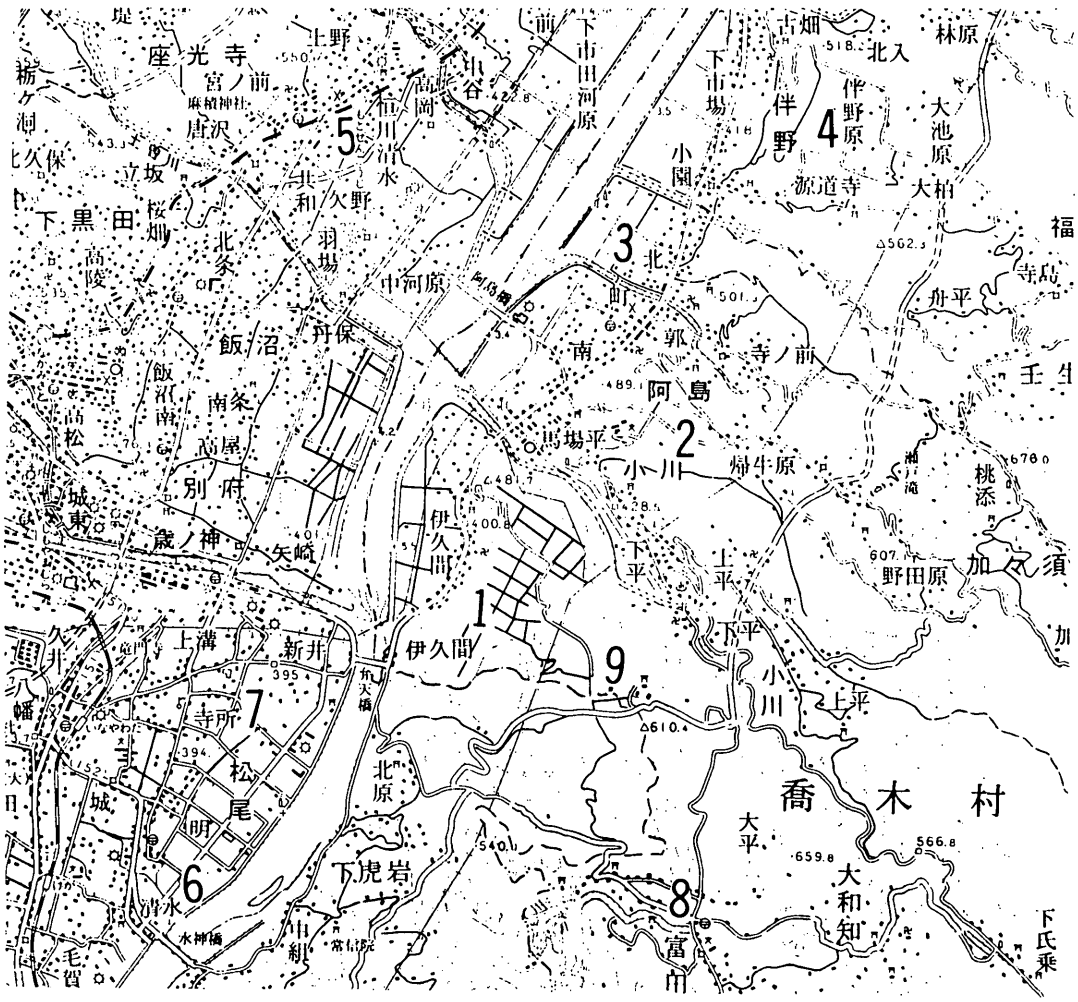
遺跡の所在する伊久間原面は南北1250m，東西150～300m，標高487～498mの広い段丘面をなし，西は緩い段丘崖となって一段低位の下原面となる。南北450m，東西は南側で120m，北にいくに従い狭く，三角形の台地形をなし，標高469～470m。ともに伊那谷第5段丘に位置づく。

北は高距70m余の急峻な浸蝕崖となり，崖下を小川川が西流し天竜川に注いでいる。西は伊久間原面で95m，下原面で75mの比高をもつ段丘崖となり，その崖下に伊久間部落が南北に細長く展開し，3～4mの比高をもって天竜川氾濫原の水田地帯となり，伊久間原面と天竜川との比高は100m前後である。天竜川の氾濫低地をのぞみ，同位段丘面にある飯田市街地と相対している。南は境ノ沢の深い浸蝕谷によって切られ，沢を距てて飯田市下久堅の中尾，庚申原と続くが，それ以南は小河川の浸蝕により段丘面は狭小となる。東は約60mの比高をもつ高位段丘の大原台地，さらに高位の伊那谷第1段丘の机山（610m）の残丘があって，その背後は九十九谷と呼ばれる深い浸蝕崖となっている。さらに伊那層よりなる丘陵が東にたかまって続き，この丘陵の東側に断層縦谷により形成された集落富田，飯田市上久堅があり，その背後に伊那山脈の鬼面山，氏乗山，金森山が聳えている。

下原面の微地形をみると，北から東は上段の伊久間原面の比高17mの緩い段丘崖が下原面へ下がり，下原の大半は平坦面をなすが，南西端部にある調査区域（第2図）は，用地境北東端から南西端の段丘縁部の200m間の標高は，北東で468.5m，南西端は464mで4.5mの比高をもっており，段丘端部の傾斜が強まっている。南の縁部には境ノ沢の小さな支流の谷頭浸蝕が抉りこんでいる。

Ⅰトレンチ西壁土層断面図（第3図）にみると，耕土（表土）は10cm前後でローム層となり，また表土下の耕作による荒れを含めても，20cm程である。表土の浅いのは地形的によるものと見られ，調査区域北側の平坦面と比べ差が大きい。

土層調査図（第3図右下）にみるように，表土及び耕作荒れ（Ⅰトレンチ南西で，ここは表土が他より深い）の下は，新期ロームが3層に分かれてみられ，1m余の堆積であって，その下は小石混じりの砂層・礫層・砂質層があり，地表下2.3mで砂礫層となる。



第1図　伊久間原遺跡位置及び周辺主要遺跡（1：50,000）

1　伊久間原遺跡，2　帰牛原遺跡，3　阿島遺跡，4　伴野原遺跡，5　恒川遺跡群，6　清水遺跡，7　寺所遺跡，8　地神遺跡，9　大原遺跡

2．歴史的環境

伊久間原遺跡の調査は，昭和27年・29年度農道開設の際，住居址13軒（縄文中期3・古墳時代10）が調査され，昭和52年度畑灌水工事に先立つ調査で，伊久間原面で住居址16軒（縄文早期末2・中期10・晩期1，弥生後期3），円形周溝墓2，土壙13基が，下原面では住居址10軒（縄文中期2・後期3，弥生後期3，中世1，不明1），柱列址1，方形周溝墓1，土壙4基等が発掘調査された。

昭和53年度畑灌水工事が55.7ｈａの伊久間原全面の畑地帯で行われ，その配管のため果樹全面の畑地帯で行われ，その配管のため果樹園は12m，桑畑・野菜畑は15mの間隔に幅30cm，道路に沿った幹線では幅70cm，深さ70cmの溝が掘られるため，遺構の一部は破壊されることになった。このため工事中の立合調査によって一部のみ確認された住居址は342軒の膨大な数にのぼった（第2図Ｂ）。内訳は縄文時代では早期末22，前期1，中期104，後・晩期40，弥生時代中期24，後期68，古墳時代前・中期11，後期68，平安時代4軒である。

伊久間原で発掘調査・立合調査におけるトレンチ設定によって，合計381軒の住居址の存在が想定され，

第２図　伊久間原遺跡地形図及び今次調査位置図（１：7，500）

各時代にわたる集落が営まれた一大遺跡であることが知られる。

この立合調査で下原面の大半は，工事請負業者が調査了承事項を無視し，工事を終了したため未調査となった。

伊久間原周辺の主要遺跡を概観すると，北の同位段丘面にある帰牛原遺跡は，縄文中期後半・弥生後期の集落が発掘され，銅鏃出土が注目された。段丘西端部には，方形・円形周溝墓が9基発掘調査され，畑灌水工事に伴う立合調査で30基が確認調査されて注目されている。

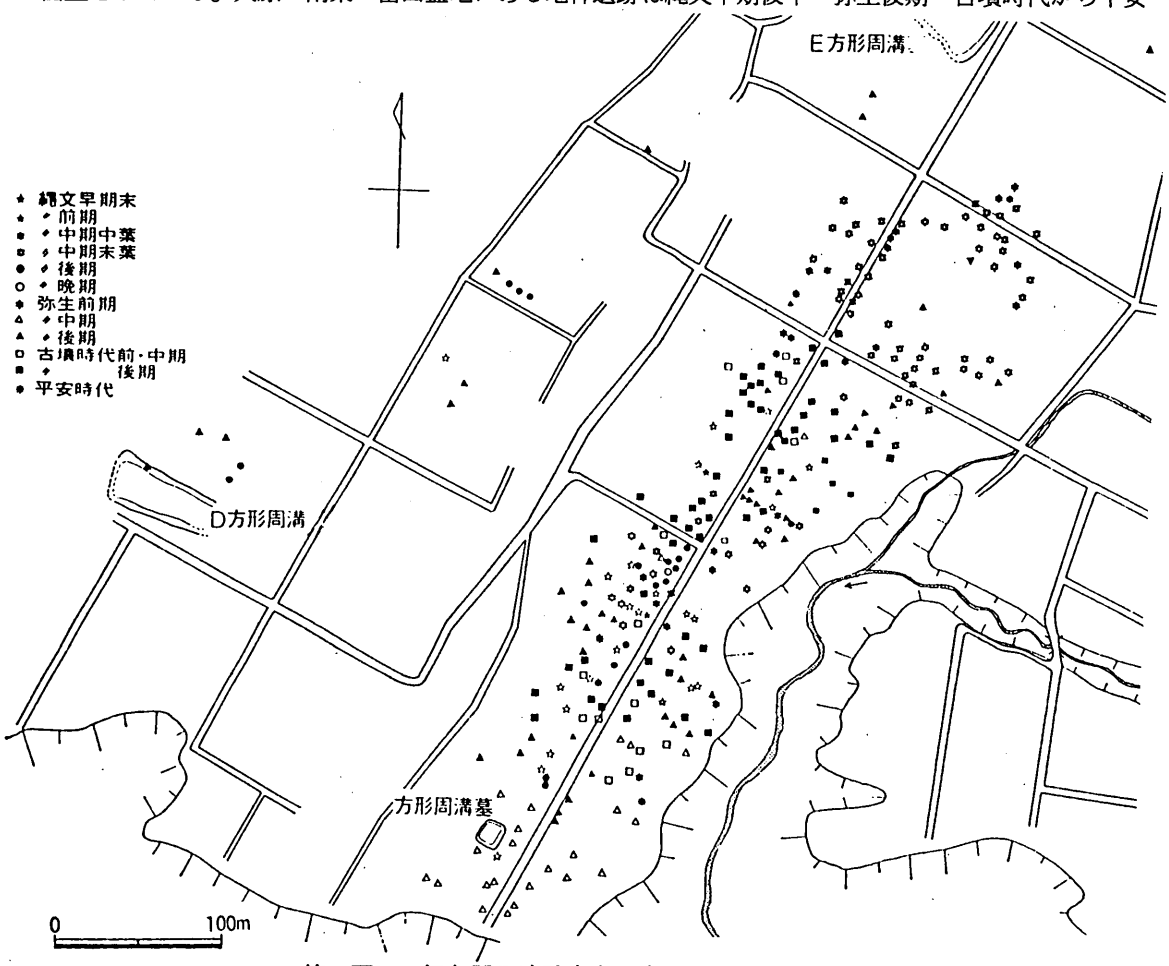
帰牛原の北に続く同位段丘の城原には，城原城跡があり，さらに北の伴の原遺跡は，縄文中期後半の大集落が調査され，パン状岩化物の出土で知られている。

城原段丘崖下の天竜川に面す最低位沖積段丘面にある阿島遺跡は，弥生中期前半の阿島式土器の標準遺跡である。

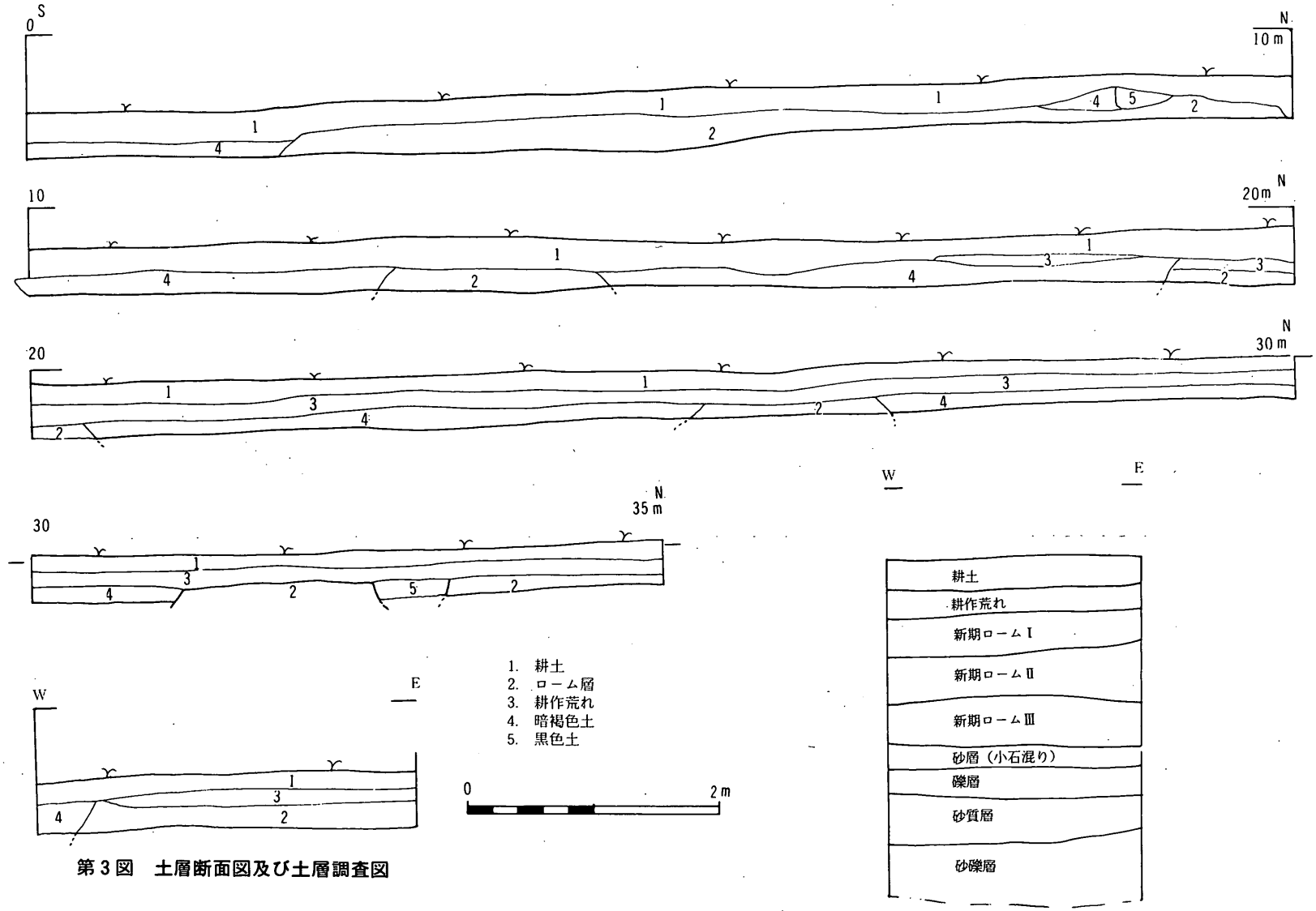
天竜川西岸をみると北から恒川遺跡群がある。弥生中期末の恒川式土器の標準遺跡であり，弥生・古墳・奈良・平安時代にかけての大集落地があり，和銅開珎（銀銭）をはじめ，奈良・平安時代の貴重な遺構・遺物の出土をみ，伊那郡衙址と推定され，重要遺跡として注目を浴びている。

飯田松川の南には，弦生中期初頭の標準遺跡，寺所遺跡があり，その南の天竜川に沿う低位面に，弥生後期から古墳時代前・中期にかけての遺構・遺物の多くの出土をみた清水遺跡がある。

伊久間原の東の上位段丘面にある大原遺跡は，縄文中期中葉の集落址が発掘され，集石炉と有舌尖頭器の出土をみている。大原の南東の富田盆地にある地神遺跡は縄文中期後半・弥生後期・古墳時代から平安



第2図B　伊久間原遺跡立合調査における遺構分布



第３図　土層断面図及び土層調査図

期の集落址が発掘調査されている。

喬木村で現在知られている古墳は45基あり，そのうち郭１号古墳は前方後円墳であり，竜東地区唯一の前方後円墳である。

Ⅱ　経　　過

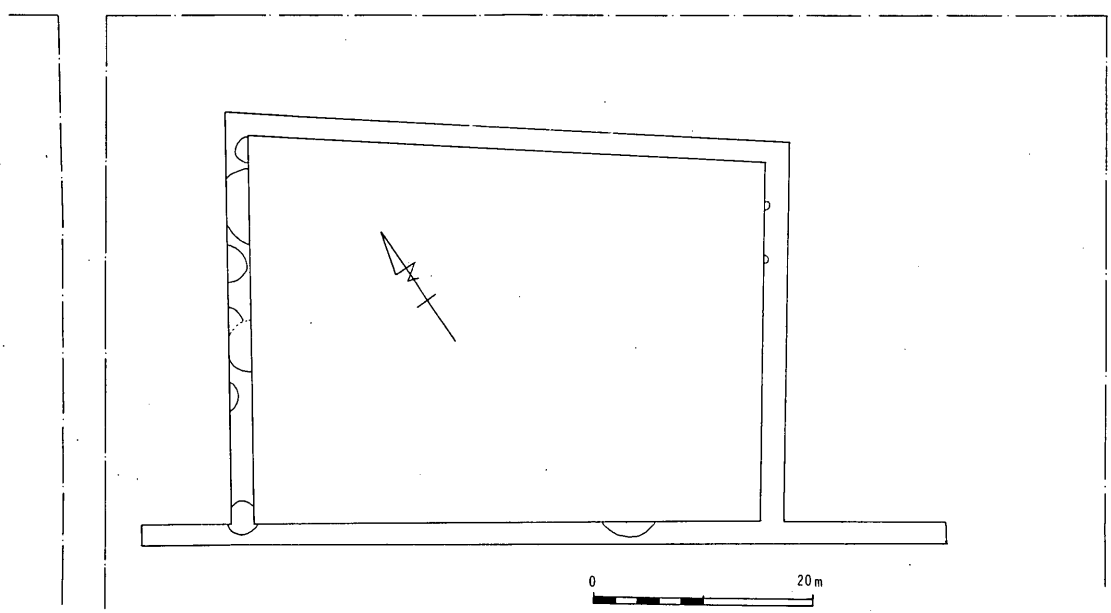
昭和63年に，伊久間遺跡下原面の南西端部に，社会福祉法人悠生寮の建設が決定した。この建設予定用地は，伊久間遺跡群においての唯一の未調査地区であり，遺構の存在は確認されていないが，土器・石器の表採がされている。このため工事着工前の発掘調査が必要となる。これに備えての遺構の存在と分布状況を知るため，喬木村教育委員会が遺構確認調査を実施した。

調査は，昭和63年12月２日に建物建設予定地に，幅２ｍのⅠ～Ⅳトレンチを設定し，調査範囲の大半は桑畑であり，５日から重機による抜根と表土を排除し，遺構検出にかかり，住居址９軒と土壙２基の存在を確かめる（第４図)。

さらに運動場予定地の地ならしを考慮し，Ⅴ・Ⅵトレンチを設定調査する。住居址とみられる黒土の落ちこみを２個所に検出するが住居址との確認はできなかった。各トレンチの土層調査なし，Ⅱトレンチ西端２ｍの北壁を，2.3ｍまで掘り下げ土層断面調査（第３図）をなし，８日に確認調査を終る。

平成元年，悠生寮建設の運びとなり，９月４日発掘個所を確認し，地主・小作関係の調整・養蚕と桑切り，時期のかねあい等の問題も残っており，排土盛土個所等，土地関係者・役場職員立合の上決定し，７日より確認調査時Ⅰトレンチ個所をⅠ調査区とし，重機による排土なし，遺構検出にかかる。

測量基点を国土調査係に依頼し，基点をさがし，決定する。標高は，農林省東京農地事務局（国際航業株式会社調製）１：5000の地図による標高測定点によって決める。



第４図　伊久間原遺跡下原面　遺跡確認調査図

Ⅰ調査区より順次Ⅱ・Ⅳ区へと重機排土し，遺構検出し，その結果，縄文時代早期末，前期前半，中期中葉・後半，後期にわたる住居址38軒，土壙32基，竪穴遺構１，集石炉２基を検出した。これらを写真撮影・測量調査を行い，11月25日現地作業を終了した。

その後，遺物の整理・復元・実測作業，図面・写真の整理等を行い，報告書の作成にかかる。

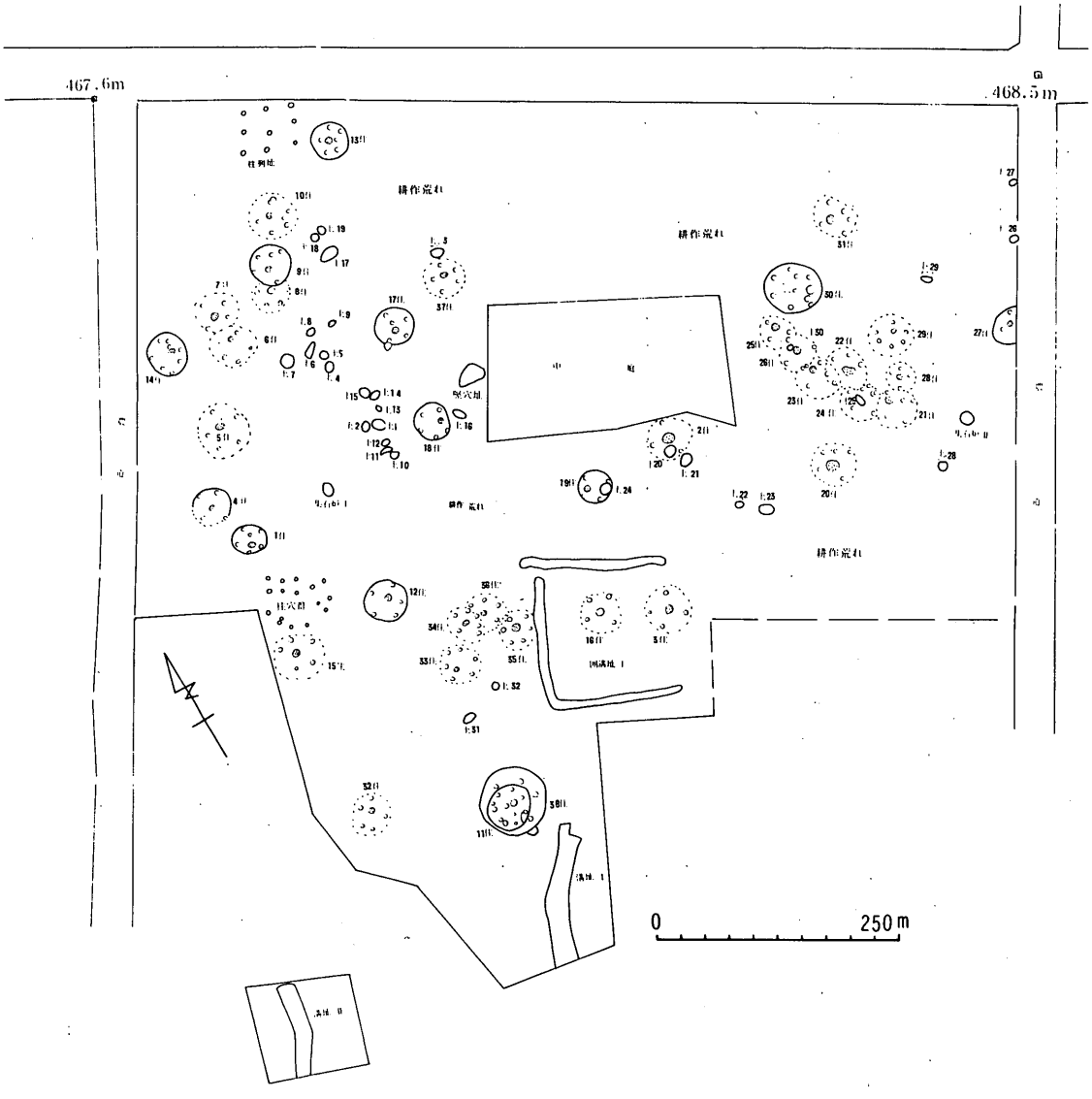
Ⅲ 調　査　結　果

(I) 遺構・遺物

下原面で発掘調査した遺構は次のようである（第５図）。

(1) 住居址　38軒

縄文時代　早期末５，前期前半２，前期とみる13，中期中葉２，中期後半３，後期３，不明13



第５図　伊久間原遺跡下原面　遺構分布図

(2) 土　壙　32基
(3) 竪穴遺構　1
(4) 集石炉　2
(5) 柱列址（建物址？）　1
(6) 柱穴群　1
(7) 方形周溝　1
(8) 溝　址　2

1．住　居　址

(1) 縄　文　早　期

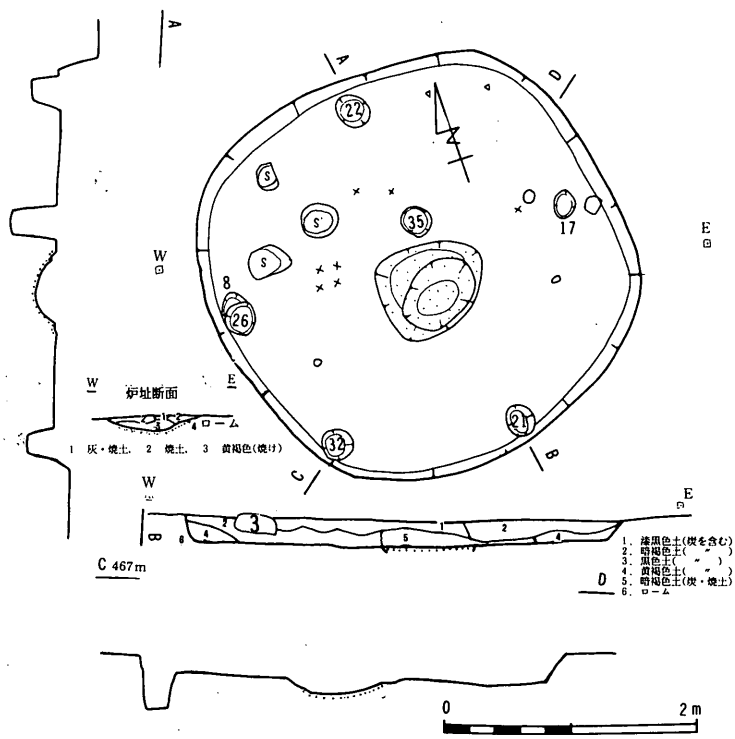
下原面1号住居址（第6図）

調査区域内の西南端部にあり，北1.5mに4号住居址がある。3.2×3.2mの隅丸方形とみる形状をなす竪穴住居址である。主軸方向N14°Eを示す。覆土の大半は炭を含む漆黒色土と暗褐色の二層よりなる。炉址の上は暗褐土に多くの岩と焼土が含まれていた。壁高は北で30cm，南は僅かに壁を残すのみとなる。床面は堅く，主柱穴は5個が壁に沿ってあり，炉址を僅かにはなれて，深さ35cmの柱穴が1個つく。炉址は，ほぼ中央部にあり，地床炉で楕円形，二重の浅い掘りこみをなす。

遺物（第7図）は少なく，土器には1～9があり，縄文早期末の東海系の土器である。2～5・7は2～4mmと薄手の焼は堅く，黒褐色を呈し条線文が施される。6・8・9は無文，8は薄手で指圧痕が著しい。6・9はやや厚みをなし，褐色を呈し，9の底部は砲弾形をなす。1の縄文施文土器は，胎土に僅か繊維を含み，黒曜石の粉末が混入されている。

石器には，10の石皿・12の敲打器・13の磨石・11の石鏃があり，黒曜石の破片数点の出土をみる。

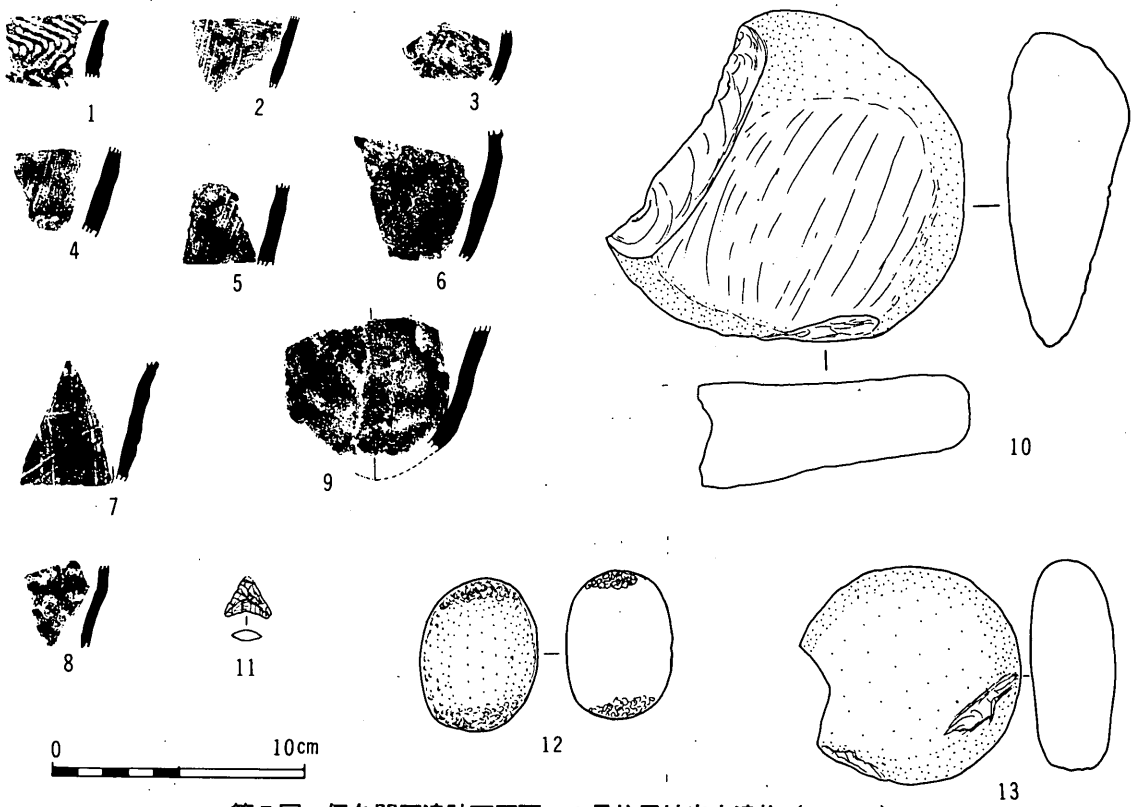
遺物からみて，本址は縄文早期末の住居址である。



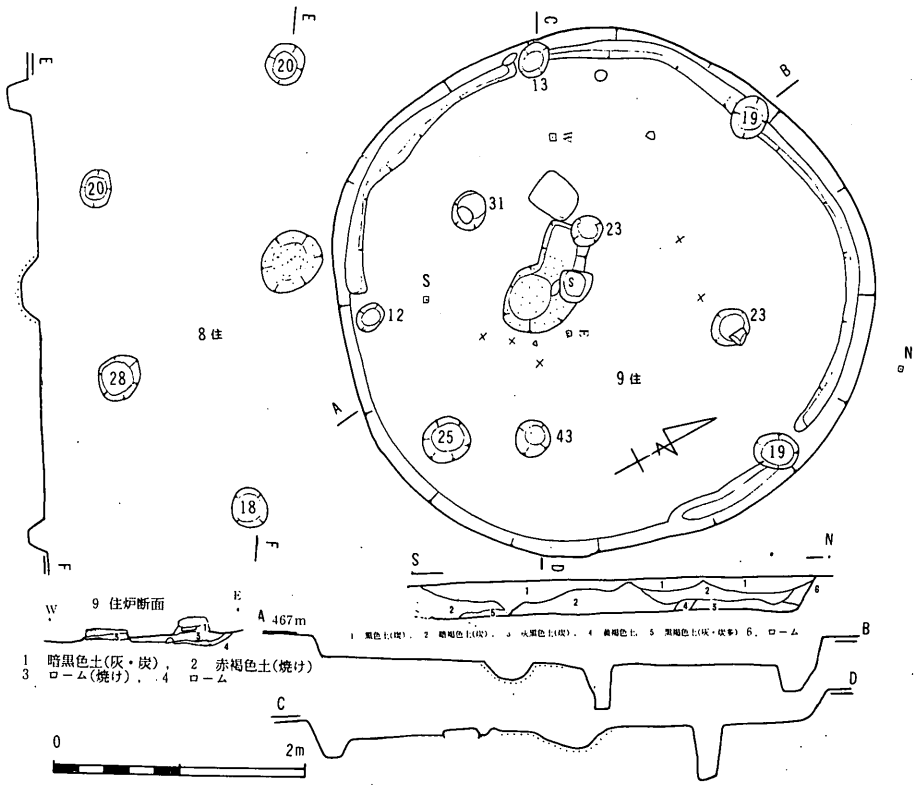
第6図　伊久間原遺跡下原面　1号住居址

下原面9号住居址（第8図）

調査区域の北西部にあり，北に10号住が隣接し，南に8号住の一部がのっている。南北4.25×東西4.1

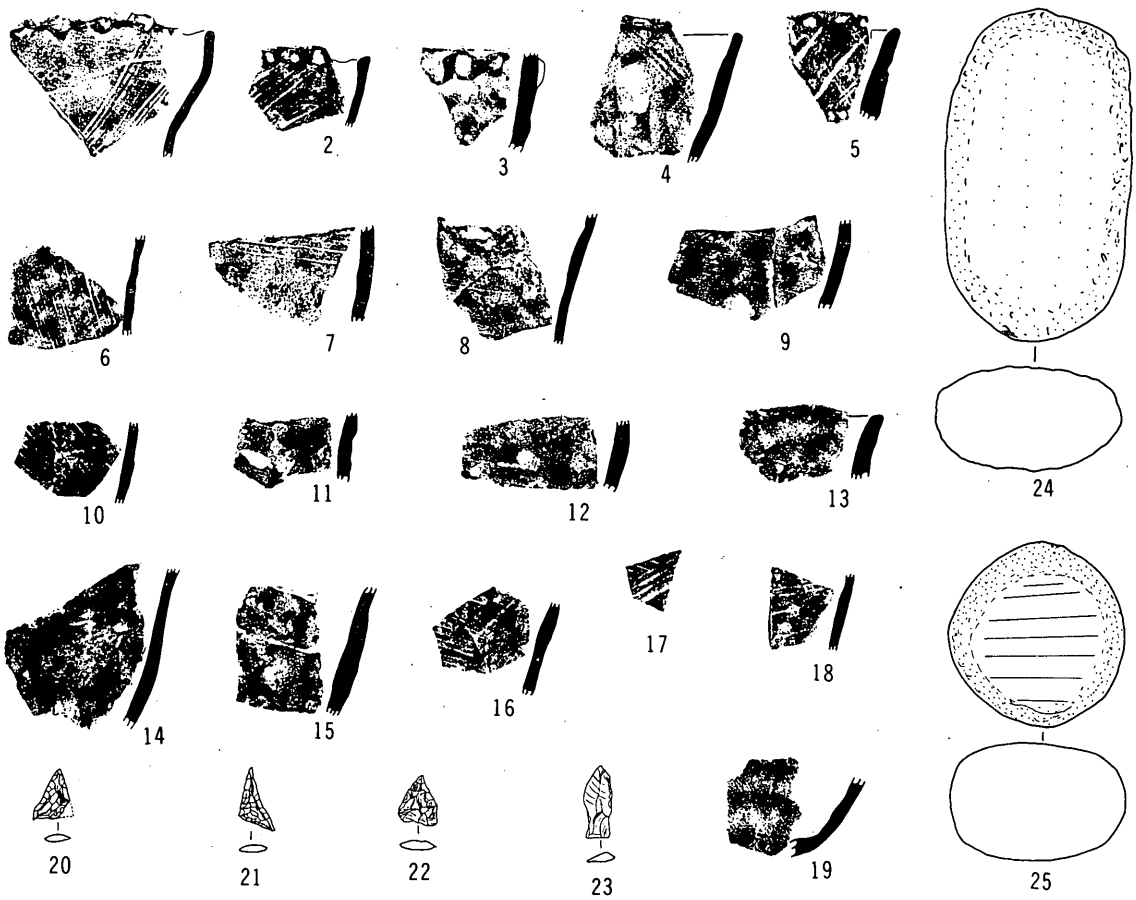


第７図　伊久間原遺跡下原面　１号住居址出土遺物（１：３）



第８図　伊久間原遺跡下原面　８・９号住居址

mの円形をなし，主軸方向 N88°W を示す。覆土は炭を含む上層に黒色土，下層に暗褐色が大半を占め，炉址上には灰・木炭を多く含む黒色土が覆っている。壁高は北側で28cm，南側で16cmと浅くなり，ローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く南側の約4分の1を除き周溝がめぐり，主柱穴は5個，周溝を分断する状態に掘りこまれている。炉址の北側に沿って柱穴1個が住居址のほぼ中心近くに掘りこまれている。炉址は中心より西に寄っており地床炉であり，焼土は著しい。円形をなすが，北西に向って方形の掘りこみがつき，その西に平らな石が据えられている。



第9図　伊久間原遺跡下原面　9号住居址出土遺物（1：3）

遺物（第9図）はあまり多くない。土器は縄文早期末の東海系の土器である。1・2は口端部に指頭による圧痕がめぐり，波状口縁をなす。3は横位の圧痕をもつ隆帯をめぐらし，5は口唇に圧痕をめぐらし，厚手の土器で斜沈線とこれに交差する条線がみられる。4は指圧痕をもち，交差する条線が施されている。1・2・6～10・16～18は薄手の条線文土器である。12～15・19は厚手の無文土器で，指圧痕がみられ，19の底部は砲弾形を呈すとみられる。

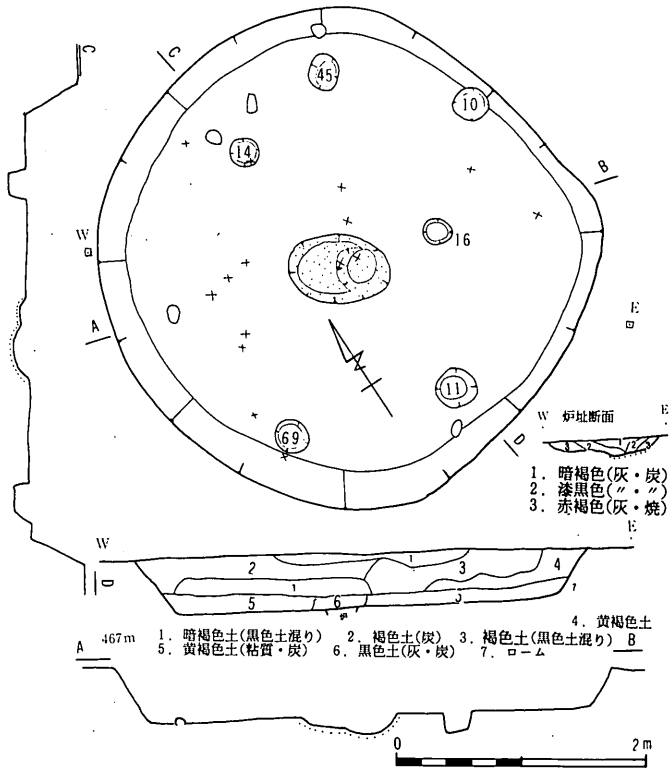
石器には，20～22の石鏃・23はナイフ形石器とみるがはっきりしない。24は風化しており磨石ともみられる。25は磨石である。

下原面13号住居址（第10図）

北の道路境より南2.5mにあり，東側は耕作の荒れとなっている。南北3.83×東西3.72mのややゆがむ円形をなし，主軸方向 N55°W を示す。覆土は上層は暗褐色土・褐色土で黒色土が混ざり，炭を含む。下層は炭・灰を含む粘質の黄褐色で炉址直上は灰・炭を含む黒色土である。壁高は北で45cm，南で43cmと深

くローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は5個不規則に配置し，南西側柱穴は69cm，北東側は45cmと深いが他は10〜14cmと浅い。炉址の東35cmに柱穴1個が掘りこまれている。炉址はほぼ中心部近くにあり，楕円形の地床炉であり，東側は円形にさらに深く掘りこんでおり，焼土は著しく，そこより土器片の出土をみている。

遺物（第11図）土器は縄文早期末東海系土器群が主体となる。薄手土器には，1・2の無文土器，3・6は口端から条線を，4は口縁に押引列点をもち，その下に斜条線を施す。13は頸部とみるくびれ部に爪形圧痕をめぐらし，上下に羽状条線を施す。12は半截竹管による条線を施す等の一群であり，暗黒色・暗褐色を呈し，焼成は堅い。8は口縁に隆帯をめぐらし，列点文を施している。



第10図　伊久間原遺跡　13号住居址

器の厚みが5〜8mmの厚手土器は，明るい黄褐色，または褐色を呈す。5は口端に刻みを付け，櫛状具による浅い条線を施すもの，15は胴部を横位の圧痕のある隆帯が付くもの等がある。23〜25は縄文施文土器で僅かに繊維を含み黒曜石の粉末の混入がみられる。

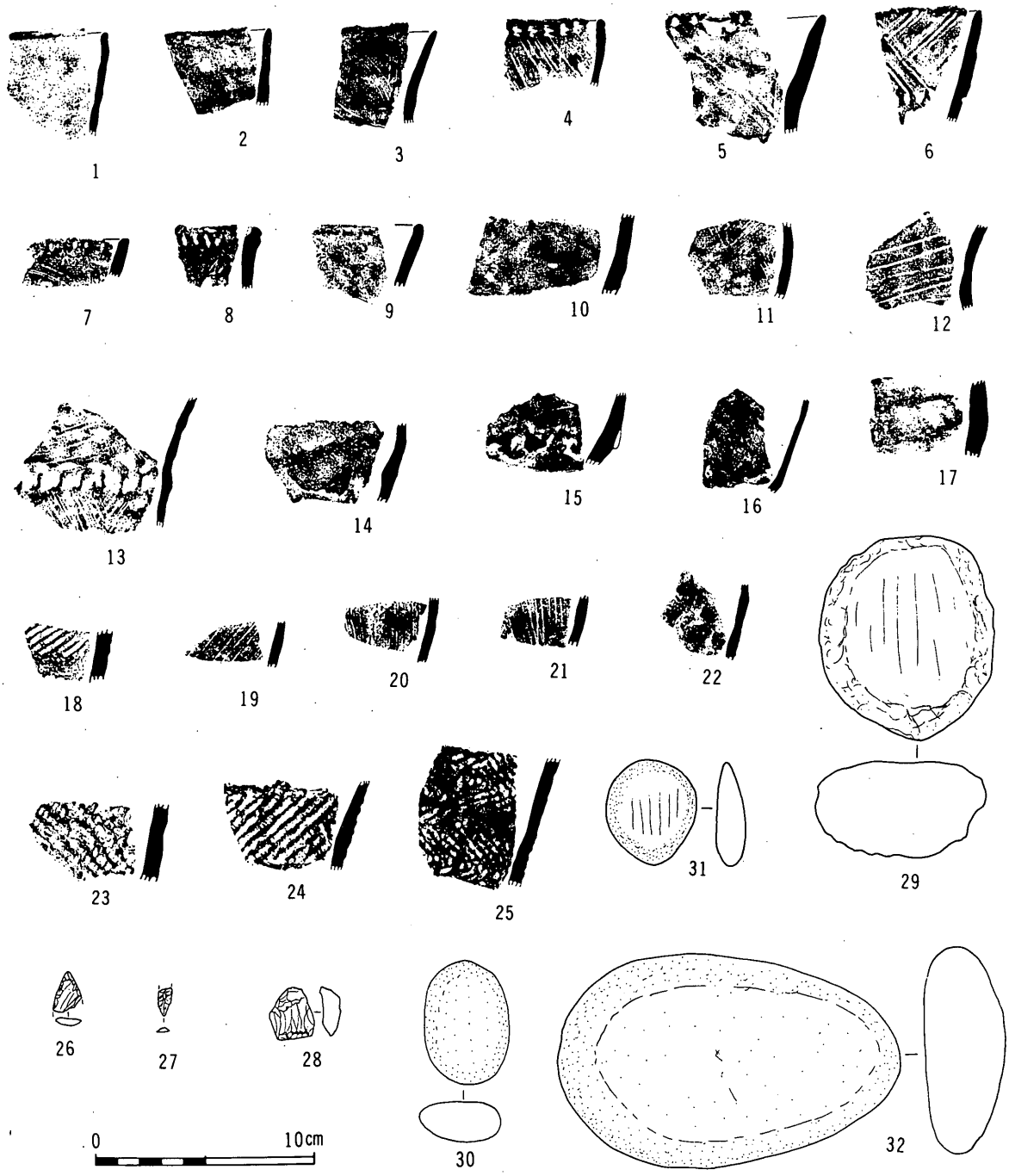
石器には，26の石鏃・27の石錐は基部を欠き，28はスクレバーとみる。30・31は磨石，32は台石，29は風化がすすみすすみはっきりしないが台石とみる。

下原面14号住居地（第12図）

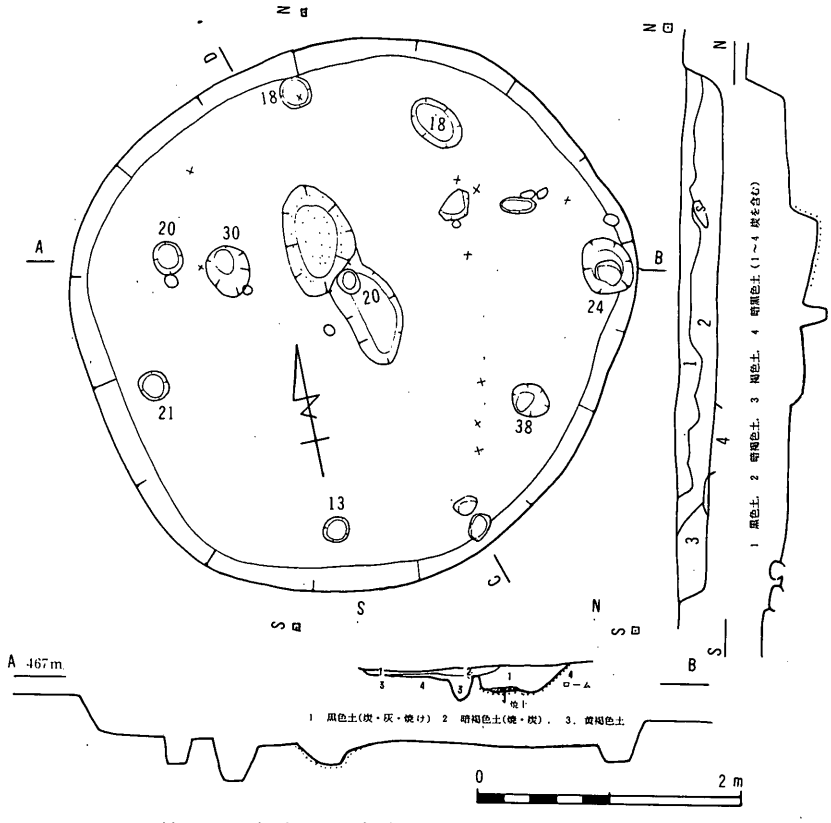
西側の道路に沿ってあり，東に7号・6号住が隣接している。南北4.5×東西4.7mの円形をなし，主方向N35°Eを示す。覆土の大半は，炭を含む黒色土と暗褐色土の2層よりなる。壁高は北が30cm，南は15cmと浅くなる。床面は堅いが，平坦でない。主柱穴は6個とみられ，炉址に接した西側に1個のしっかりした柱穴がある。炉址は中心より北に寄ってあり楕円形の地床炉で焼土は著しい。南側に長楕円形の浅い掘りこみが付く。

遺物（第13図）土器は縄文早期末東海系の土器が大半を占める。1は口端に刻みをめぐらし，半截竹管による条線を羽状に施している。2・4・5は，口縁または頸部に隆帯を貼布し，箆・半截竹管で爪形文・斜沈線を施し，その下に2は無文，4・5は櫛状具により三角形の条線を施している。薄手土器には条線文を，厚手土器は無文が多く，指圧痕が顕著にみられる。20・21の縄文施文土器は僅かな繊維を含み，黒曜石紛末の混入がみられる。底部に22の尖底と23の丸底がみられる。

石器には，24・25の台石，26・27の磨石・28の凹石・29の敲打器がある。



第11図　伊久間原遺跡下原面　13号住居址出土遺物（１：３）



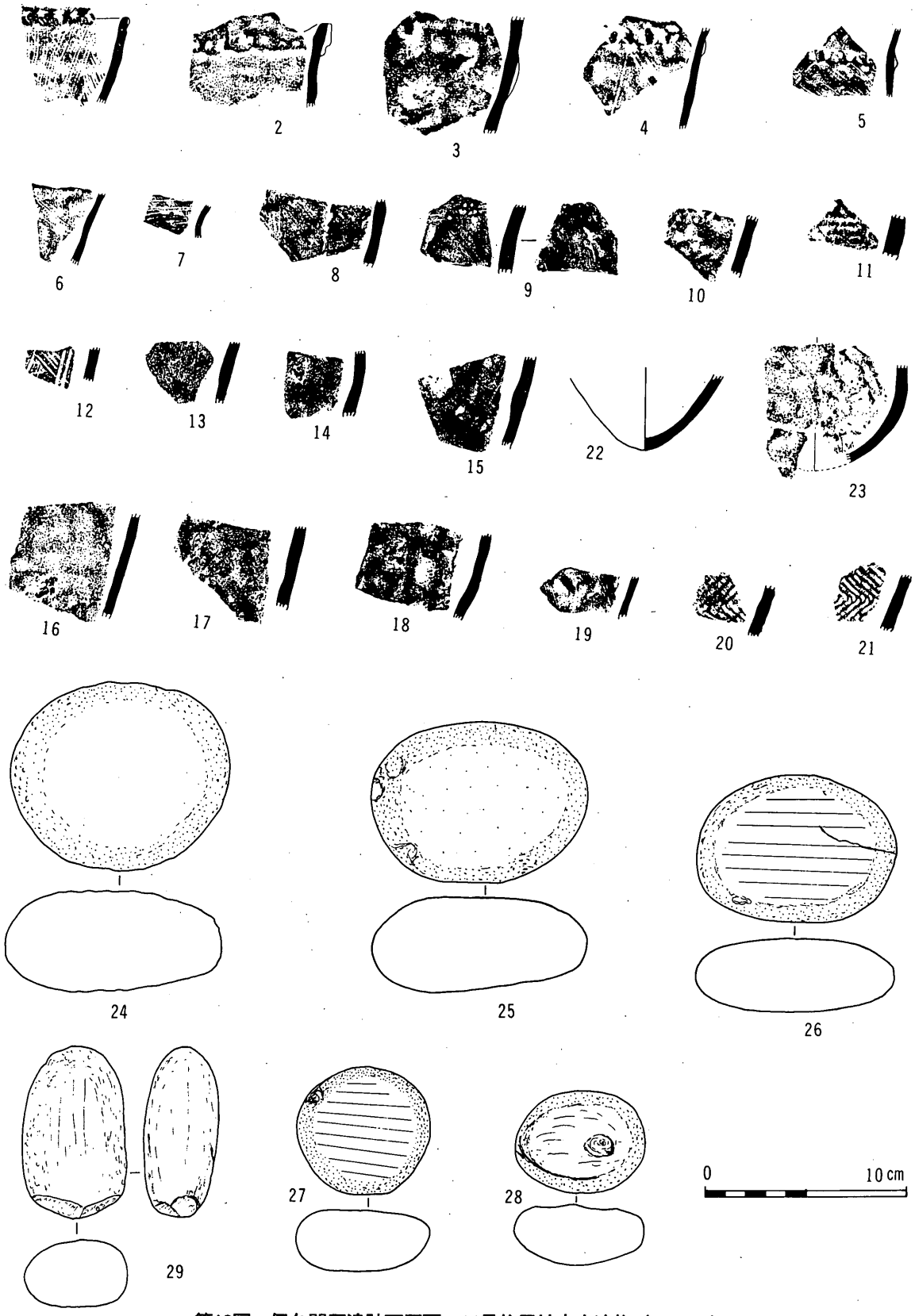
第12図　伊久間原遺跡下原面　14号住居址

下原面17号住居址（第14図）

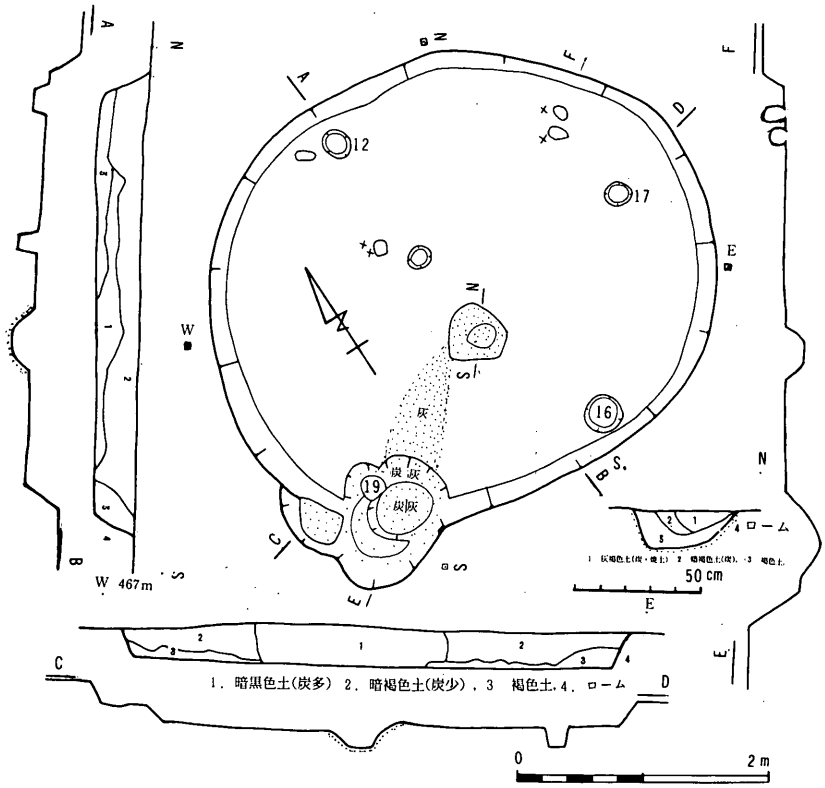
37号住の西2.5m，土壙群Ｉの北５ｍにあり，南北4.05×東西3.6mの楕円形をなし，主軸方向Ｎ16°Ｅを示す。覆土は東西断面では中央部は炭を多く含む暗黒色土が占め，東・西側の上層は僅か炭を含む暗褐色土，その下層は褐色土となる。南北断面では，上層に僅か炭を含む暗褐色土，中央部は多量の炭を含む暗黒色土，両側は褐色土となる。壁高は南北とも25cmで，床面は堅く，平坦をなす。主柱穴は４個，壁に沿ってあり，炉址北40cmに柱穴１個が付く。炉址は中心よりやや南東に寄ってあり，地床炉で掘りこみは30cmと深く，焼土は著しく，さらに焼土は，炉址より南西に細長く続き，南西壁には深さ25cm程の径70cmの掘りこみとなり，炭・灰が充満していた。何の施設が確認にいたらなかった。

遺物（第15図）土器は東海系の縄文早期末の土器が主体となる。１は口縁下部に円形の突刺文をめぐらし，櫛状具による逆三角形の条線が施される。口縁に横位の隆帯を貼布し，それに刺突文を付し，その下に条線を施す２・３がある。２は横位から折れて縦の貼布帯をさげている。薄手土器の多くは斜条線文が施され，厚手土器は無文が多く，共に指圧痕が著しい。15・16は黒曜石粉末を含む縄文施文土器である。

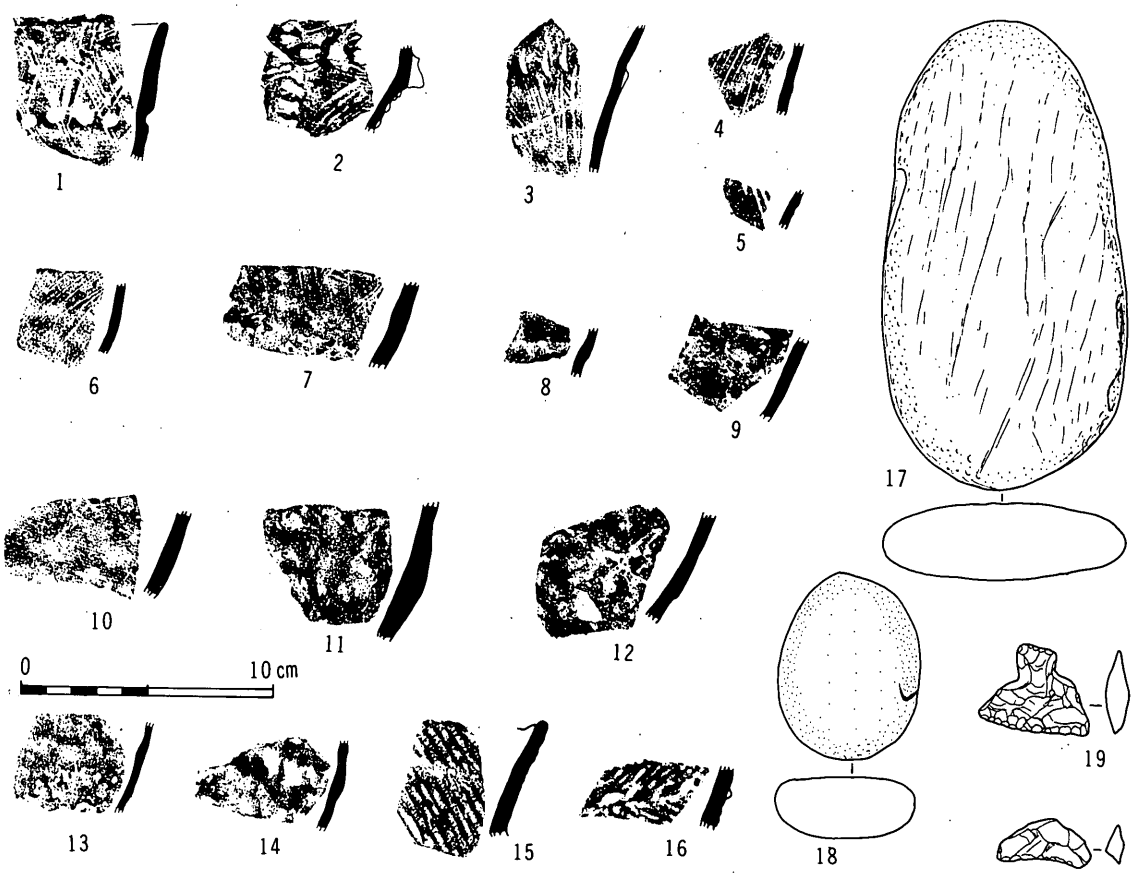
石器には，17の台石・18の磨石・19の石匙・20は基部を欠く石匙とみるがある。



第13図　伊久間原遺跡下原面　14号住居址出土遺物（１：３）



第14図　伊久間原遺跡下原面　17号住居址

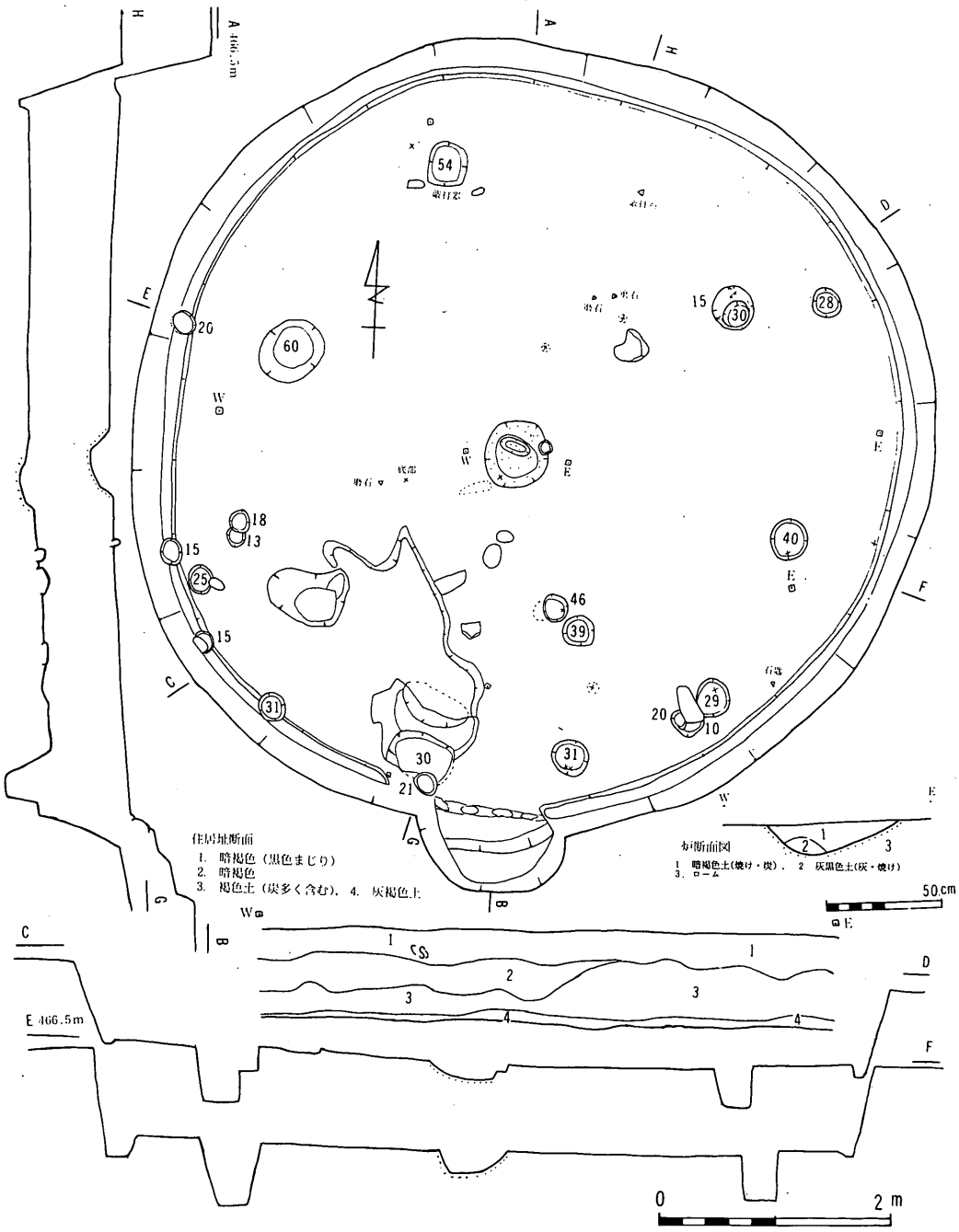


第15図　伊久間原遺跡下原面　17号住居址出土遺物（１：３）

(2) 縄 文 前 期

下原面38号住居址（第16図）

調査区域の南端部にあり，上に11号住がのっている。南北6.8m×東西6.95mの円形をなし，主軸方向N5°Eを示す。覆土は，上層に黒色混じりの暗褐色土，次いで暗褐色土があって，炭を多く含む褐色土が大半を占め，床面直上は5～10cm厚みの灰褐色土となる。壁高は北で80cm，南で68cmと直に深くローム



第16図　伊久間原遺跡下原面　38号住居址

層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は張床となり，南側には凹凸があり，平坦ではない。主柱穴は6個とみる。他に支柱穴とみるが，数個ある。壁に沿って幅10〜15cm，深さ5〜10cmの周溝が出入口部を除き，全面にめぐる。炉址は，ほぼ中心部にあり，径55〜60cm，深さ15cmの地床炉で焼土は顕著である。南壁を半円に二段に掘りこみ，出入口としている。下段部は粘土を枕状に固めたのを並べ崩れを防いでいる。また，出入口の西側に40×60cmの楕円形に30cm掘りこむ貯蔵穴とみる穴が付き，その北側は一段高く張床が盛られている。

遺物は土器・石器とも多い。土器（第17・18図）は胎土に繊維を含まず，やや厚手で口縁部に竹管による平行線文（第17図2・3・9等）・爪形文（同図1・4〜6）などの文様を構成し，胴部以下に縄文を施す一群と，縄文のみ（同図7・21・26等）の一群があり，前期中葉の黒浜式に比定されるが主体となり，伊那谷を中心とする土器と思われる。これらに伴出して，関西係の薄手土器（第18図1〜13）がある。爪形文に縄文を併用した北白川下層Ⅱ式に比定される一群の土器である。1・2・7〜9は爪形の幅は広く段も密に付き，3は横八字状に強く押捺されている。

石器（第19図）には，石匙（1・3）・石鏃（4）・剥片石器（2）・打石斧（15）・磨石斧（5）・横刀形石器（7〜11・13）・敲打器（12・14・17・18）・台石（16）・磨石（19・20）等がある。17の敲打器はホルンヘルス製，頭部の敲打痕は著しいが基部を欠き大形であり，他の用途も考えられる。6は石棒，砂岩製である。これら石器の他に黒曜石・チアート片が多量に出土している。

下原面11号住居址（第20図）

38号住居址が埋った，その上に構築されている。南北5.1m×東西4.7mの楕円形をなし，主柱穴は6個，整った配置にあり，南壁に接して100×50cmの半円，深さ15cmの掘りこみが付き，出入口ともみられる。南と西に寄って2個の炉址が並ぶ。ともに地床炉で，覆土は南炉が，炭・焼土を含む暗褐色土，灰混じりの黄褐色土となり，西炉は灰炭を含む黒色土，焼土・灰を含む黄褐色土の下層は南炉と同じになる。南炉に接して径45cm・深さ22cmの灰を多く含む掘りこみがある。

遺物は，床上10cm前後から床直上にかけての出土が多い。

土器（第21・22・23図）は，縄文前期中葉の諸磯a式土器を主体とする。器形は深鉢が主となり，平縁のものの他，波状口縁（第21図1・7）もみられる。浅鉢とみる底部（第22図49）がある。

文様は半截竹管による爪形文・平行線文が施され，胴上半部に幅広く三角形または円弧文で飾る（第21図1・2・5）があり，単純に直線的な爪形文をめぐす（第21図4・10等）が多くみられ，無文帯を上下の爪形文で区画する（第21図4・22）例もある。櫛状具による平行線文に竹管円形刺突文を施す（第24図7，第22図9・10・19）があり，波状文（第22図23）を施すがある。第21図9は刻をもつ2条の隆帯の上下に爪形文をめぐらしている。

第23図1〜18は，関西系の北白川下層Ⅱb式土器で，薄手，単純な爪形文と斜縄文を主体としている。

また，38号住居址の上にのる関係で，前期中葉の土器の混入が多くみられ，第23図の30等に代表される。

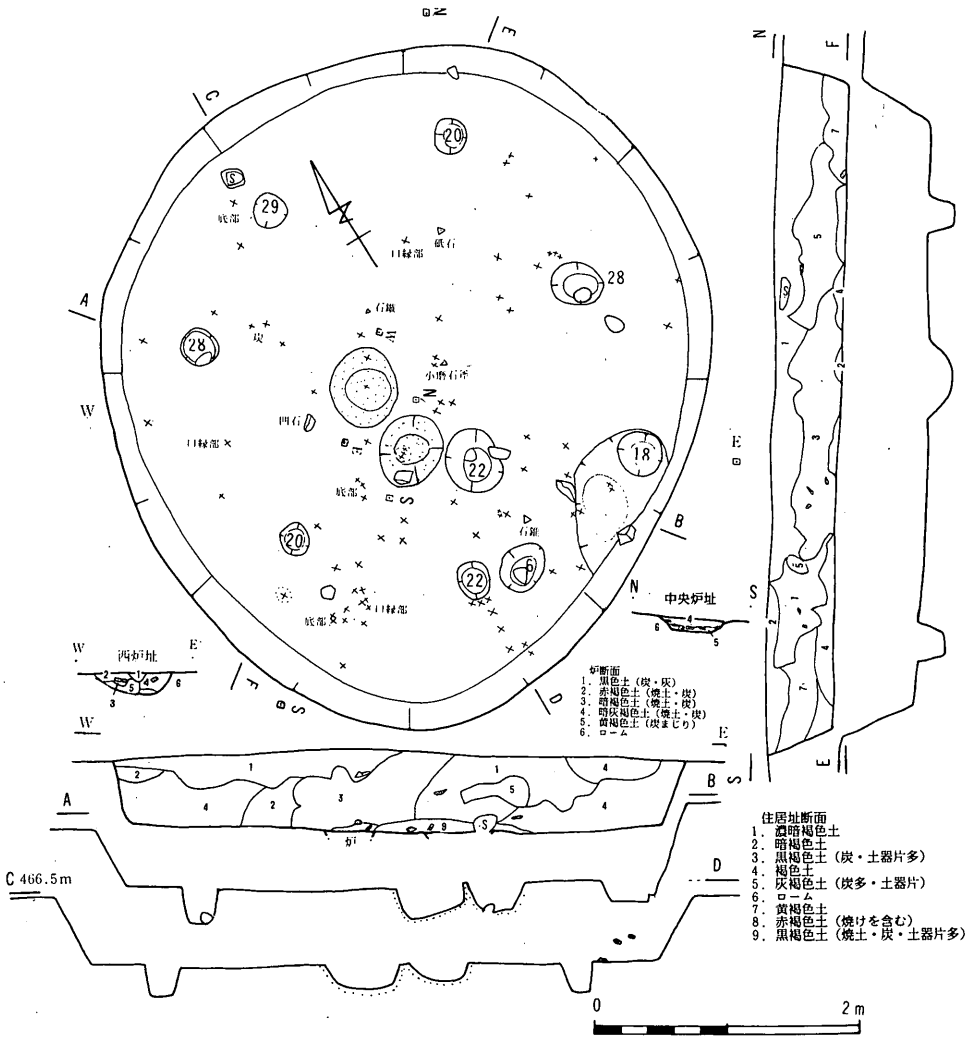
土製品に第23図47の土製円板がある。

石器は，器種・量ともに多い。第23図は小形石器で，石匙（32・33），剥片石器（34〜40），石錐（41・42），石鏃（44〜46）があり，43は基部と先端を僅かに欠くが，残部長さ2.8cm，幅2.2cmあり，尖頭器とみる，黒曜石製である。石器の材質をみると，石匙はチャート，剥片石器はチャート・凝灰岩・ハリ質安山岩等があり，石錐は41が蛋白石・42が黒曜石であり，石鏃は黒曜石である。

大形石器（第27図）には，1・4の凹石，2・5は礫器とみられる。3は半壊であるが粘板岩の敲打器ともみられ，敲打器（13）がある。6・14は磨石で，6は磨かれており，他の用途のものともみられる。

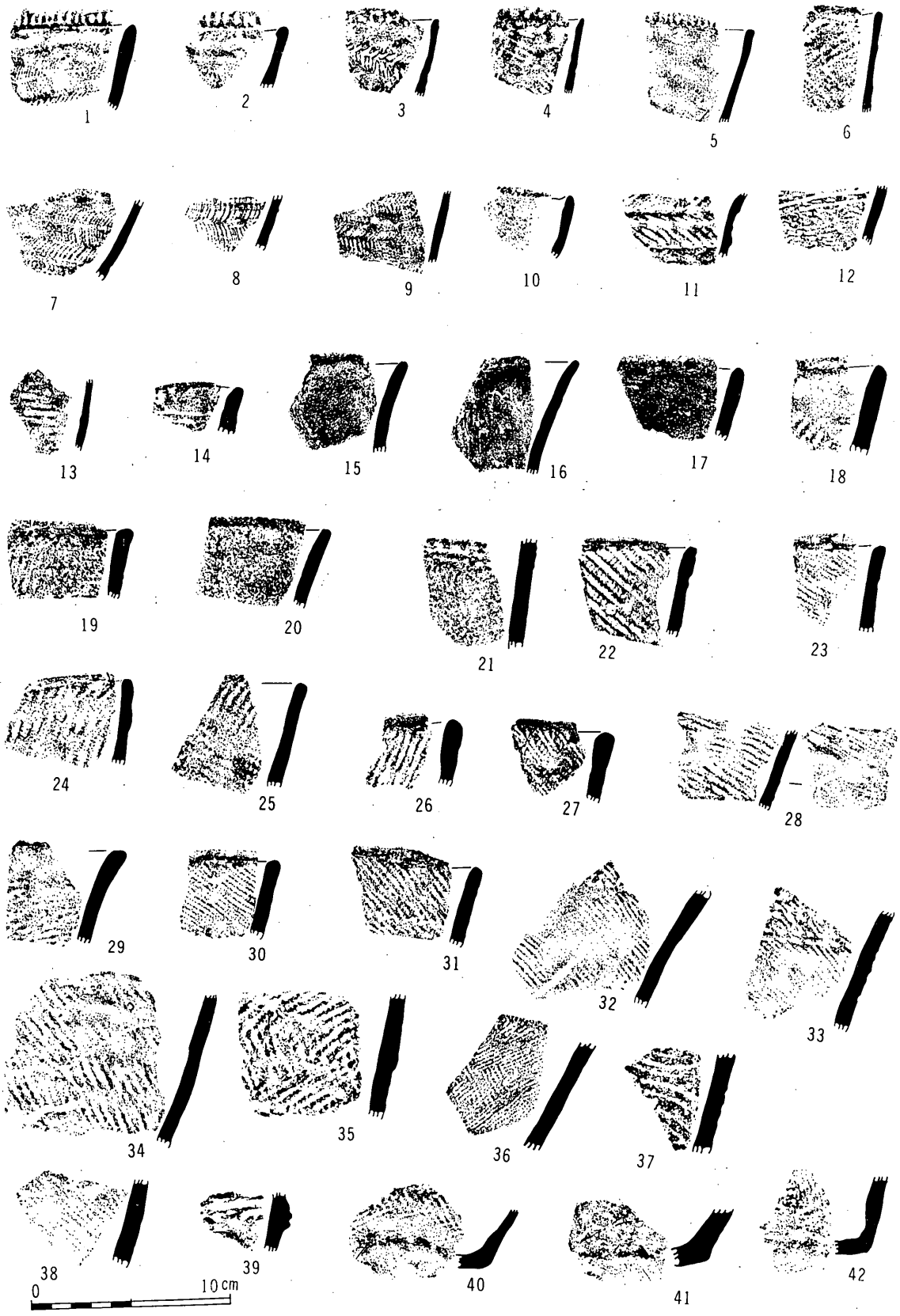
7～14は横刀形石器で，15～18の打石斧に比し多いことが注目され，また，黒曜石片の多量出土も注目される。

石製品に，第23図31の玦状耳飾の出土をみている。両側を欠くが，ロウ石製で一孔を穿っている。

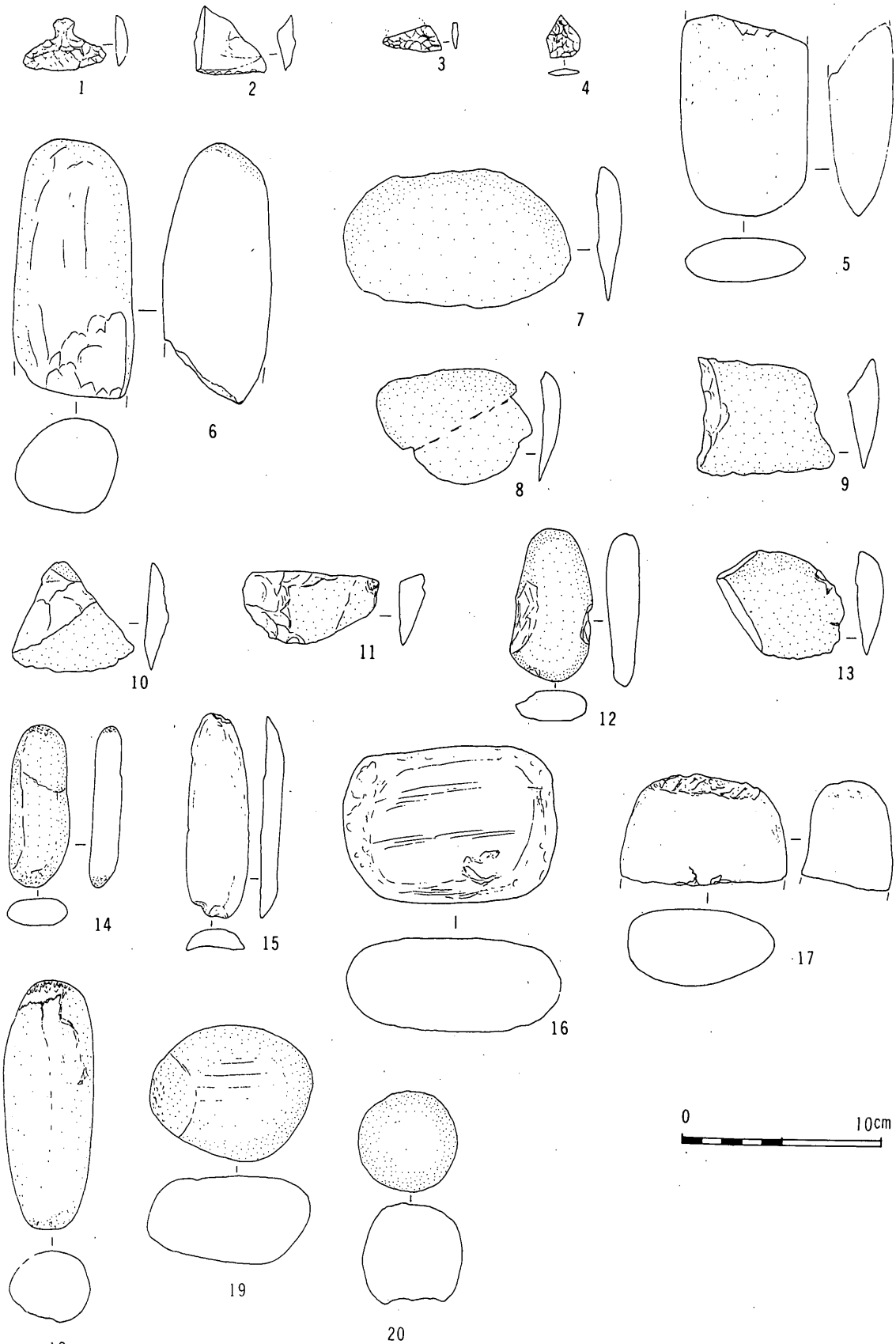


第20図　伊久間原遺跡下原面　11号住居址

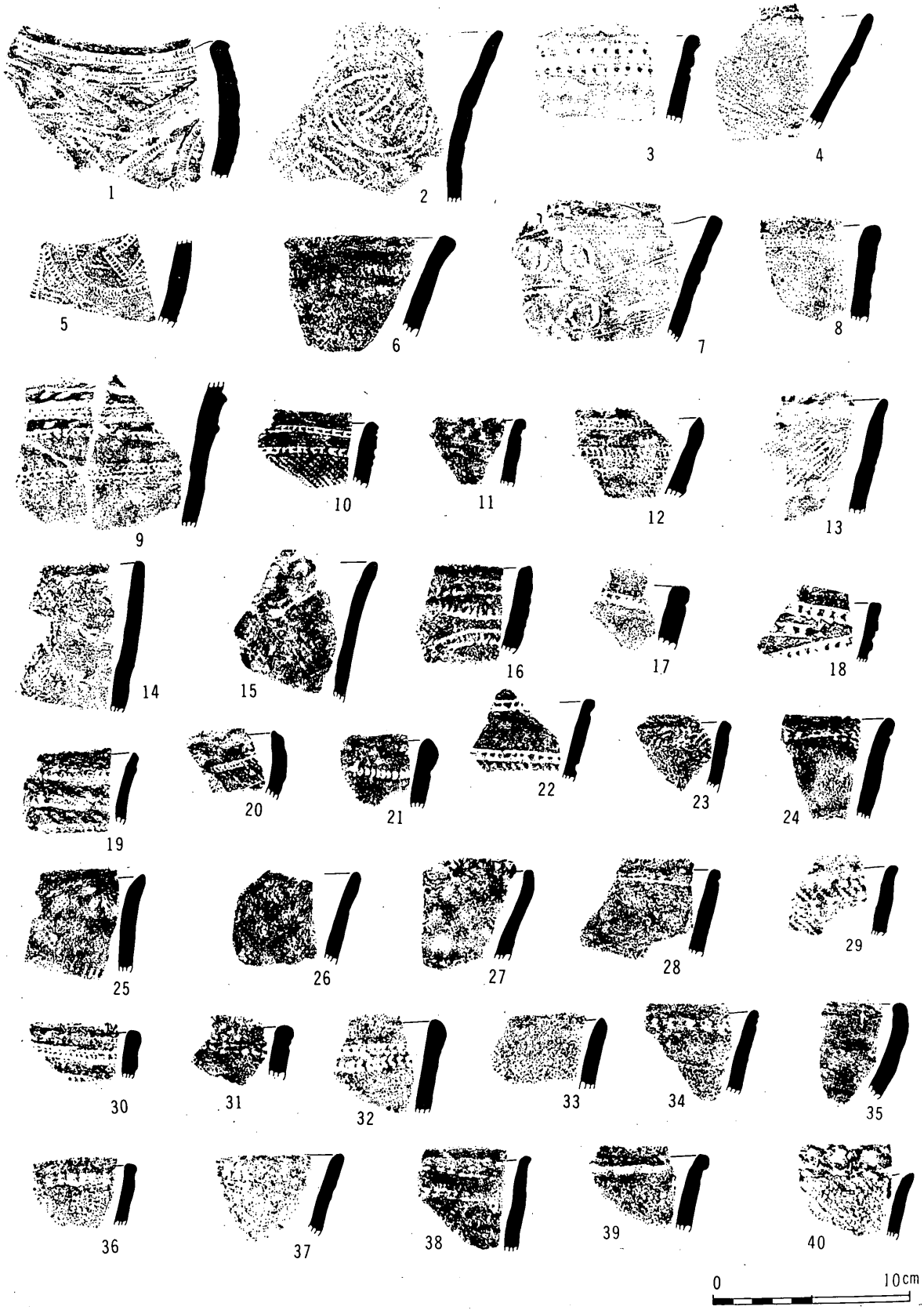
第17図　伊久間原遺跡下原面　38号住居址出土遺物Ⅰ（1：3）



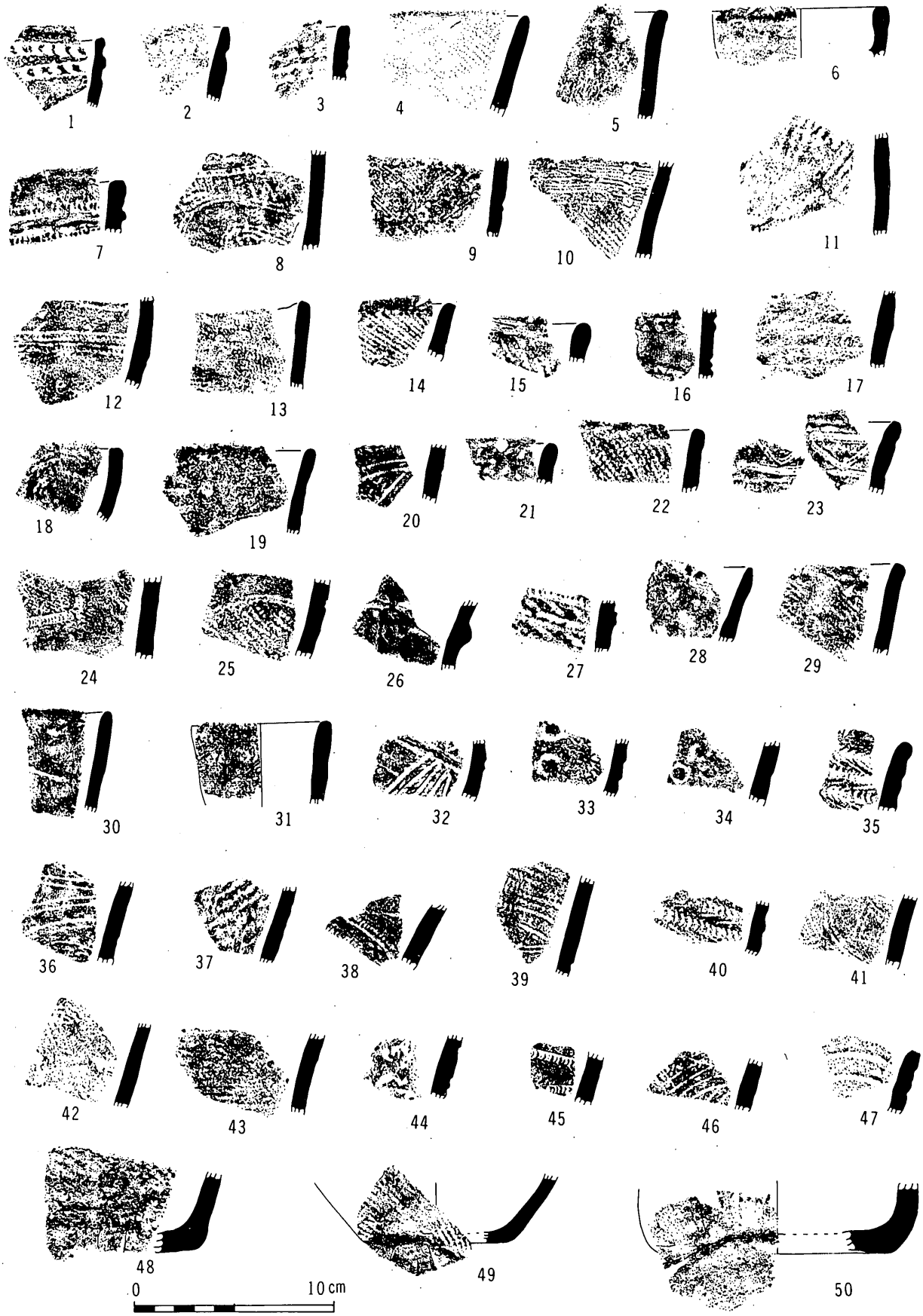
第18図　伊久間原遺跡下原面　38号住居址出土遺物Ⅱ（1：3）



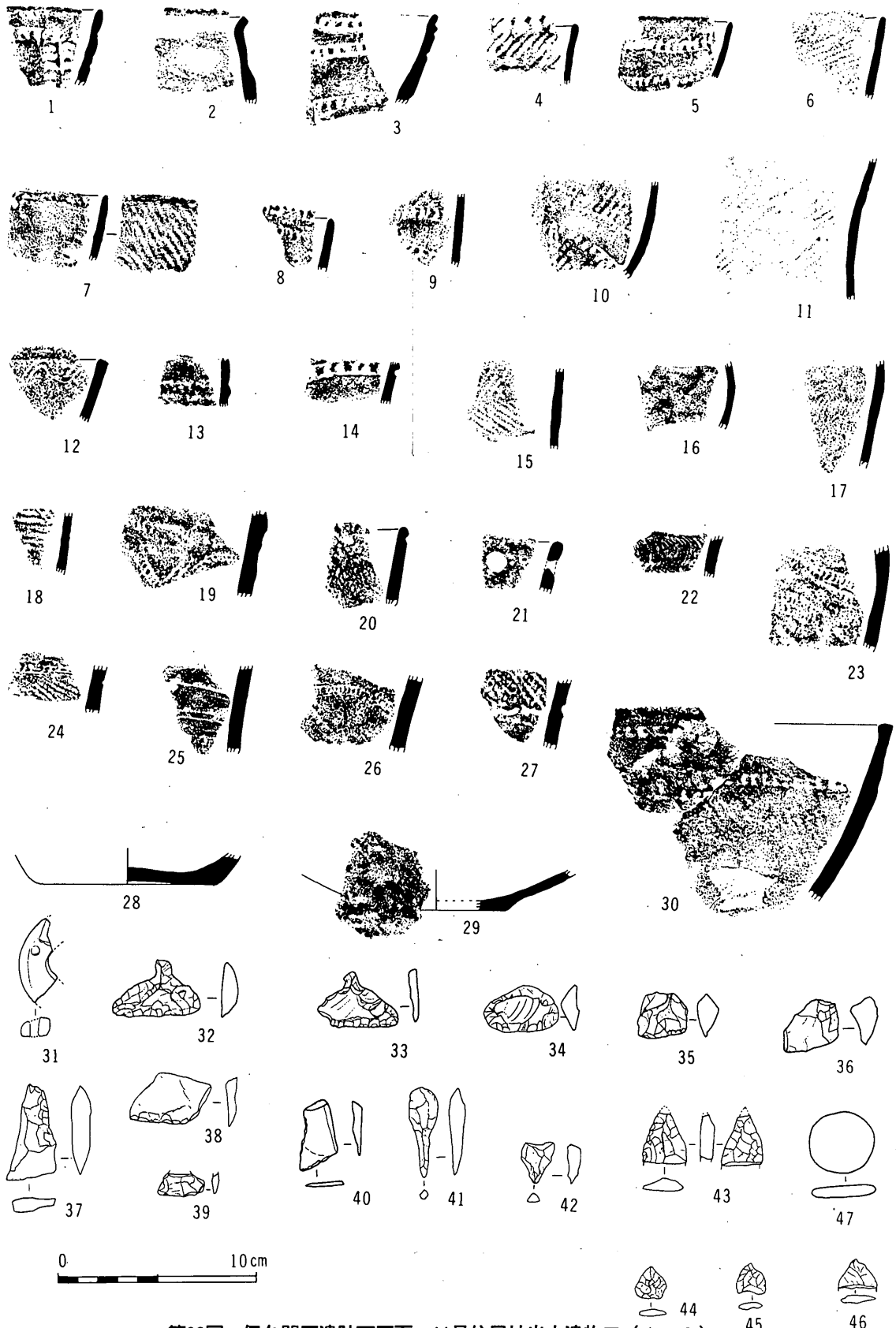
第19図　伊久間原遺跡下原面　38号住居址出土遺物Ⅲ（１：３）



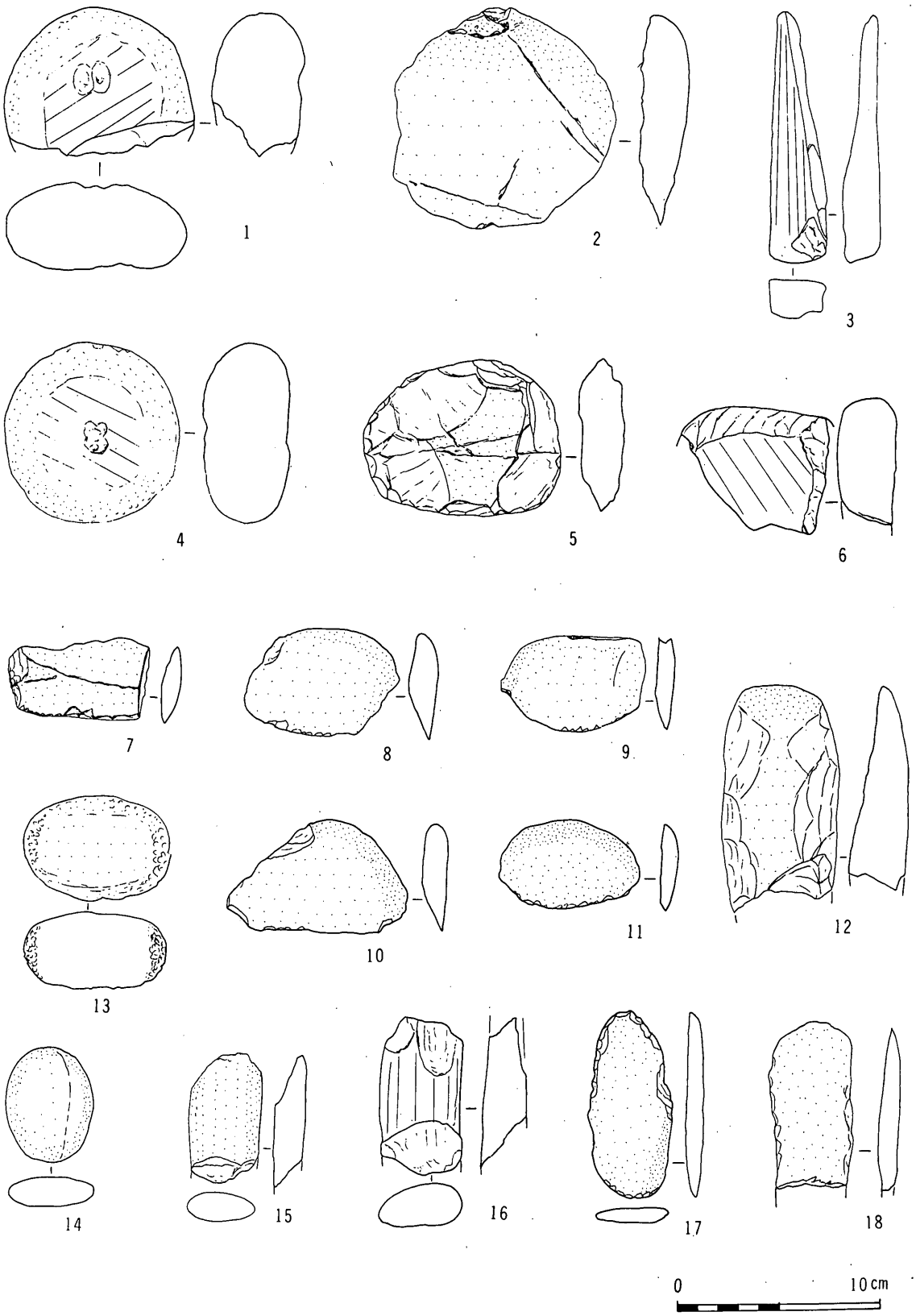
第21図　伊久間原遺跡下原面　11号住居址出土遺物Ⅰ（1：3）



第22図　伊久間原遺跡下原面　11号住居址出土遺物Ⅱ（1：3）



第23図　伊久間原遺跡下原面　11号住居址出土遺物Ⅲ（1：3）



第24図　伊久間原遺跡下原面　11号住居址出土遺物Ⅳ（１：３）

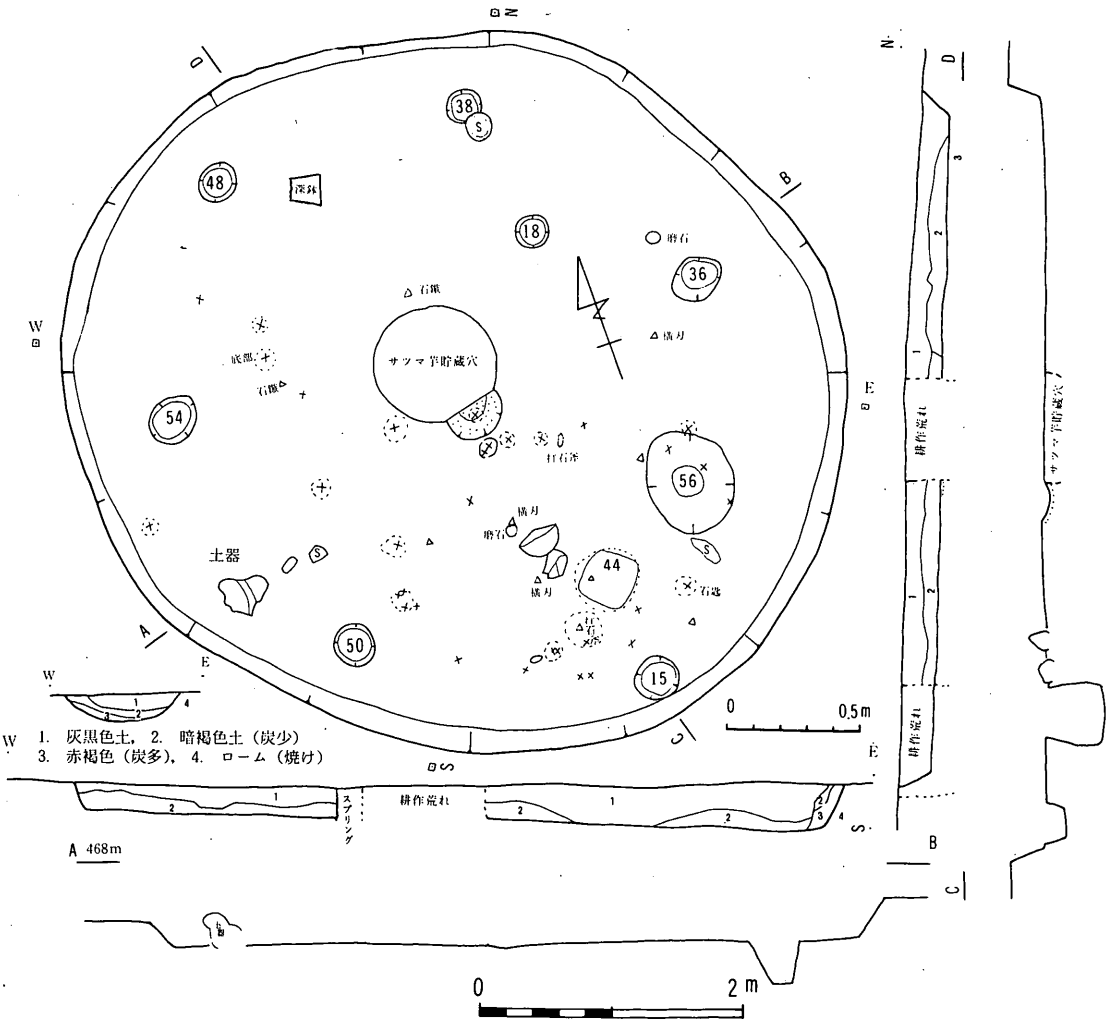
(3) 縄 文 中 期

下原面30号住居址（第25図）

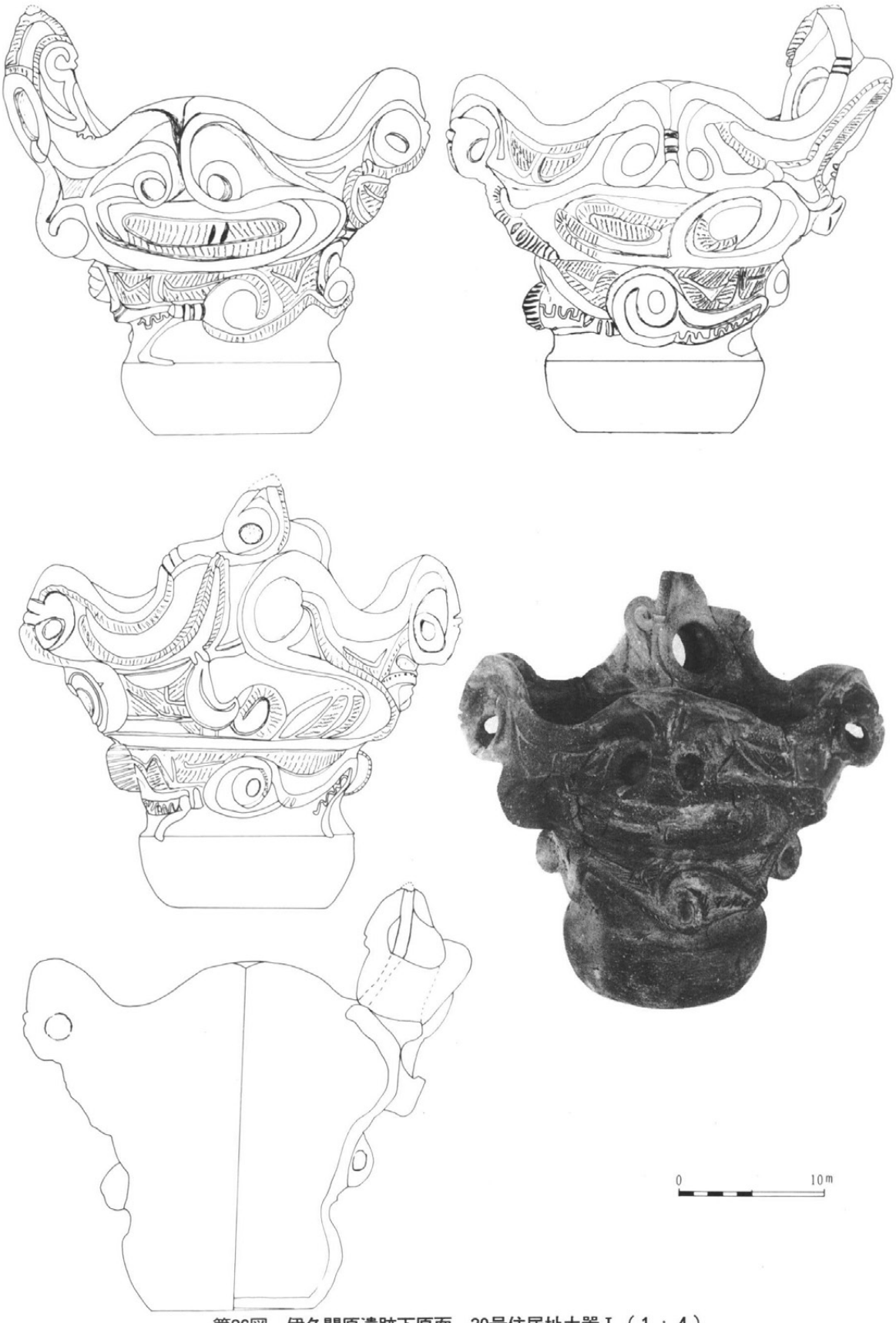
北東起点により27m南西にあり，西側は耕作荒れ，南に25号住，北に31号住がある。南北5.88×東西5.45の楕円形をなし，主軸方向N15°Eを示す。覆土は浅く，上層は濃褐色，下層は暗褐色でともに炭を多く含んでいる。壁高は南北とも25cm前後で，ローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅いが，中央部に戦後に掘られた径1m程のサツマ芋の貯蔵穴があり，また，北から南にかけて中央部を灌水管の幅30cm余の掘りこみで切っている。

主柱穴は6個，整った配置にあり，炉址はサツマ芋の貯蔵穴で2分の1以上を切られているが，径50cm，深さ25cmの掘りこみの地床炉で，焼土は著しい。炉址の南東に径60×80cm，深さ56cmの貯蔵穴とみる掘りこみがある。

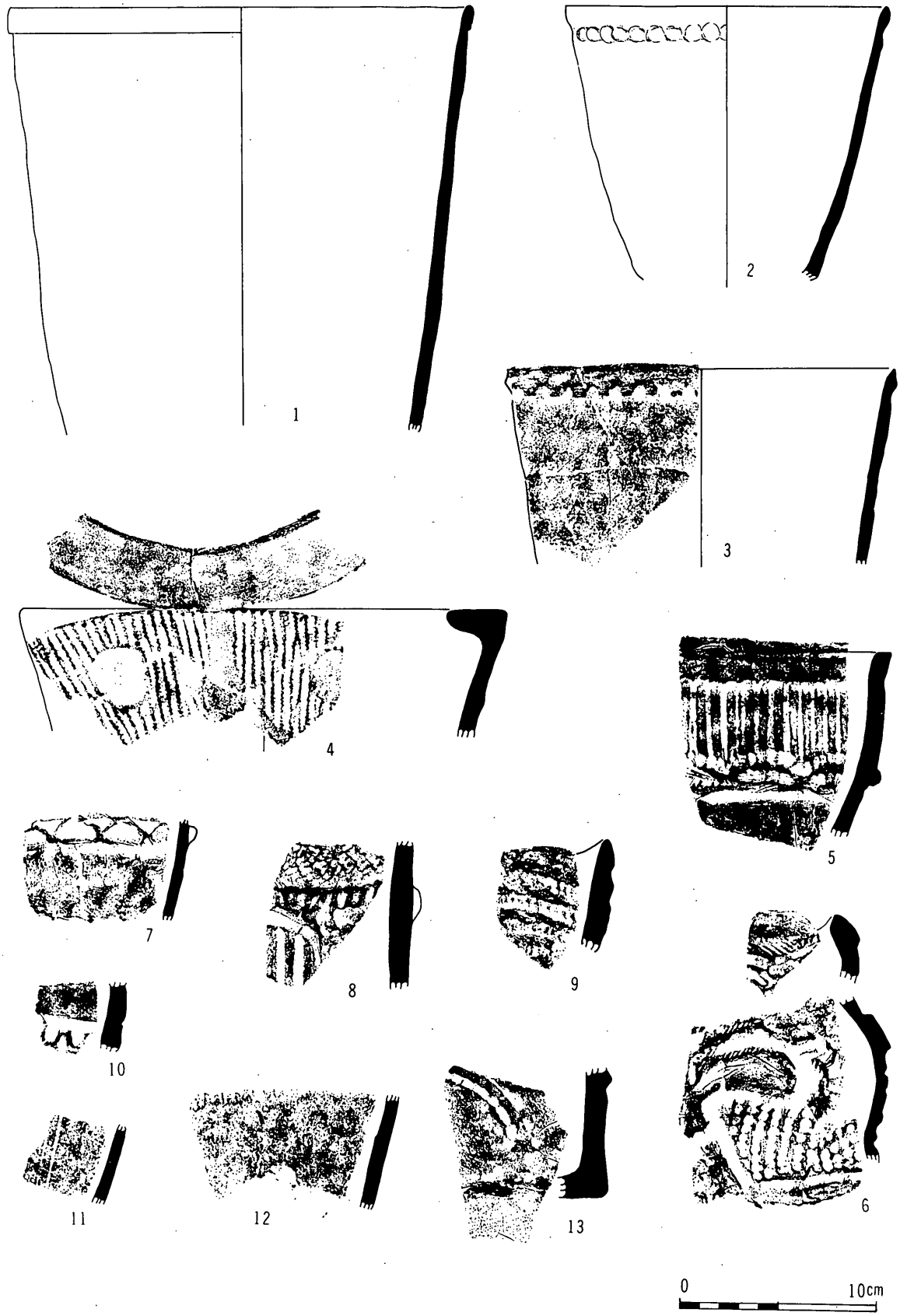
遺物は多く，床面上の出土が大半である。土器は深鉢で，第26図の装飾把手付深鉢は完形品である。口



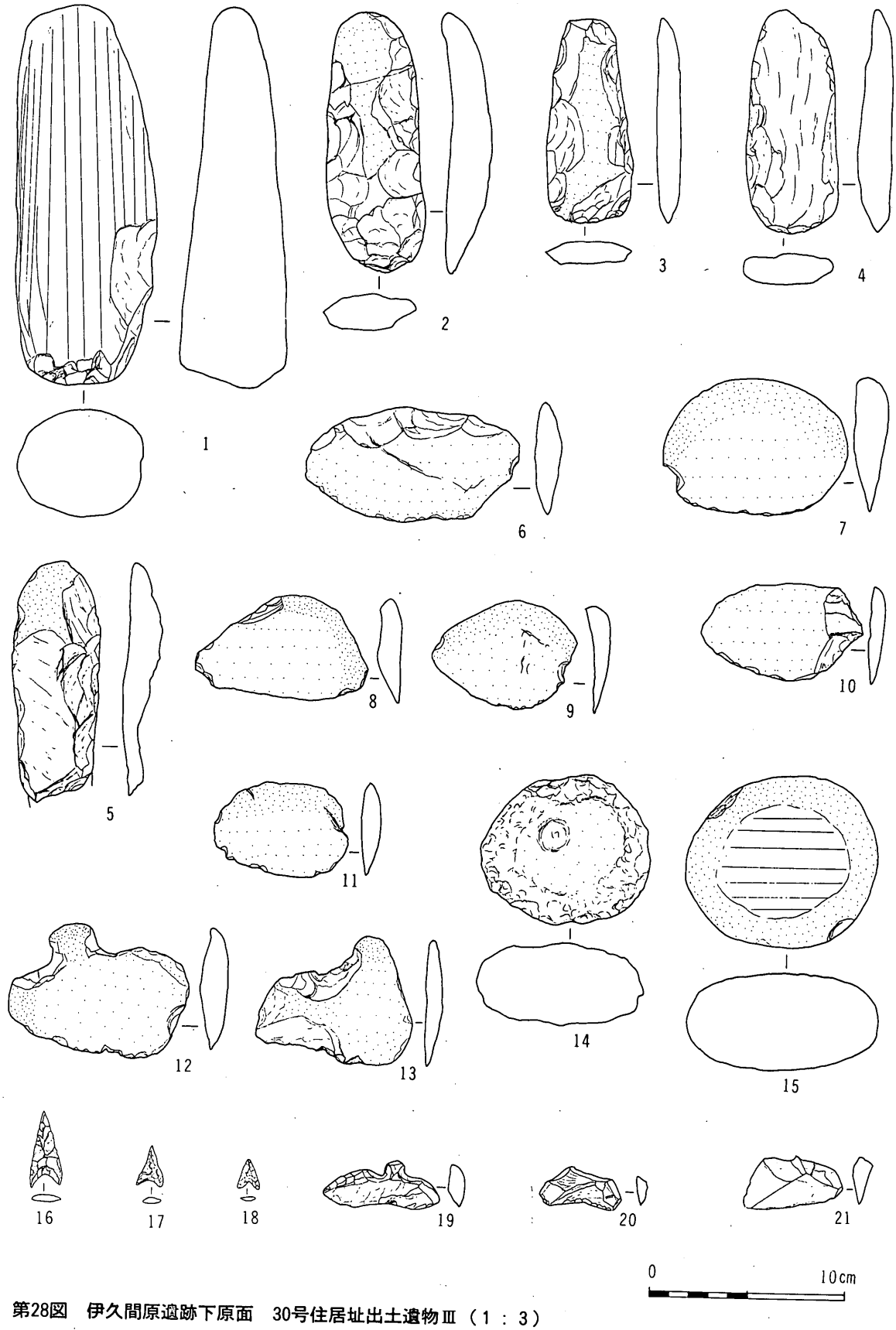
第25図　伊久間原遺跡下原面　30号住居址



第26図　伊久間原遺跡下原面　30号住居址土器Ⅰ（1：4）



第27図　伊久間原遺跡下原面　30号住居址出土遺物Ⅱ（1：3）



第28図　伊久間原遺跡下原面　30号住居址出土遺物Ⅲ（1：3）

径27cm・高さ推定29.5cm・底径11.5cmを計り，口縁部は把手によって四等分され大きな波状をなす。中央部には飾られた大きな把手が立ち上がり，三方に橋状突帯付の低い立ち上がり把手が対照的に付く。口縁下部にやや大きめの耳状突起が，左右・前後対称に付き，胴となるくびれがあり，さらに胴上段・下段を区切るくびれ付く。胴上段部を四区画する耳状突起が，対照的に付く。胴下半部は無文となる。文様は胴上半部から上に集中し，磨消縄文で飾る太い隆帯と沈線による長楕円・半円・台形・渦巻等の文様区画内を磨消縄文・沈線で飾る豪華な文様帯をもち，当地方において稀にみる土器である。

その他の土器（第27図）に，1の底部を欠く以外は完形で無文，口径23cm，残部高さ21cm，僅かに斜に直に開き，折返し口縁をなす。2・3は折返し口縁をなし，その直下を，指頭圧痕文を1条めぐらし無文土器である。4は，内に折れこむ口縁帯をもち，口縁部文標は斜状縄文を円，または長楕円に指の腹の圧痕が施され，5～10・13とともに，13図の装飾土器をはじめとする縄文中期中葉の諏訪地方の藤内Ⅱ式に比定される土器とみられる。

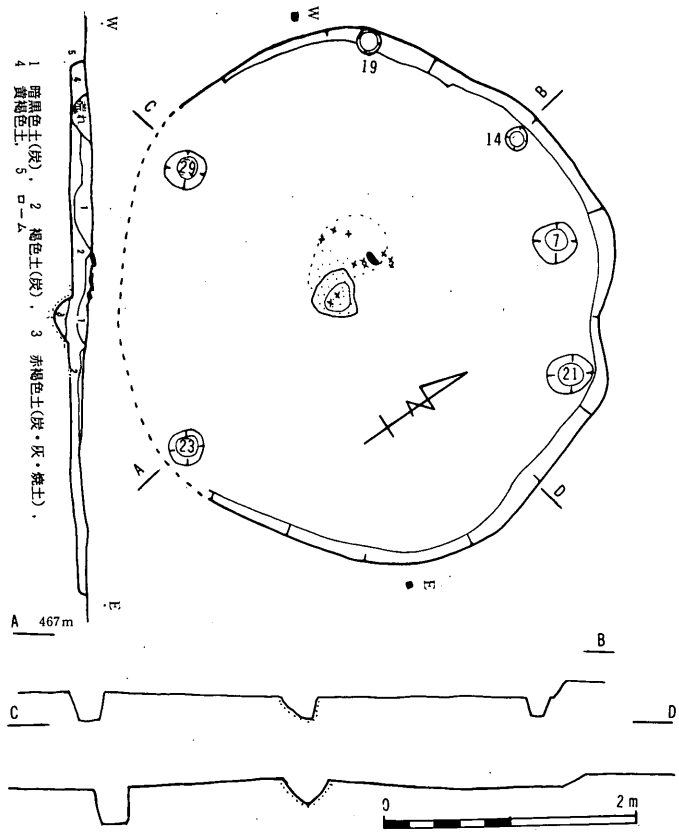
石器（第28図）・石棒（1）・打石斧（2～5）・横刃形石器（6～10）・大形石匙（12・13）・凹石（14）・磨石（15）・石鏃（16～18）・石匙（19・20）・剥片石器（21）等があり，打石斧に比し，横刃形石器が量的に多いのが注目される。

下原面4号住居址（第29図）

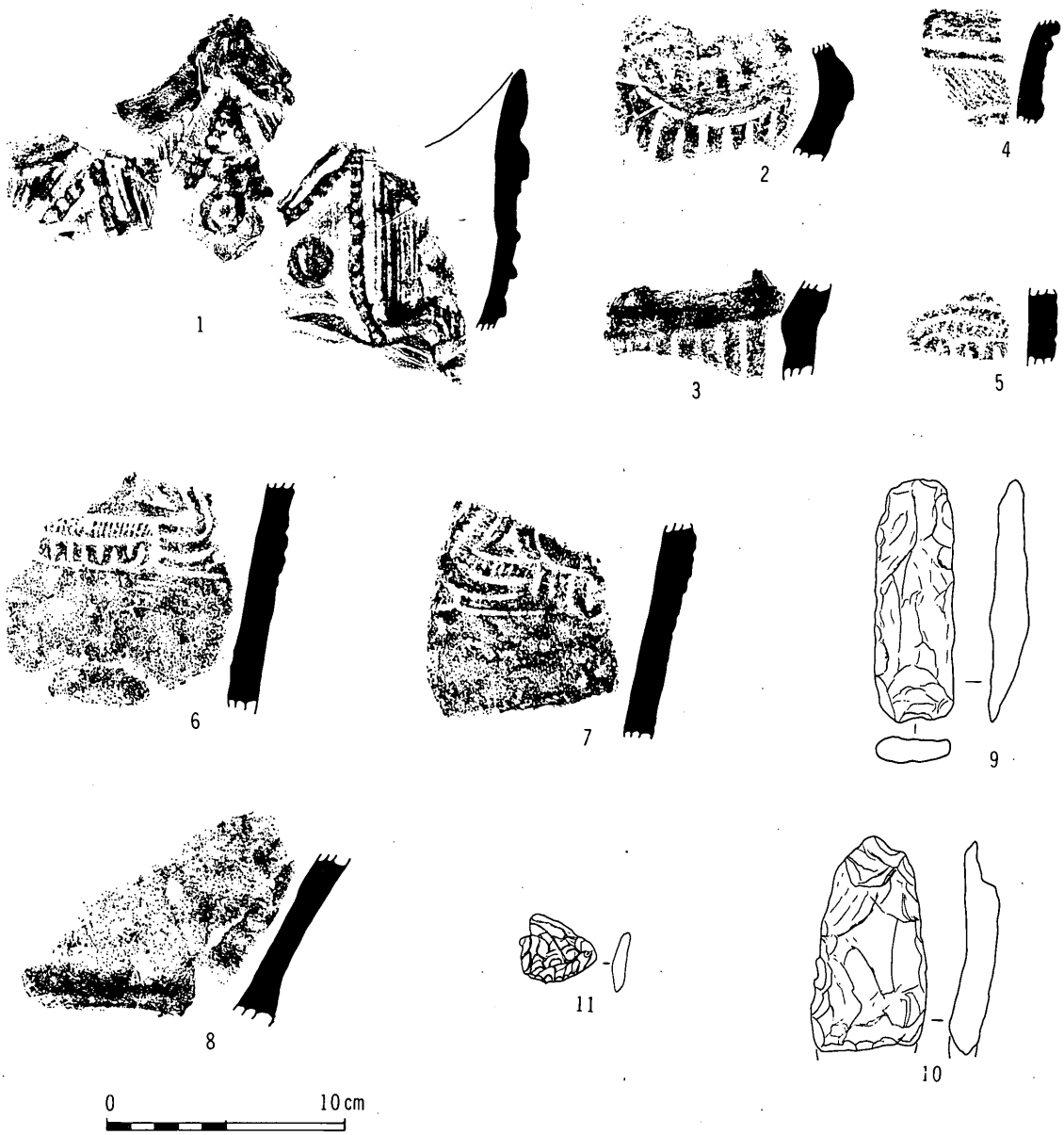
1号住居址の北1.5mにあり，径4.1mのややゆがむ円形をなし，主軸方向N26°Eを測る。覆土は，上層に僅か暗黒色土（炭を含む）があって，炭を含む褐色土で床面となる。壁高北壁で16cm，南西壁4分の1は壁はない。上段伊久間原面よりの洪水によって全面的に削られたとみる。床面は堅く，主柱穴は配置からみて4個とみる。炉址は住居のほぼ中心にあり地床炉で，焼土は著しい。炉址周辺に土器片は集中してみられ，表土は浅く，耕作によって削りとわれ，残った土器片とみられる。

遺物（第30図）は少なく，土器は1～8があり，中期中葉の諏訪地方の藤内Ⅱ式に比定される土器とみる。

石器は，9・10の打石斧と11の剥片石器のみである。



第29図　伊久間原遺跡下原面　4号住居址



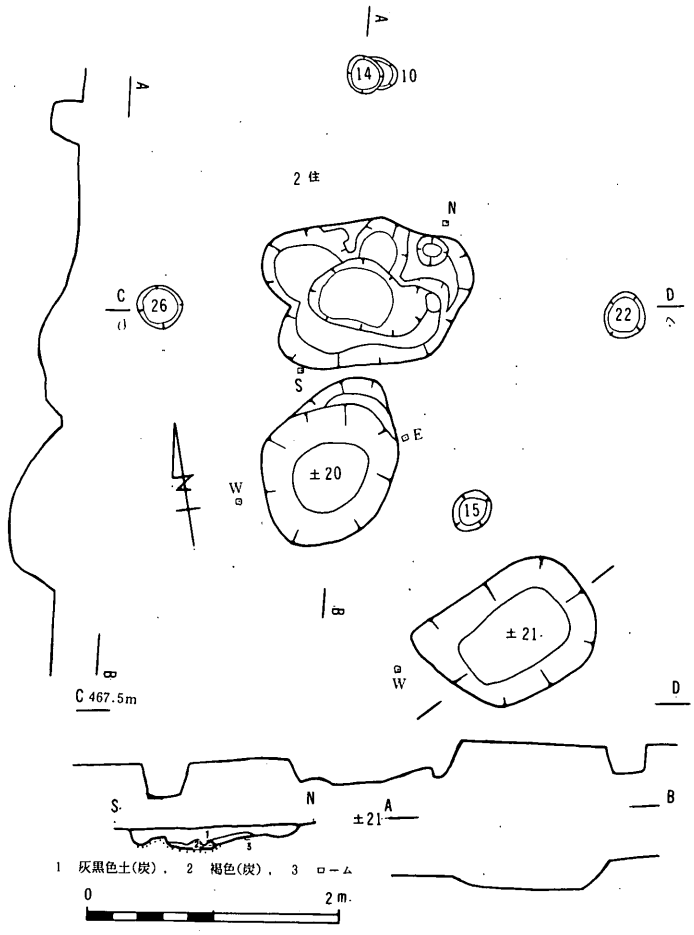
第30図　伊久間原遺跡下原面　４号住居址出土遺物（１：３）

(4) 縄文早・前・中期とみる住居址

下原面２号住居址（第31図）

調査区域の南東側にあり，北は中庭の予定地で調査外となり，南に接して土壙21号，内部には炉南に接し土壙20号が掘りこまれている。壁は完全に削りとられており，炉址と柱穴によって，その存在を確かめた。推定径4.2〜4.5ｍの楕円形とみられ，主軸方向Ｎ15°Ｅを示す。床面は堅く残り，その範囲を知ることができた。主柱穴は４個，整った配置にある。炉址は中心よりやや西寄りにあって，不正楕円形をなし，120×150㎝の大形であり，炉石を抜かれた痕跡を残す。内部には炭・灰は多く，焼土は著しい。

遺物（第35図10）は磨石１個の出土であるが，大形石囲炉よりみて縄文中期後半Ⅱ・Ⅲ期の住居址とみたい。



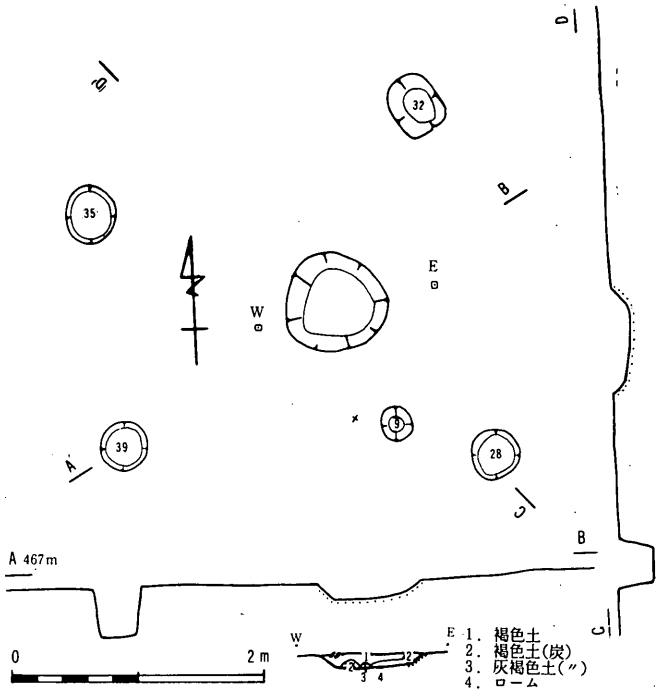
第31図　伊久間原遺跡下原面　２号住居址　土壙20・21号

下原面３号住居址（第32図）

調査区域の最南東に，方形周溝の東端中央部にあり，壁は完全に削りとられ，炉址を柱穴の検出によって住居址の存在を認めた。径4.5〜4.2ｍの楕円形とみられ，主軸方向Ｎ15°Ｅを示す。床面は堅く残り，主柱穴は４個，深く掘りこまれている。炉址は径80㎝の円形に掘りこむ地床炉で，覆土は炭・灰を多く含むが焼土は僅かである。

遺物（第35図１〜９）は少なく，土器（１〜５）は，１は薄手土器で斜縄文が施され，２〜５は厚手で２は無文，３は縄文，４は刺突文がめぐる。５の底部は浅い圧痕がみられる。出土土器は少ないが縄文前期とみる。

石器：６の磨製石斧は基部を欠く。７・９の敲打と８の磨石がある。

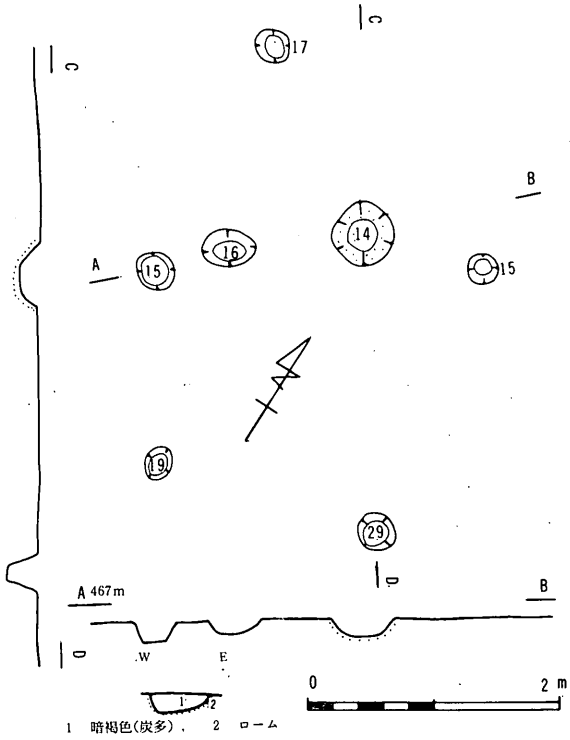


第32図　伊久間原遺跡下原面　3号住居址

下原面6号住居址（第33図）

北は7号住に接し，西2mに14号住がある。壁は完全に削りとられ，炉址・柱穴の検出で住居址と認めた。床面は堅く残り，推定径4.3×3.5mの楕円形をなし，主軸方向N66°Wを示す。主柱穴は5個，比較的浅い掘りこみであり，支柱穴とみるが西柱穴の東に付く。炉址は中央より北によってあり，円形の地床炉，内部は炭を多く含む暗褐色で，焼土は著しい。

遺物（第35図11〜14）は少なく，土器11はやや厚手の無文土器，石器に石鏃（12・13）と14の磨石がある。遺物は少なく，時期を決めがたいが，縄文前期かと思われる。



第33図　伊久間原遺跡下原面　6号住居址

下原面10号住居址（第34図）

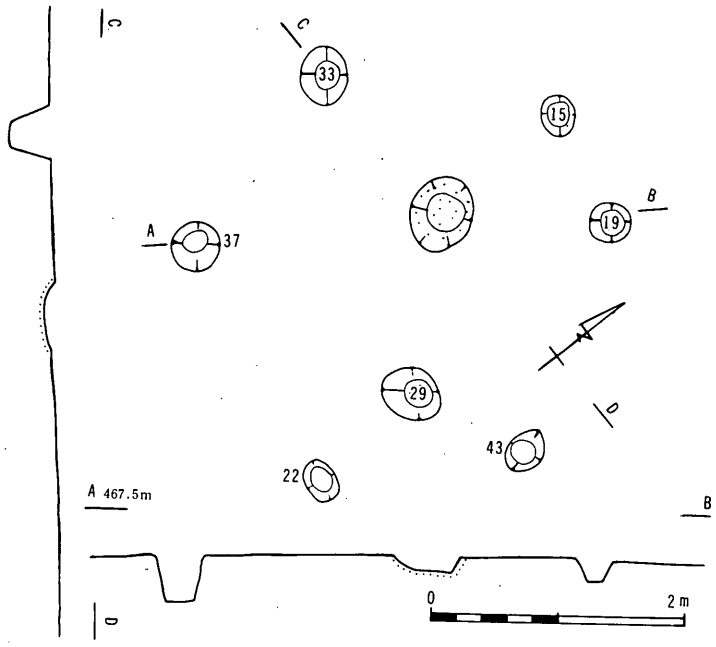
9号住の北に隣接する。壁は削りとられてなく，炉地・柱穴の検出で住居址と認めた。床面は堅く残り，推定径4.5×4.3mの円形とみる。主軸方向はN15°Wを示す。主柱穴は6個，掘りこみ37・43cmと深いのもみられ，南柱穴の内側に入って支柱穴1個がつく。炉址は中央より北に寄ってあり，楕円形をなす地床炉で焼土は著しい。

遺物（第35図15〜23）　土器（15・16）は2片のみであり，羽状縄文が施され，縄文前期前半末にみられる土器である。石器は多く，縦長石匙（17）・打石斧（18・19・21）は基部・刃部を欠く。横刃形石器（20・22）・敲打器（23）などがある。住居址の時期は土器が少なく，はっきりしないが縄文前期とも思われる。

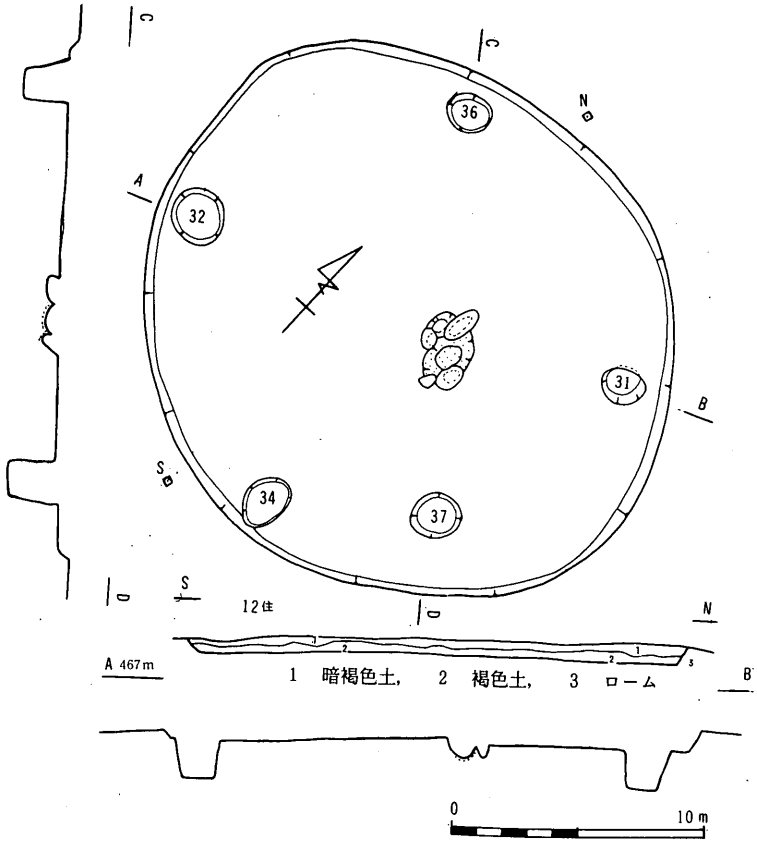
下原面12号住居址（第36図）

38号住の北19mにあり，径4.7×4.9mややゆがむ楕円形をなし，壁は削られているが，北側16cm，南側10cmを残している。主軸方向はN46°Eを示す。覆土は上層に暗褐色土と褐色土で床面のローム層となる。床面は堅く，主柱穴は4個が整った配置をなしているが，東・南柱穴間に37cmの掘りこみの柱穴があり，5個ともみられる。炉址は，中央よりやや南西に寄ってあり，楕円形をなし，炉石の抜かれた痕跡を残しており，石囲炉とみられる。

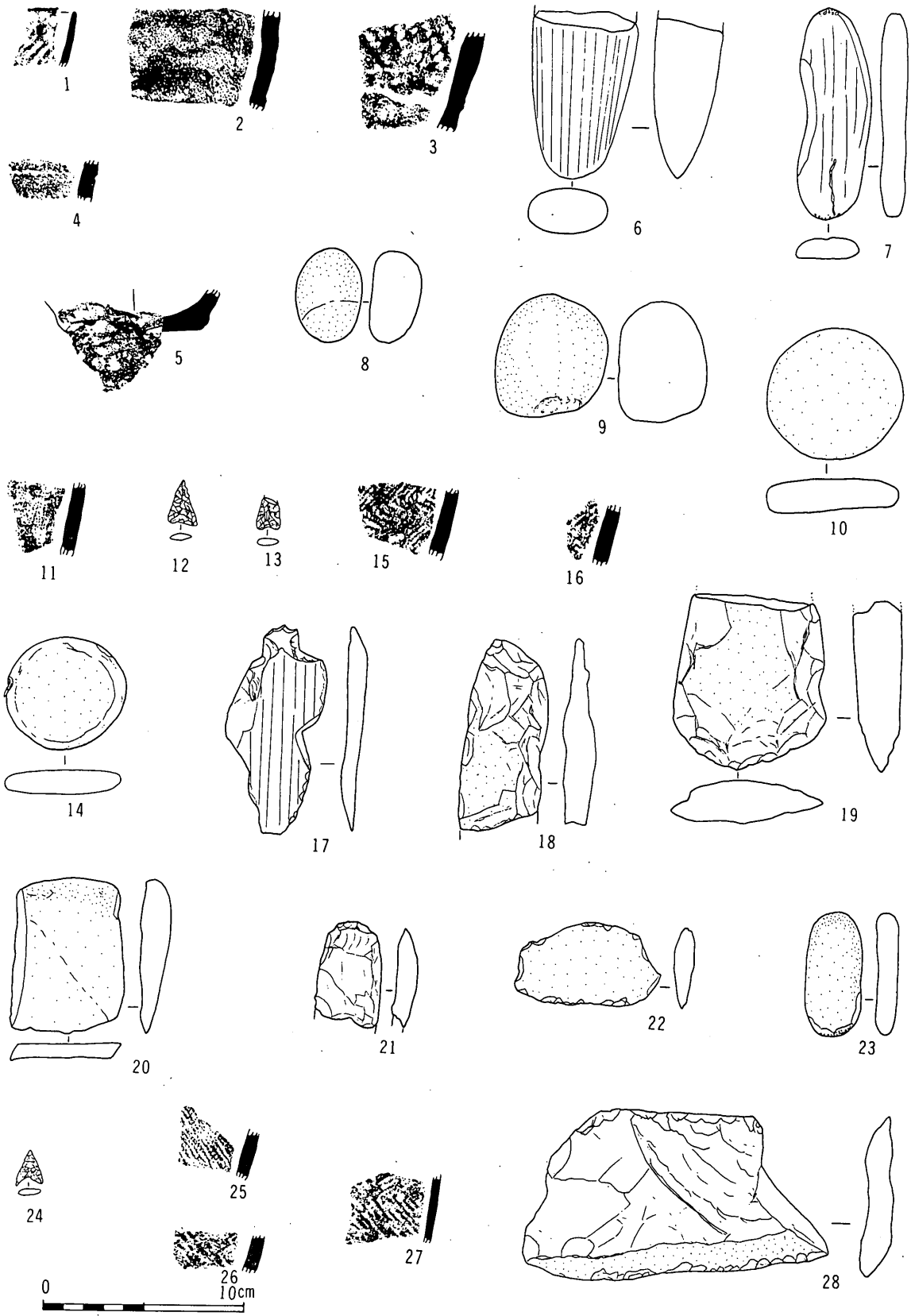
遺物（第35図24）は，石鏃（24）の1個が出土したのみで時期不明である。住居址の形態からみて縄文前期ともみられるがはっきりしない。



第34図　伊久間原遺跡下原面　10号住居址



第36図　伊久間原遺跡下原面　12号住居址



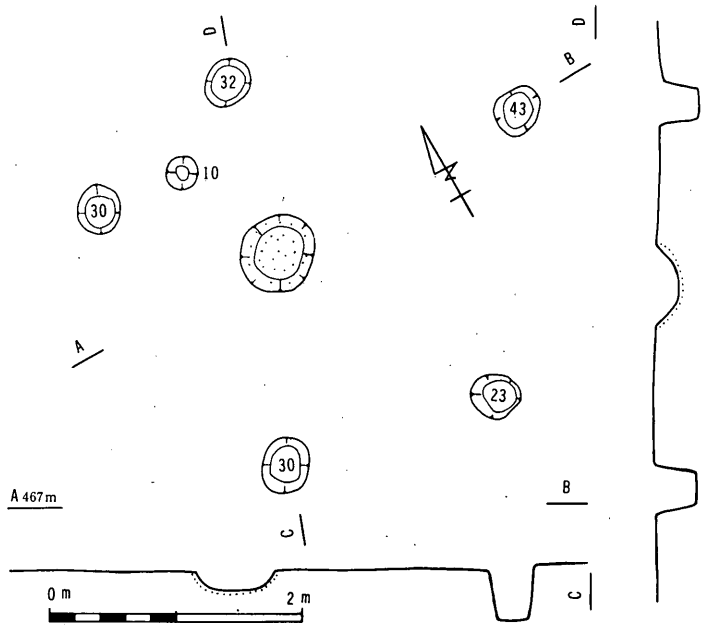
第35図　伊久間原遺跡下原面　3号・2号・6号・10号・12号・16号・15号住居址出土遺物（1：3）

1～9…3住，10…2住，11～14…6住，15～23…10住，24…12住，25～27…16住，28…15住

下原面15号住居址（第37図）

調査区域の南西端にあり，西は未調査区となる。壁は削られてなく，炉址・柱穴の検出で住居址を認めた。床面は堅く残り，推定径4.2mの円形をなす。主柱穴は5個，北西柱の中間に小柱穴がつく。炉址は地床炉で，中心より北西に位置し，焼土は多くみられる。

遺物は，第35図28の大形横刃形石器1個の出土のみで，時期は不明である。

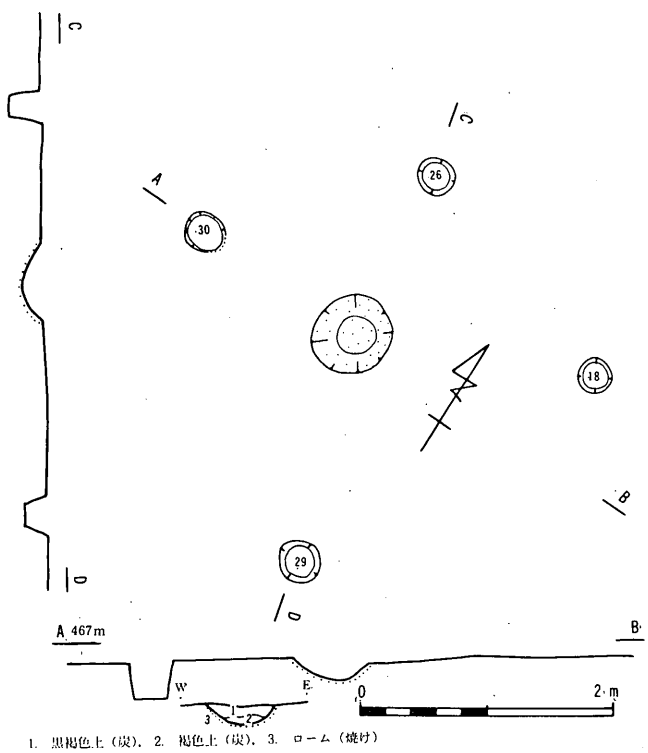


第37図　伊久間原遺跡下原面　15号住居址

下原面16号住居址（第38図）

方形周溝内部の中央部近くにあり，壁は削られ，炉址・柱穴の検出により住居址の存在を知った。床面は堅く残り，推定径4.2mの円形をなすとみられ，主柱穴4個が，ほぼ整った配置にある。炉址は中央部近くにあり，地床炉で，炭を含む黒褐色土・褐色土で埋まり，壁のロームの焼は著しい。

遺物（第35図25〜27）は少なく，土器のみである。いずれも縄文施文で，27にみる羽状縄文から前期前半末とみる土器であり，この期の住居址とみたい。



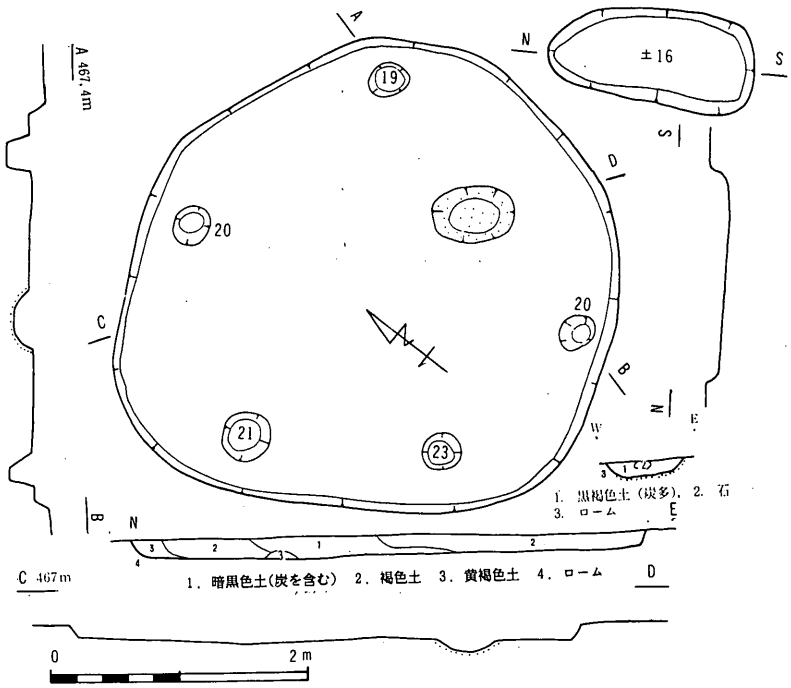
1. 黒褐色土（炭），2. 褐色土（炭），3. ローム（焼け）

第38図　伊久間原遺跡下原面　16号住居址

下原面18号住居址（第39図）

土壙群Ｉの東にあり，土壙16が東に隣接する。南北3.82×東西４ｍのゆがむ円形をなし，主軸方向Ｎ35°Ｅを示す。覆土は暗黒色土（炭を含む）が中央部に，そのまわりは褐色があってローム層の床面となる。壁高北で13cm，南で14cmあり直に立つ。床面は軟弱である。主柱穴は５個，壁に沿ってある。炉址は中心より東に片寄ってあり，楕円形の地床炉で，覆土は炭を多量に含む暗黒色土で，ローム層の焼土となる。

遺物はなく，住居址の時期は不明である。

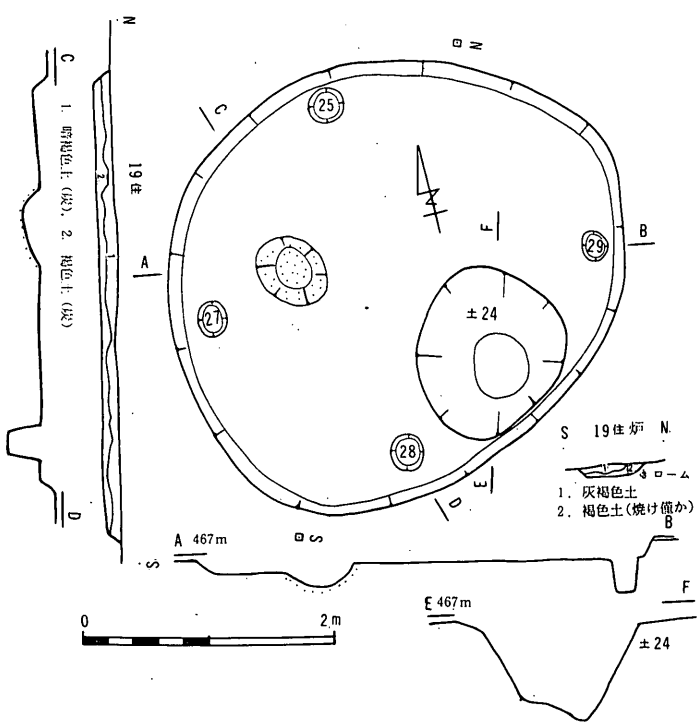


第39図　伊久間原遺跡下原面　18号住居址・土壙16号

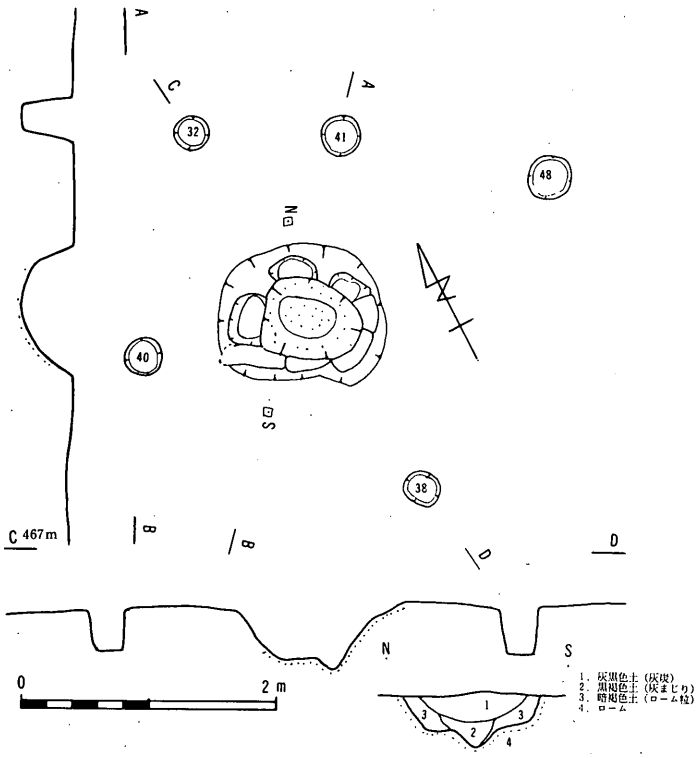
下原面19号住居址（第40図）

方形周溝の北６ｍ，２号住西５ｍにある。南北3.5×東西3.54ｍのゆがむ円形をなし，主軸方向Ｎ60°Ｗを示す。覆土は炭を含む暗褐色土を上層に，褐色土となる。壁高15cm前後で，傾斜をもつ。床面は堅く，南壁に沿って大形の土壙が掘りこまれている。主柱穴は４個，配置よく壁に沿ってある。炉址は西に片寄ってあり，楕円形の地床炉で，焼土は少ない。

遺物（第49図１～３）は少なく縄文前期とみる土器片のみであり，この期の住居址と思われる。



第40図　伊久間原遺跡下原面　19号住居址・土壙24号

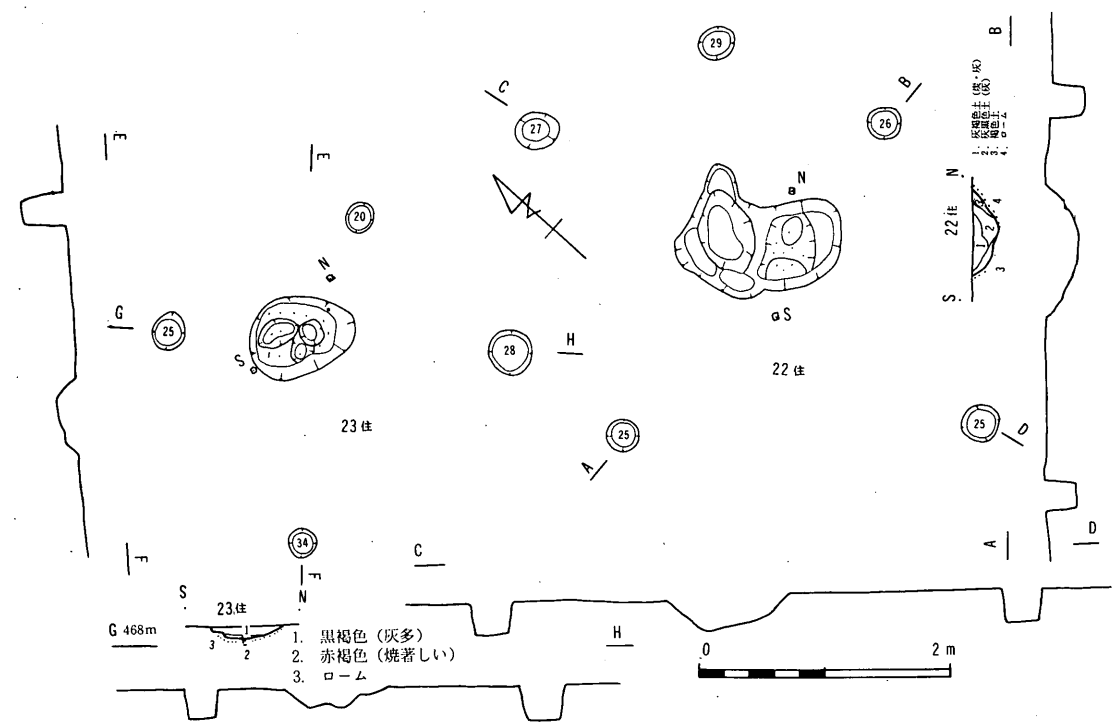


第41図　伊久間原遺跡下原面　20号住居址

下原面20号住居址（第41図）

南東端の調査除外区域境より北5 m，東側農道より西16.5mの位置にある。壁は削りとられ，炉址・柱穴の検出により住居址の存在を認めた。推定径4 mの円形とみられ，主軸方向N20°Eを示す。床面は堅く，主柱穴は5個，32〜49cmと深い掘りこみをもつ。炉址は中心より西に寄ってあり，135×106cmの大形の楕円形をなす石囲炉で，炉石は抜かれた痕跡をもつ。深さ45cm，覆土は灰・炭を含む灰黒色土・黒褐色土・暗黒色土となり，炉壁のロームの焼土は著しい。

遺物（第49図4）は，横刃形石器1個のみの出土であるが，炉址の形態からみて縄文中期後半Ⅲ期の住居址とみたい。



第42図　伊久間原遺跡下原面　22号住居址・23号住居址

下原面22号住居址（第42図）

調区域東側中央部の住居址群中にあり，西は23号南は24号住との切りあいとなる。壁は削りとられている。推定南北4.9×東西4ｍの楕円形をなし，主軸方向N42°Eを示す。床面は堅く残り，主柱穴は5個，炉址は中心より僅か東に寄ってあり，135×75cmの大形の楕円形をなし，炉石は抜かれた痕跡を残し，石囲炉であったとみられる。内部には灰・炭を含む灰黒色土があって，焼土をもつロームとなる。

遺物（第49図5～7）は，縄文をもつ土器と無文土器の3片であり，時期は決めがたいが，炉址の大きさからみて，縄文中期後半Ⅱ・Ⅲ期の住居址とみる。

下原面23号住居址（第42図）

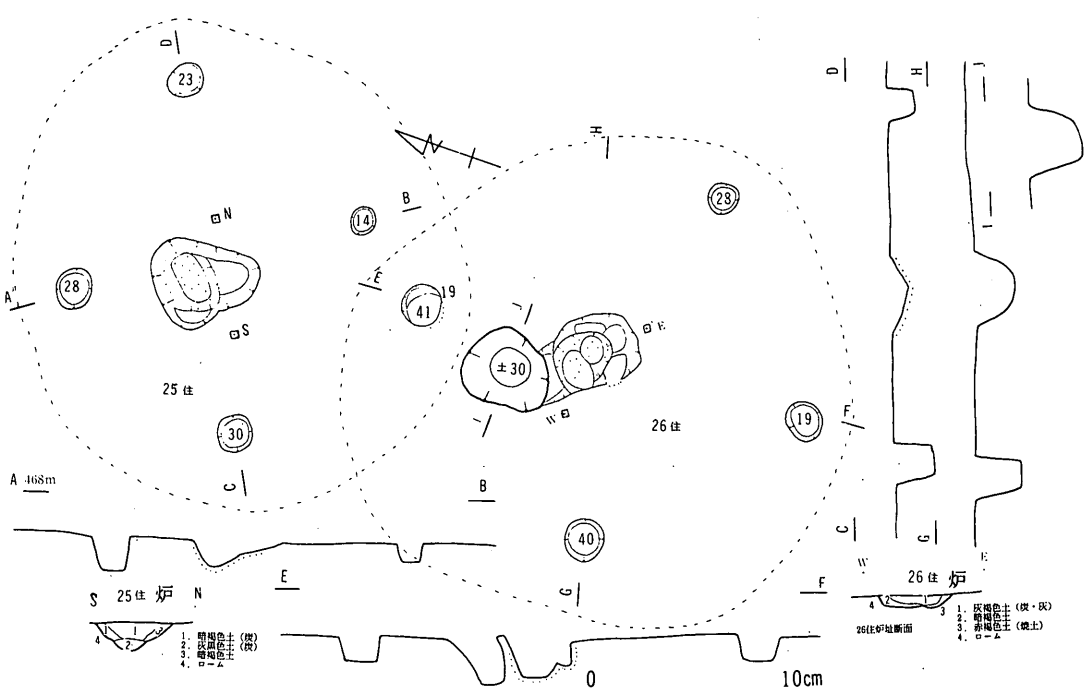
東に22号住，北に26号住と切りあっている。壁は削りとられており，推定径3ｍの円形をなす小形の住居址である。主軸方向N10°Eを示す。主柱穴は4個，炉址は中心より北に寄ってあり，楕円形の地床炉で内部は段をもつ掘りこみをなし，灰・炭を多量に含む黒褐色土で埋まり底部の焼土は著しい。

遺物はなく，住居址の時期は決めがたい。

下原面25号住居址（第43図）

調査区東側中央部に北西に並ぶ住居址群の北西部にあり，北は30号住に隣接し，南東は26号住と切りあう。壁は削りとられてなく，床面は堅く，推定南北4.0×東西3.9ｍのややゆがむ円形をなし，主軸方向15°Eを示す。主柱穴は4個，炉址は中心よりやや北西に片寄ってあり，二段に落ちこむ地床炉で，炭を含む暗褐色土・灰黒色土があって底部はロームの焼土となる。

遺物はなく，住居址の時期は不明である。



第43図　伊久間原遺跡下原面　25号住・26号住・土壙30号

下原面26号住居址（第43図）

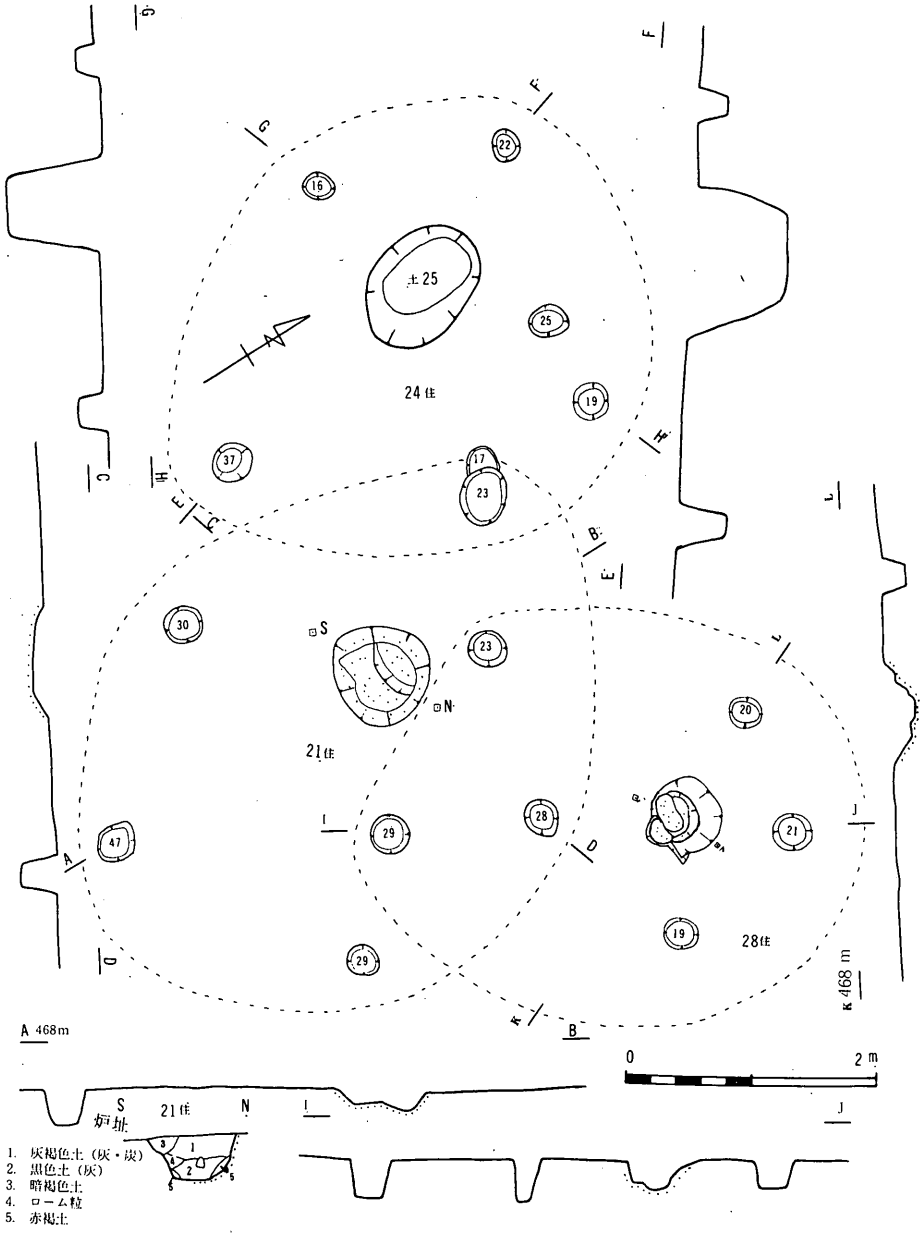
北は25号住に，南は23号住と切りあう。壁は削りとられてなく，推定南北4.4×東西4.1mのややゆがむ円形をなすとみる。主軸方向N38°Eを示す。床面は堅く，主柱穴4個は整った配置にあり，南・西の2個は40cmと深く，北・東は28cm・19cmと浅い。炉址は中心よりやや北西に寄ってあり，北側の一部は土壙30によって切られている。炉石は抜かれた痕跡を残し，約100×54cmの楕円形をなす石囲炉であったとみる。炭・灰を含む灰褐色土・暗褐色土・焼土の赤褐色となり，焼土は著しい。

遺物（第49図8～10）は僅かで，8の小土器片と9・10の打石斧のみである。土器片は小片で時期ははっきりしないが，縄文中期後半とみる。炉址からみて，中期後半Ⅲ期ころの住居址と思われる。

下原面21号住居址（第44図）

調査区域の南東部に検出され，集石炉Ⅱの西4.5mにあり，北東は28号住，西は24号住と切り合いとなる。壁は削りとられ，推定径南北4.8×東西4mのゆがむ楕円形をなし，主軸方向28°Wを示す。床面は堅く，主柱穴は5個，壁に沿って配置されているとみる。炉址は二段の掘りこみをなし，覆土は炭・灰を含む灰褐色・暗褐色となり，底部の両側に褐色土があり，底部は焼土となる。

出土遺物はなく，炉址からみて縄文中期後半ともみられる。



第44図　伊久間原遺跡下原面　21・24・28号住居址，土壙25号

下原面24号住居址（第44図）

東は21号住と切りあい，西は22号住と接しあう。壁は削りとられてなく，推定径南北4.2×東西3.6mの変形楕円形をなす。主軸方向N48°Wを示す。床面は堅く，主柱穴は5個とみられ，東側の1個は21号住の柱穴に半分は切られており，炉址の位置近く西に1個はみられる。炉址は中心よりやや西寄にあったとみられ，土壙25号に完全に破壊されていた。

遺物はなく，時期は決めがたいが，中期後半とみる21号住より柱穴の切りあいから古いとみたい。

下原面28号住居址（第44図）

南西は21号住と切りあい，北は29号住と隣接する。壁は削りとられてなく，推定径南北4.0×東西3.35mの楕円形をなし，主軸方向N10°Wを示す。床面は堅く，主柱穴は5個，炉址は中心より東に寄ってあり，地床炉で径60cmのややゆがむ円形をなし，二段の掘りこみをなし，底部の焼土は著しい。

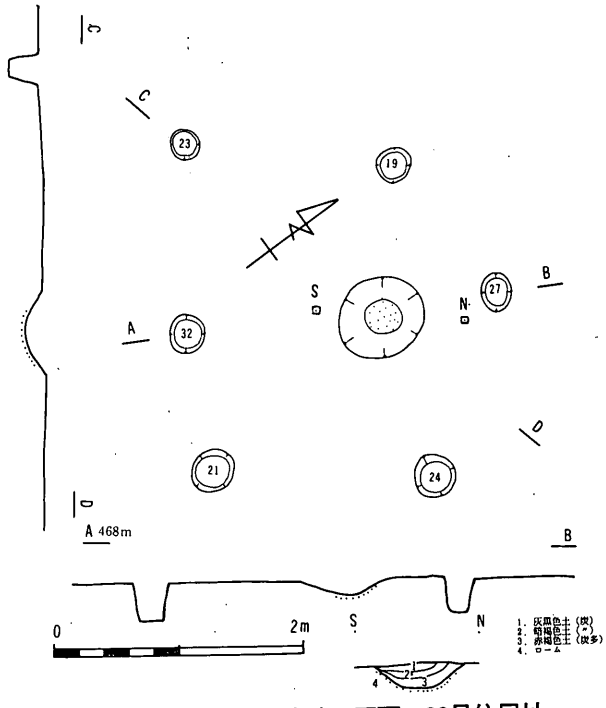
遺物はなく，その時期は決めがたいが，炉址からみると，切りあい関係にある縄文中期後半とみる21号住より古いとみたい。

下原面29号住居址（第45図）

30号住居址の南東6mにあり，南は28号住に隣接する。壁は削りとられてなく，推定径南北3.5×東西3.8mのややゆがむ楕円形をなすとみる。主軸方向はN43°Wを示す。床面は堅く，主柱穴は6個とみるが，西側の1個はやや離れた位置にある。炉址は中心より北東に寄ってあり，地床炉である。炉内部の覆土は，炭を含む灰黒色土・暗褐色土があって，炭を多く含む赤褐色となり，焼土は著しい。

遺物（第49図14～16）少なく，土器は14・15の破片であるが14の沈線のあり方は縄文中期中葉勝坂式にみるものである。16の打石斧は基部を欠くが大形とみる。

遺物は少なくはっきりいえないが，土器片からみて縄文中期の住居址と思われる。



第45図　伊久間原遺跡下原面　29号住居址

下原面31号住居址（第46図）

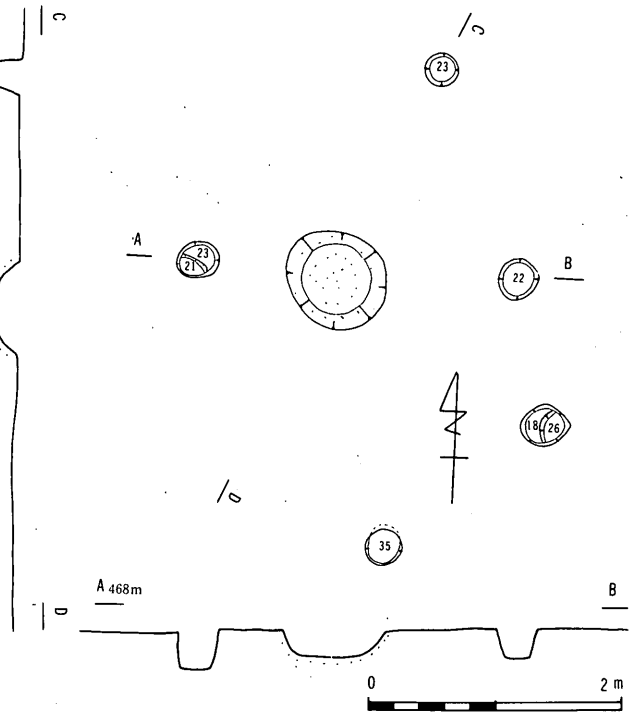
調査区域の北東端部近くに発見され，南西4mに30号住がある。壁は削りとられてなく，推定径南北4.3×東西3.3mのゆがむ楕円形をなすとみる。主軸方向はN25°を示す。床面は堅く，主柱穴は5個，その配置は整っていない。炉址は中心をやや北西寄りにあり，地床炉で焼土は少ない。

出土遺物はなく，その時期は不明である。

下原面27号住居址（第47図）

用地北東境界起点から南20.5m，東境の道路に２分の１がかかって検出された。北側の１部は荒れていた。南北径3.3m，ゆがむ楕円形とみる。主軸方向 N38°W を示す。覆土は表土（耕土）が25cm程あってローム層となり，住居地はローム層に掘りこむ竪穴住居址である。上層は暗褐色があって褐色土となり，ロームの床面となり，堅い。壁高北で23cm・南で18cm，主柱穴は２個検出されているが，配置からして４個とみる。炉址は西に寄ってあり，地床炉で56×35cmの変形の楕円状をなし，上部に僅か灰褐色があって暗褐色となり，底部の焼土は少ない。

遺物（第49図11〜13）は，土器が僅かにあり，11〜13は無文で11は口縁部，胎土は小石粒を多く含み，褐色を呈す。縄文中期後半の土器とみられるが，はっきりしない。



第46図　伊久間原遺跡下原面　31号住居址

下原面32号住居址（第48図）

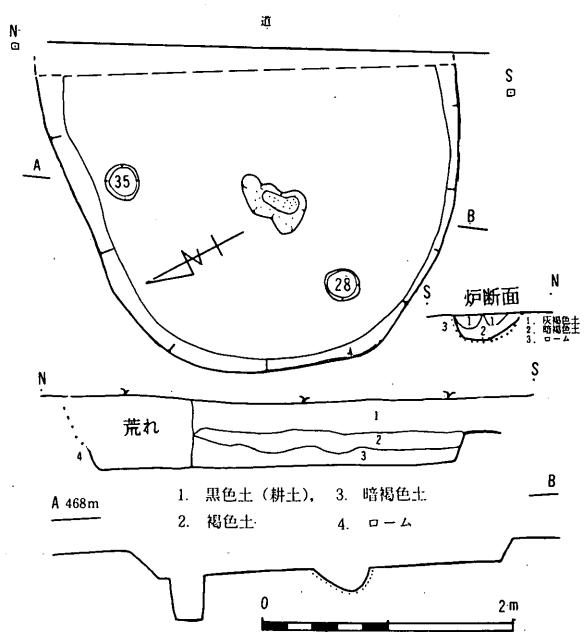
西南端にあり，壁は削りとられてなく，推定径南北3.6×東西3.3mの円形とみる。主軸方向 N10°W を示す。床面は堅く，主柱穴は５個整った配置にある。炉址は中央にあり，地床炉で，灰を含む黒色土・暗褐色土・焼土僅か含む赤褐色土で埋まる。

遺物（第49図17・18）は僅かで，土器片18の羽状につく縄文は，前期とみる。石器に18の打石斧がある。僅かな遺物で時期は決めがたい。

下原面33号住居址（第55図）

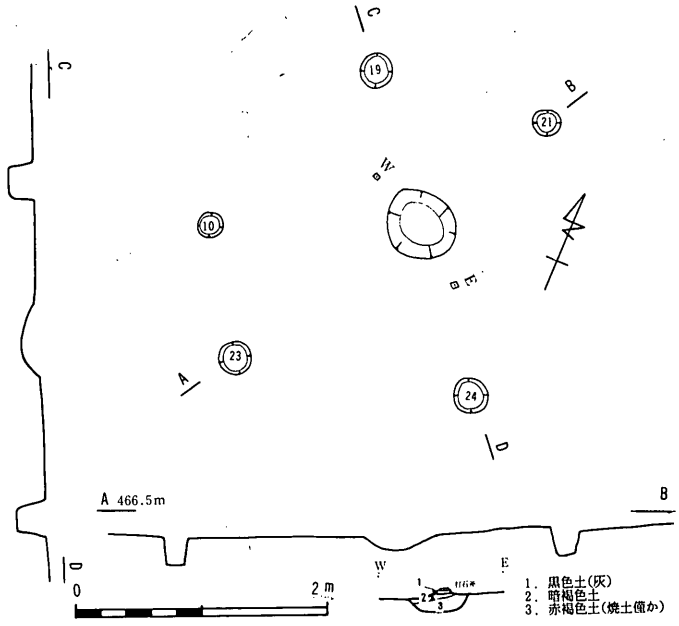
最南端，38号住の北9.5mにあり，北東は34号住に隣接する。壁は削りとられてなく，推定径3.8mの円形とみる。主軸方向 N60°W を示す。床面は堅く，主柱穴は６個，整った配置にある。炉址は西に片寄ってあり，地床炉で，炉内は灰を含む灰黒色土・暗褐色土があって底部のロームになるが，焼土は少ない。

遺物（第49図19〜23）は少なく，土器片は10点余あるが肌が荒れており，図示したものは19・20のみである。19は竹管による平行爪形文をめぐらし，肌は荒れているが縄文が，その下にみられる。



第47図　伊久間原遺跡下原面　27号住居址

縄文前期にみる土器で38号住の土器に近いとみる。石器は21～23があり，いずれも刃部を欠く打石斧である。住居址の時期は縄文前期とみるが，はっきりしない。

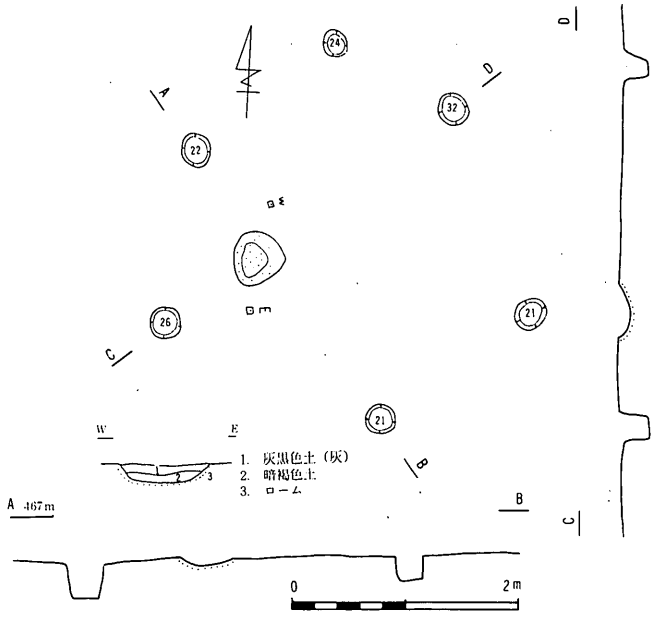


第48図　伊久間原遺跡下原面　32号住居址

下原面34号住居址（第50図）

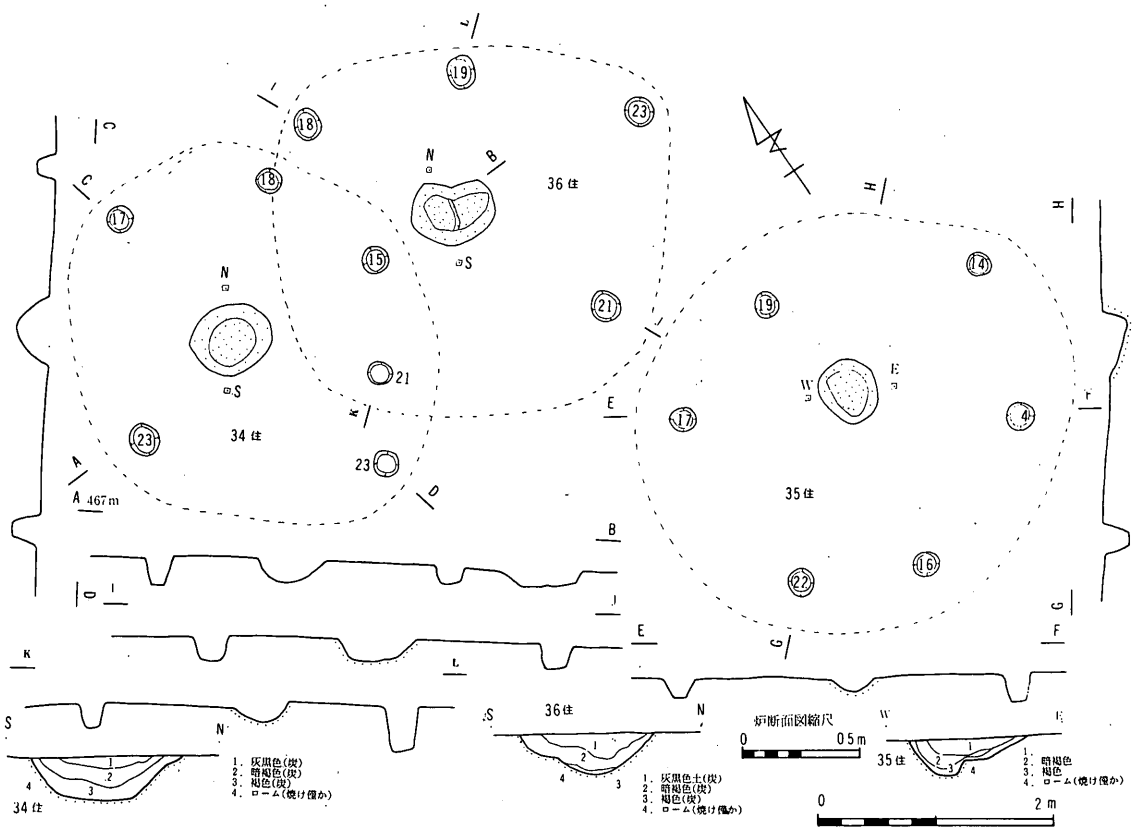
最南端にある38号住の北12mに，33号住をはじめ，34号住・35号住・36号住の４住居址が隣接しあい，切りあって検出された。

34号住居址は東に36号住と切りあい，南西は33号住と隣接する。壁は削られてなく，推定径南北3.5×東西3.3mの楕円形をなし，主軸方向はN20°Eを示す。床面は堅く，主柱穴は５個，整った配置にある。炉址は中心より僅かに西によってあり，地床炉である。炉の内部は炭を含む灰黒色土・暗褐色土・褐色土で底部のロームの焼土は僅かである。



第55図　伊久間原遺跡下原面　33号住居址

遺物（第49図24～26）は僅かであり，24・25の土器片は羽状縄文が施されており，縄文前期の土器である。石器は26の打石斧がある。土器片は小片で，僅かな出土であり，住居址の時期は縄文前期中葉とも考えられるが，はっきりいえない。



第50図　伊久間原遺跡下原面　34号・35号・36号住居址

下原面35号住居址（第50図）

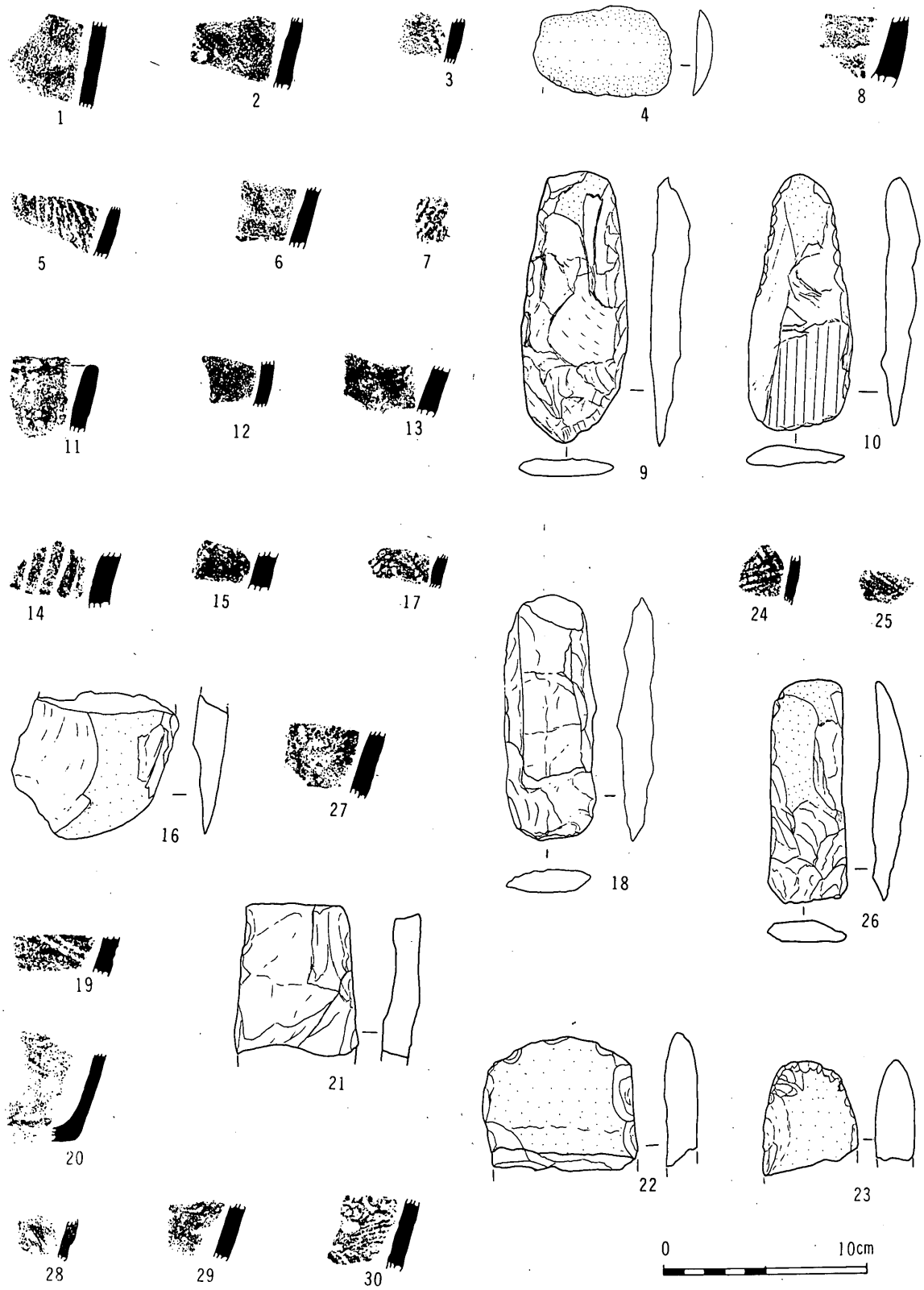
北西に36号住と隣接し，東は方形周溝に接する。壁は削りとられてなく，推定径3.8ｍの円形をなし，主軸方向76°Ｅを示す。床面は堅く，主柱穴６個が整った配置にある。炉址は，ほぼ中央にあり，ゆがむ楕円形をなし，内部は灰褐色土・暗褐色土・褐色土となり，炉壁のロームの焼けは僅かである。

遺物（第49図27）は，27の土器片１点の出土があり，器肌は荒れ，僅かに縄文がみられるのみで，縄文中期とみる。住居址の時期ははっきりしない。

下原面36住居址（第50図）

西は34号住と切りあい，南東は35号住に隣接する。壁は削りとられ，推定一辺が3.5ｍ前後とみる隅丸方形ともみる形状をなし，主軸方向Ｎ22°Ｅを示す。床面は堅く，主柱穴は５個，炉址はほぼ中央にあり地床炉で北にくびれをもつ楕円形で二段の掘りこみをなす。内部は炭を含む灰黒色土・暗褐色土・褐色土があってロームに僅かに焼土をもつ炉壁となる。

遺物はなく，炉址の形態からみて縄文中期後半と思われるが，はっきりしない。

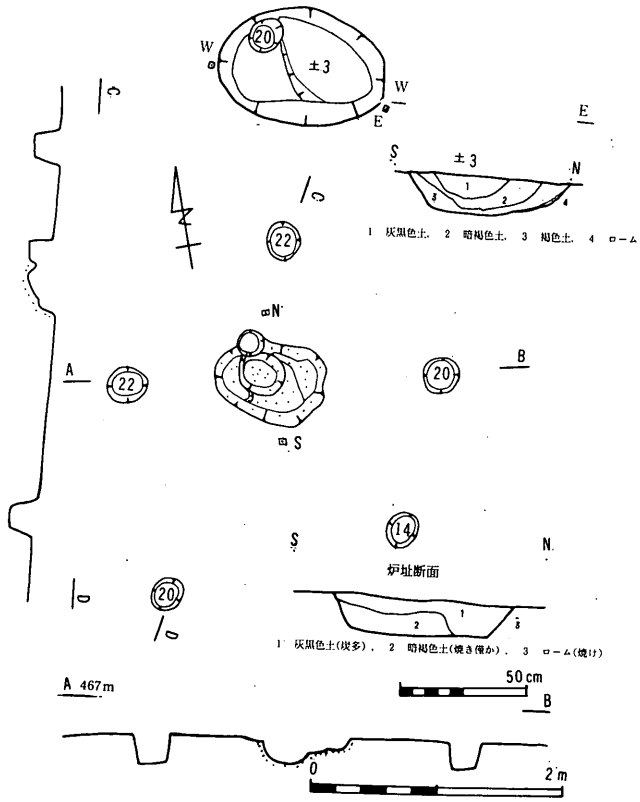


第49図　伊久間原遺跡下原面　19号・20号・22号・26号・27号・29号・32号・33号・34号・35号・37号住居址出土遺物（1：3）
1～3…19住，4…20住，5～7…22住，8～10…26住，11～13…27住，14～16…29住，17・18…32住，19～23…33住
24～26…34住，27…35住，28～30…37住

下原面37号住居址（第51図）

西３ｍに17号住があり，北に接して土壙３号がある。それより北・東は耕作荒れとなっている。壁は削りとられてなく，主軸方向Ｎ10°Ｅを示す。床面は堅く，主柱穴５個が整った配置にある。炉址は僅か中心を北に寄ってあり地床炉で，86×63cmの楕円形をなし，二段の掘りこみをなし，内部は炭を多く含む灰黒色土，焼土を含む暗褐色があってロームの底部となり，焼土は著しい。

遺物（第49図28〜30）は少なく，土器片28〜30の３点である。29は器肌が荒れ，はっきりしないが無文とみる。28は薄手で，櫛状具による細線文と浅い刺突文がつく。30は胎土に繊維を含み，付加条縄文が施され，本遺跡でははじめてみる土器であり，縄文前期前半とみる。出土土器は少なく，住居址の時期は決めがたいが縄文前期と思われる。



第51図　伊久間原遺跡下原面　37号住居址・土壙３号

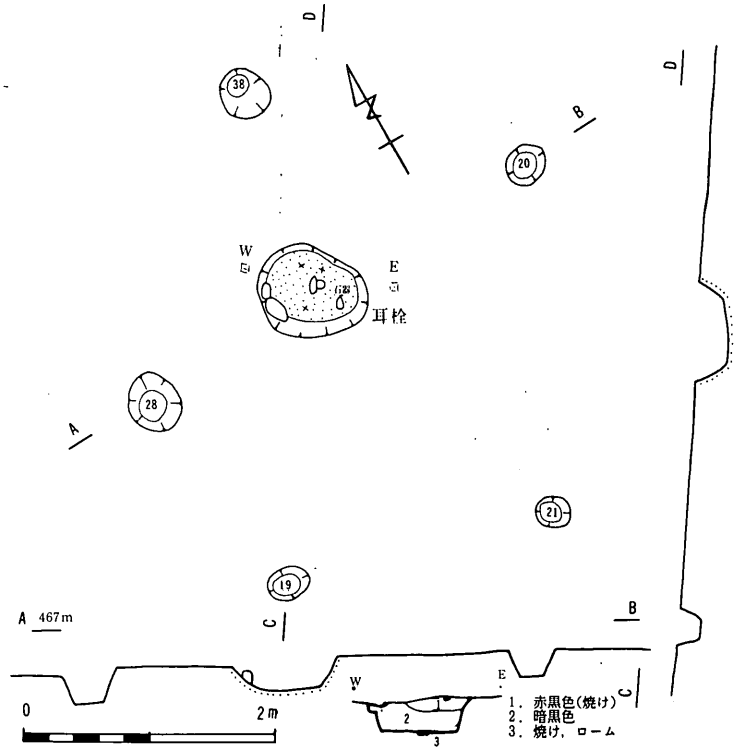
(5) 縄 文 後 期

下原面5号住居址（第52図）

調査区の西側の道路東15m，南3.5mに4号住，北5mに14号住がある。壁は削りとられてなく，推定径南北4.6m×東西4.3mの楕円形をなす。主軸方向N60°Wを示す。床面は堅く，主柱穴は5個，整った配置にある。炉址は中心より西に寄ってあり，90×70cmの楕円形をなす地床炉で，西側に炉辺石2個がある。炉の掘りこみは直で，上層には土器・石器の出土をみ，南西縁部に耳栓の出土をみた。内部は上層に焼土をもつ赤黒色土・暗黒色土があって，焼土の顕著なローム壁となる。

遺物（第54図1～14）は比較的多く，炉址上層に出土している。土器1～10は，7・8に口縁部に沈線をめぐらす他は無文土器で，縄文後期後半の土器である。石器に11・12の打石斧，14の横刃形石器があり，土製品に13の耳栓がある。径6.6cmの精巧な作りである。

遺物の出土状況，土器からみて縄文後期後半の住居址である。

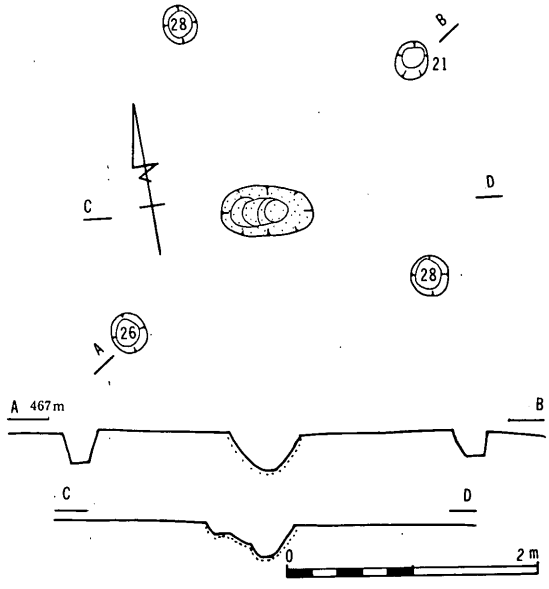


第52図　伊久間原遺跡下原面　5号住居址

下原面7号住居址（第53図）

南は6号住と接し，西2.5mに14号住がある。壁は削りとられてなく，推定径3.8mの円形をなすとみられ，主軸方向N4°Eを示す。床面はあまり堅くない。主柱穴は4個，炉址はほぼ中央にあって，二段の掘りこみをなし，焼土は著しい。

遺物（第54図21・22）は少なく，土器片21・22があり，21は無文の口縁部，22は胴上部片とみられ，2条の横走文がみられる。縄文後期後半の土器で，この期の住居址と思われる。



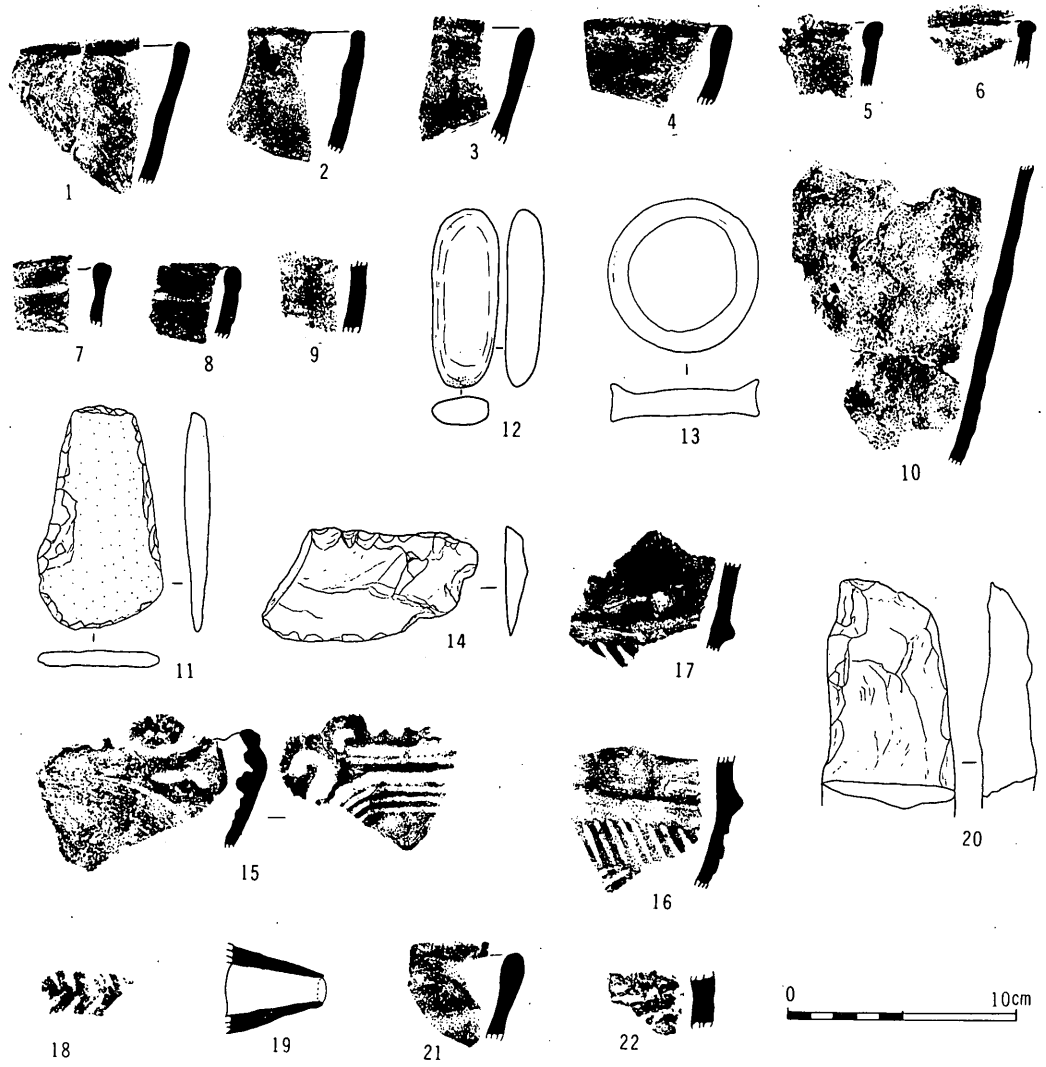
第53図　伊久間原遺跡下原面　7号住居址

下原面８号住居址（第８図）

調査区域の北西にあり，北東２分の１は９号住の上にのっている。壁は削りとられてなく，推定径4.3 *m*の円形をなすとみる。主軸方向 N70°W を示す。床面は堅く，主柱穴は６個整った配置にある。炉址はほぼ中央にあり，楕円形の地床炉で，焼土は著しい。

遺物（第54図15〜20）は少なく，土器には15〜19があり，15は浅鉢で波状口縁をなし，口縁は内湾し，口唇に指頭押圧をめぐらし，突起をもつ。表面は突起部に沈線をめぐらし，その下に眉状の沈線が描かれ刷毛状具による横位の条線があって無文となる。内面の突起部は左右に渦巻文が並び，その波線は波状にのび，下に隆帯が並び，さらに３条の平行沈線で飾っている。器肌は荒れているが，部分的残る面からみて，研磨された精製土器とみる。16・17・18は同一土器とみられ，一条の隆帯がめぐり，その下に羽状となる深い沈線が施されている。19は注口土器の注口部である。これら土器は縄文後期後半の加曽利Ｂ式に比定されるものとみる。石器には20の刃部を欠く打石斧がある。

本住居址は，出土土器からみて縄文後期後半の時期とみたい。



第54図　伊久間原遺跡下原面　５号・７号・８号住居址出土遺物（１：３）

１〜14…５住，15〜20…８住，21・22…７住

2．土　　壙

本次発掘調査によって検出された土壙は，32基を数える。多くは北西側に集中して，南北に並び，区画をもって群をなしている。南から８基の土壙からなる第Ⅰ群，６基からなる第Ⅱ群があり，さらに北に３基からなる第Ⅲ群があるが，その東10ｍに１基があり，その間は耕作荒れとなっており，ここに土壙の存在したことが予想される。

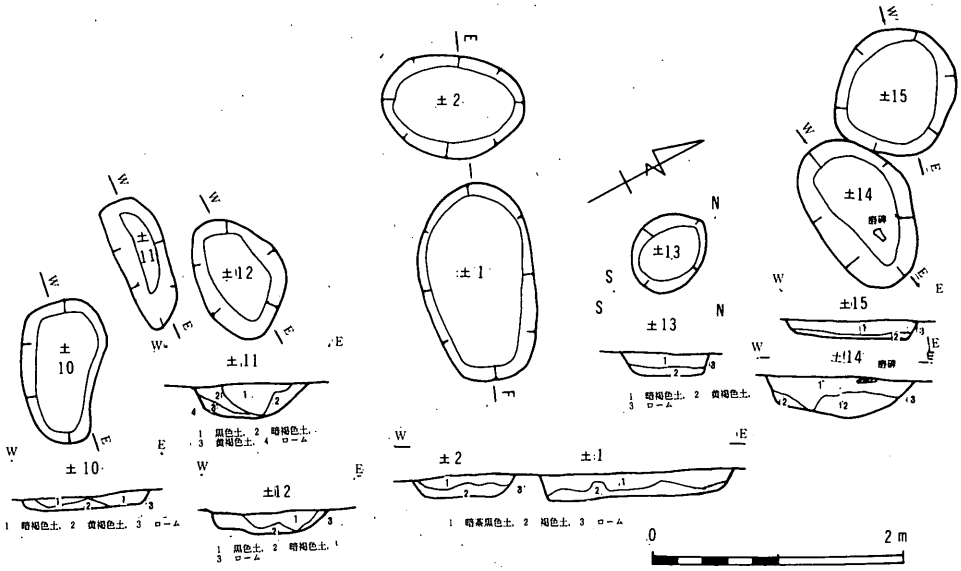
調査区域中中央部の中庭の南に３基，さらに東に２基があり，調査除外の中庭予定地内に土壙の存在は予想され第Ⅳ群とも考えられる。これらの他に用地外近くに，１・２基の点在する土壙が数基ある。検出された土壙は大形が多く，遺物の出土をみたものは少ない。これら土壙を，次の一覧表（表１）にまとめた。

下原面土壙一覧表（表１）

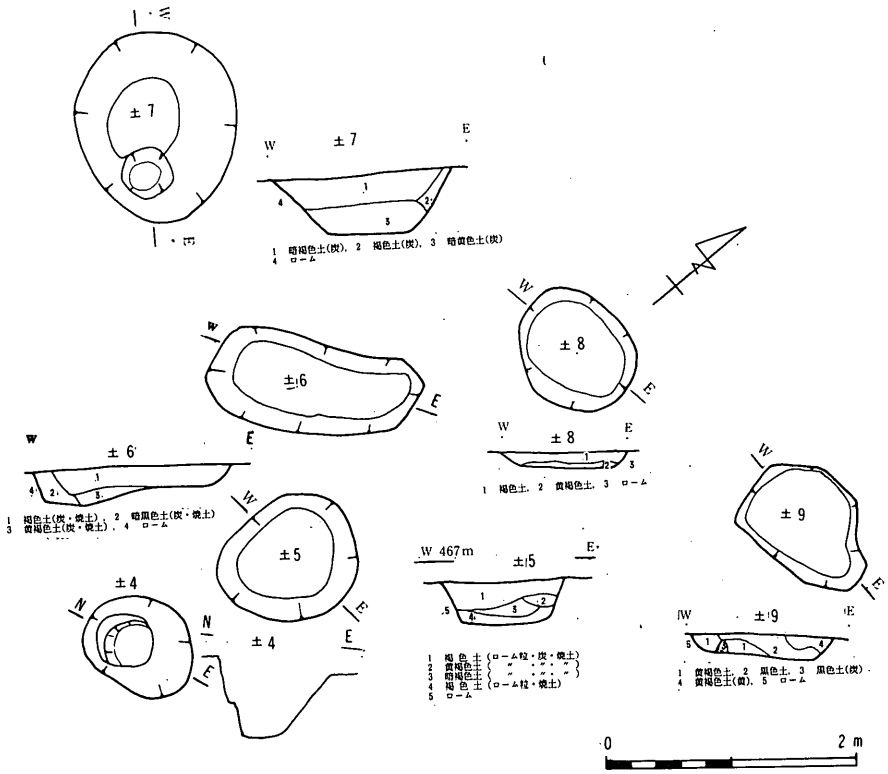
土壙No.	図No.	位　置	形　状	大きさ（cm）	深さ（cm）	底部の状態 断面形	遺　物	時　期	遺物図No.
土壙第Ⅰ群　18号住の西にあり，８基の土壙よりなる。南は耕作荒れとなっている。北3.5ｍに土壙第Ⅱ群がある									
1	56	18住の西2.5ｍ，土２に隣接する	楕円形	95×159	15～20	逆台形をなす	無文小土器片，縄文後期とみる	縄文後期？	な　し
2	〃	土１の西に接す	楕円形	115×80	15	壁はゆるやかな立上がりをなす	な　し	〃？	
10	〃	土壙群Ⅰの南端にある	ゆがむ楕円形	68×115	10	浅い皿状の断面	無文と条線をもつ，縄文後期土器，打石斧１	〃	59図１～４
11	〃	土10と土12の間にある	不正楕円形	43×117	27	ナベ底状の掘りこみ	な　し	〃？	
12	〃	土11の北に移す	僅かゆがむ楕円形	70×100	17	壁はゆるやか，西から東へ深くなる	な　し	〃？	
13	〃	土１と土14の間にある	小形楕円形	70×56	18	逆台形	な　し	〃？	
14	〃	土13の北に，土15の南東に接す	僅かゆがむ楕円形	80×125	20～32	ゆるやかに西から東へ深く掘りこむ	磨石斧１，石匙ともみる，横刃形石器１	〃？	59図５・６
15	〃	土14の北西に接す土壙Ⅰの北西端にある	ややゆがむ円形	105×102	13	逆台形	な　し	〃？	
土壙第Ⅱ群　土壙第Ⅰ群の北3.5ｍにあり，６基の土壙よりなる。									
4	57	第Ⅱ群の最南端にあり，北は土５に隣接する	楕円形	74×94	54～63	北から南に二段に深く掘りこまれる	な　し	不　明	
5	〃	土４の北に隣接する	ゆがむ円形	11.3×98	34	逆台形をなす	な　し	〃	

土壙No.	図No.	位　置	形　状	大きさ（cm）	深さ（cm）	底部の状態 断面形	遺　物	時　期	遺物図No.
6	57	土5の北西にあり北東に土8がある	楕円形	74×165	15～25	西側を深く，東は浅くなる	な　し	不　明	
7	〃	土6の西90cmにある	楕円形	137×128	45	ナベ底形とみる深い掘りこみ	土器小片1（不明）	〃	な　し
8	57	土6の北東80cmにある	楕円形	88×102	10	壁はゆるく浅い掘りこみ	な　し	不　明	
9	〃	土8の東1.2mにある	不整楕円形	80×115	13～19	西から東へゆるく掘りこむ	な　し	〃	
土壙第Ⅲ群 9号住の東3mにあり，3基の土壙よりなるが，さらに南東10mに1基があり，その間と，東側は耕作荒れとなっている									
17	58	3基の土壙群中南に位置する	長楕円形	90×193	30	舟底形をなす，西から東へと深くなる	細線文をもつ薄手土器片無文土器片	早期末	59図7・8
18	〃	土17の北1.5m	楕円形	60×100	9～29	西から東へと三段の掘りこみをなす	な　し	不　明	
19	〃	東に土18と接す	楕円形	73×98	8～18	舟底形をなす	な　し	〃	
3	51	37号住の北に接す	楕円形	95×132	18～30	舟底形をなす	な　し	〃	
土壙第Ⅳ群 調査区域中央部の中庭予定地の南に3基，さらに東に2基あり，調査除外の中庭地内に土壙の存在が予想される									
20	31	2号住の炉址に接してある	不整楕円形	120×102	45	北側壁はゆるい傾斜で底部にいたり，南壁は斜に立ち上がる	縄文前期の斜縄文をもつ，土器片1，石鏃1	前期とみる	59図9・10
21	31	2号住の南に接し土20の南90cmにある	ゆがむ隅丸方形	92×127	10～18	舟底形をなす	な　し	不　明	
24	40	19号住内，南東側にある	円　形	130×123	60～75	直に斜の傾斜壁をもつ	縄文後期無文土器片1	縄文後期？	59図13
23	60	20住の西6m，西1.5mに土22がある	長楕円形	80×160	18	逆台形をなす	縄文前期土器片横刃形石器1，黒曜石片1	縄文前期	59図11・12
22	60	土23の西1.5m，土21の南6mにある	楕円形	83×65	20	南壁はゆるく，北壁は直に立つ	な　し	不　明	
散在する土壙 散在する土壙の中には，群を構成するとみられるものがあり，用地外・耕作荒等によってて不明となったものは多いとみる									
16	39	18号住の東に隣接する	長楕円形	160×75	10	逆台形をなす	な　し	不　明	
25	44	24号住の炉址をこわしてある	楕円形	108×78	45	逆台形，北壁は立ち上がりが内湾	な　し	不　明	

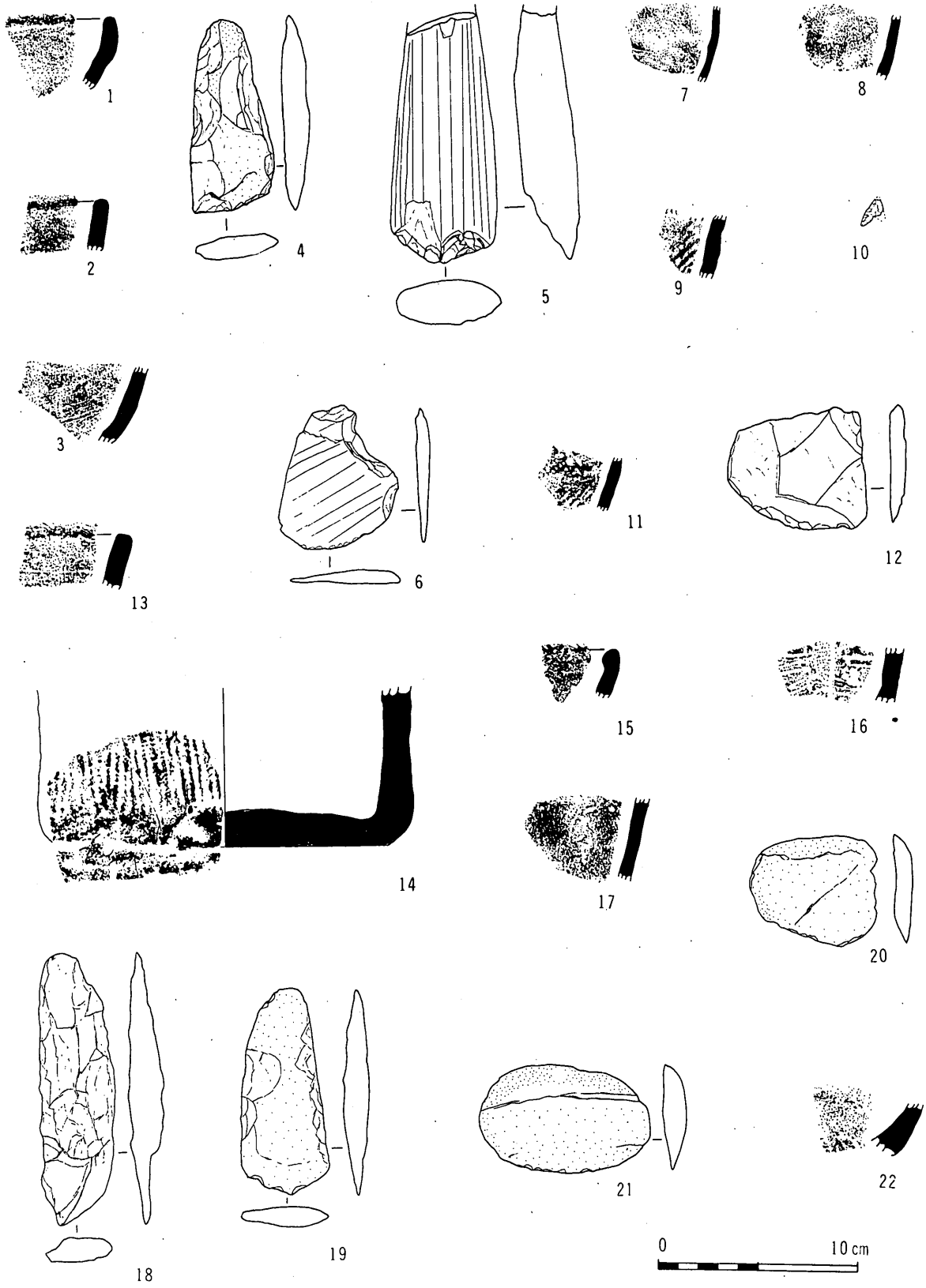
土壙No.	図No.	位　置	形　状	大きさ（cm）	深さ（cm）	底部の状態 断面形	遺　物	時　期	遺物図No.
26	61	東側道路に接す，北5m土27あり	楕円形	95×79	9～20	東から西へ深く舟底形をなす	な　し	不　明	
27	61	東側道路に接す，南5mに土26あり	ゆがむ円形	93×98	20	逆台形をなす	な　し	不　明	
28	61	調査区西東端にある	西側は方形，東側円形	92×130	15～30	西壁はゆるく下がり，東壁は直に上がる，舟底形	床に付いて14の土器底部がすわり，15～17の土器片，打石斧2，横刃1	縄文早期中葉	59図14～21
29	61	29住の北東4.5m土26の西8.5m	不整楕円形，東側耕作荒れ	98×80	20	逆台形をなす	な　し	不　明	
30	43	26号住の炉址，北側の1部を切る	不整楕円形	75×60	50	U字形に掘りこむ	縄文中期土器片	縄文中期中葉	59図22
31	62	38号住の北，5.5m。東3.5mに土32がある。	楕円形	80×135	20	ゆるい壁面をもって南木断面は沈形をなし，南北断面は逆台形となる	な　し	不　明	
32	62	土31の東3.5mにある。	楕円形	60×85	15～20	東から西へと深く掘りこむ	な　し	不　明	



第56図　伊久間原遺跡下原面　土壙群Ⅰ（土1・2，土10～15号）

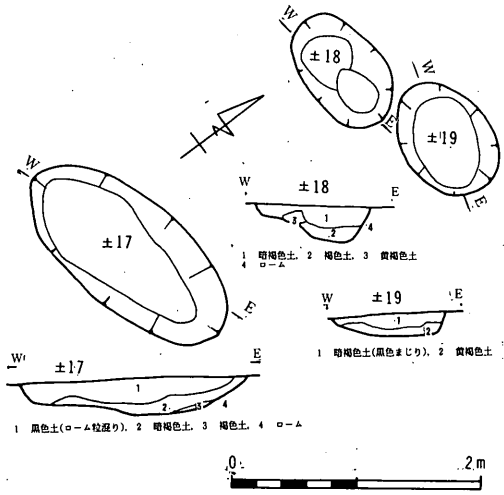


第57図　伊久間原遺跡下原面　土壙群Ⅱ（土4～9号）

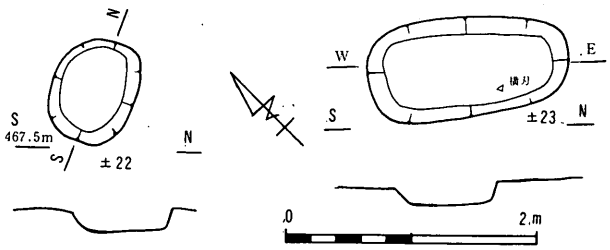


第59図　伊久間原遺跡下原面　土壙出土遺物（1：3）

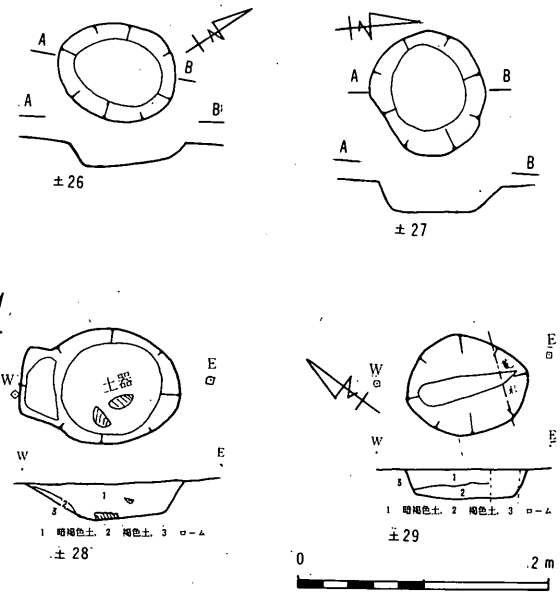
1～4…土10，5・6…土14，7・8…土17，9・10…土20，11・12…土23，13…土24，14～21…土28，22…土30



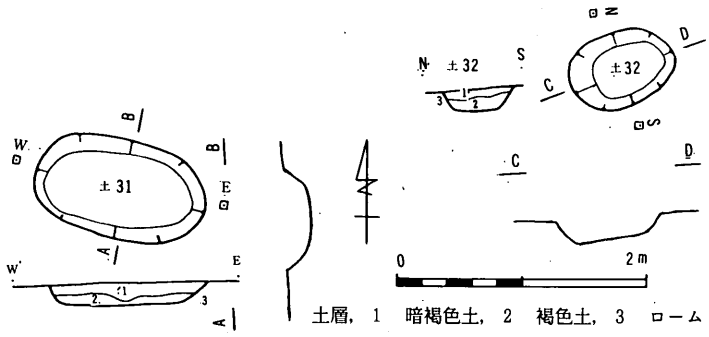
第58図　伊久間原遺跡下原面　土壙群Ⅲ（土17～19号）



第60図　伊久間原遺跡下原面　土壙22号・23号



第61図　伊久間原遺跡下原面　土壙26号～29号



第62図　伊久間原遺跡下原面　土壙31号・32号

3．柱列比・柱穴群

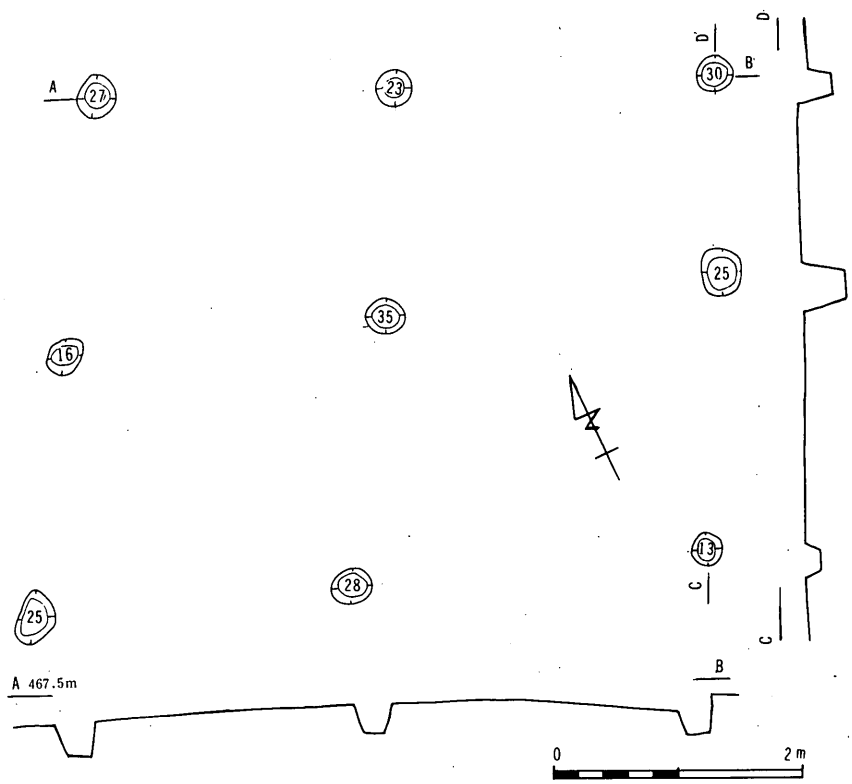
柱列址Ⅰ（第63図）

調査区域の北西端部に検出され，南北4～4.5m×東西5.2～5.5mの方形の範囲に2間×2間の建物址とみられるもので，主軸方向N20°Eを示す。しかし，柱穴の並びはやや不規則である。

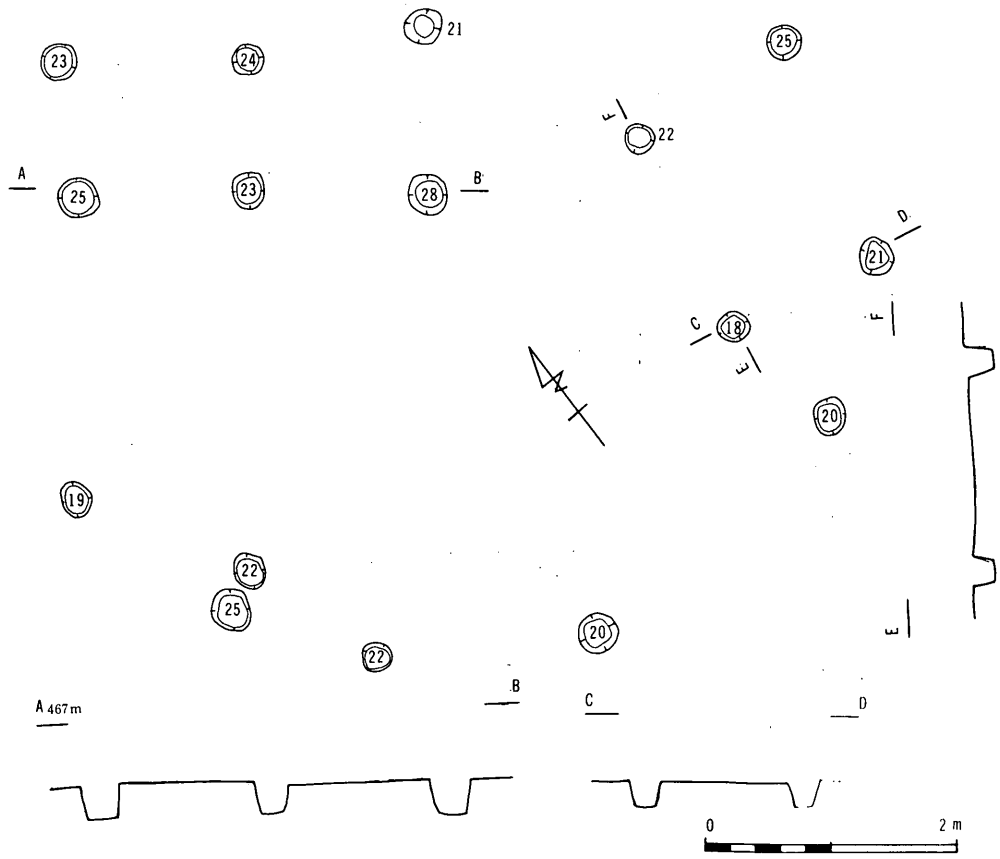
遺物（第70図13～15）は陶器片数点がある。13は青磁の香炉片とみられ，口径11cm，紬のたっぷりかかった美しいものである。14は碗の口縁部，鉄紬がかかる。15は碗の底部で須恵質で無紬，上部に僅か鉄紬がかかる。その他碗とみる小片が3片ある。いずれも中世末とみるものであり，上段伊久間原面にあった伊久間城跡に関連するものとみたい。

柱穴群（第64図）

1号住の南5m，南は15号住に接する。西は調査除外区域となる。16個の柱穴が検出されているが，北側には3個が2列に並び，東側には4個が方形に並んでいるが，整った配置ではなく，建物址とはいえない。1～1.5mの間隔をもっており，棚とも思われるが不明である。中世のものともみられるが，遺物はなく，はっきりしない。



第63図　伊久間原遺跡下原面　柱列址Ⅰ



第64図　伊久間原遺跡下原面　柱穴群Ⅰ

4．集　石　炉

集石炉Ⅰ（第65図）

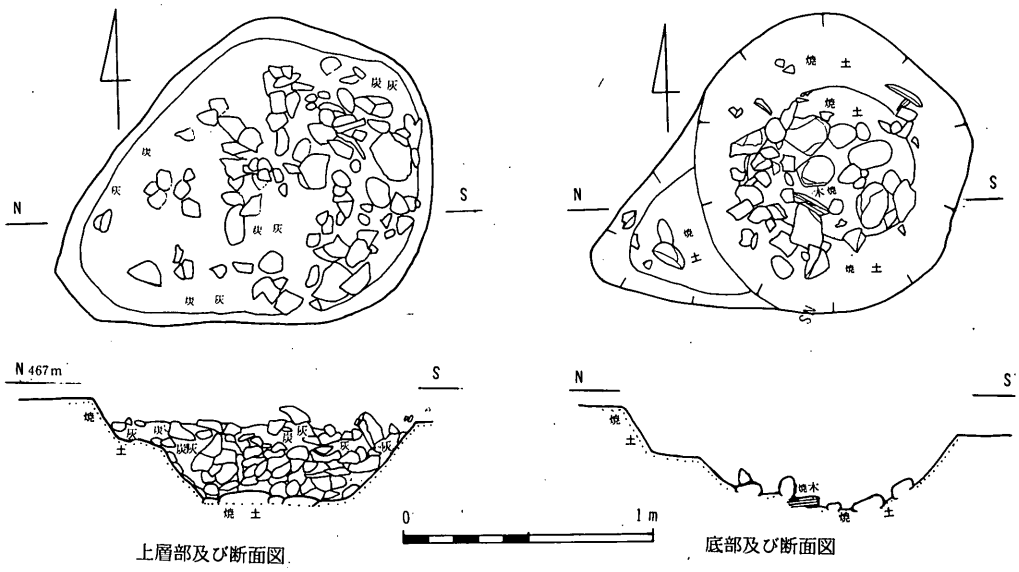
1号住の東7ｍ，土壙群Ⅰの西6.5ｍにあり，周囲から離れた位置にある。主体部は2.43〜2.2ｍの円形をなし，西側に舌状に0.95×1.3ｍの三角形の突起をもつ，突起部は上部に礫をもつが下部は炭・灰がつまっている。深さ40cmで段をもって主体部になる。主体部は上層より礫が詰まり，灰・炭が間隙を埋めてうる。底部にはロームに付く礫があり，焼木もみられる。深さ75cm，ナベ底形の断面形をなし，上層から底部の焼土は顕著である。

遺物（70図1〜3）に，内部につめられた礫の中に1〜3の横刃形石器の出土をみているが，集石炉の時代の決めてはない。

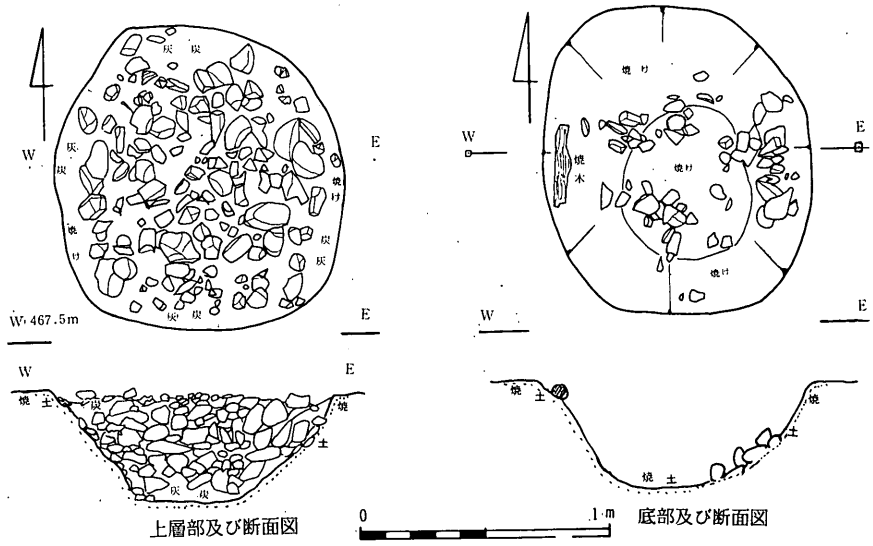
集石炉Ⅱ（第66図）

東側道路の南東にあり，道路より4.3ｍ入った位置にあり，21号住の東4.5ｍにある。南北2.4×東西2.25ｍの円形をなし，上部から底部にかけて礫がぎっしり詰まり，その間隙に灰・炭が埋まる。深さ90cm，断面形はナベ底形をなし，西壁上部には焼木が付き，東壁下半部に礫がついている。壁の上部から底部の焼土は顕著であり，周辺にも焼土がみられる。

遺物（第70図4〜6）に，4〜6の凹石が礫に混ざって出土をみるが，集石炉の時期は決めがたい。



第65図　伊久間原遺跡下原面　集石炉Ⅰ



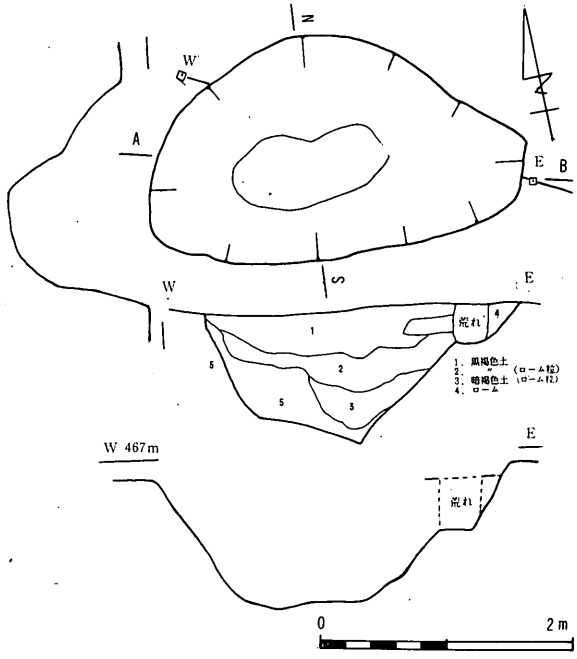
第66図　伊久間原遺跡下原面　集石炉Ⅱ

5．竪　穴　遺　構

竪穴遺構Ⅰ（第67図）

西2.5mに18号住，北西65mに17号住あり，東は中庭予定地の調査除外区となる。南北17.5×東西4.13mのゆがむ楕円形をなし，東端上層は配水管埋設で荒れている。ローム層に深さ105cm掘りこみ，断面形はナベ底形をなす。覆土は上層に黒褐色土，次いでローム粒を含む黒褐色土，下層はローム粒を含む暗褐色土があって，底部のローム層となる。

遺物（第90図7～10）土器は数点の小片があり，図示した7・8は無文，9の底部は2条単位の斜沈線が施され，浅鉢形の底部であり，縄文中期の土器片とみる。石器に10の敲打器があり，いずれも上層出土である。竪穴の時期は不明であり，おそらく狩猟用の落し穴とみたい。



第67図　伊久間原遺跡下原面　竪穴遺構Ⅰ

6．方　形　周　溝

方形周溝Ⅰ（第68図）

調査区南端中央部にある。南北15×東西17mの範囲に東は切れており，コの字状に幅70～100cm，ローム層に深さ25～35cmの溝でほぼ方形に囲むものである。北西隅には幅約90cmの陸橋状の切れがある。

遺物（第90図16～18）は溝よりの出土で僅かである。16は鉄釉碗片，18は碗底部，17は甕底部とみられ須恵質で内面に鉄釉がかかる。この他図示しないが鉄鏃1点がある。陶片は中世末とみられ，方形周溝の性格は把握できなかった。

7．溝　　址

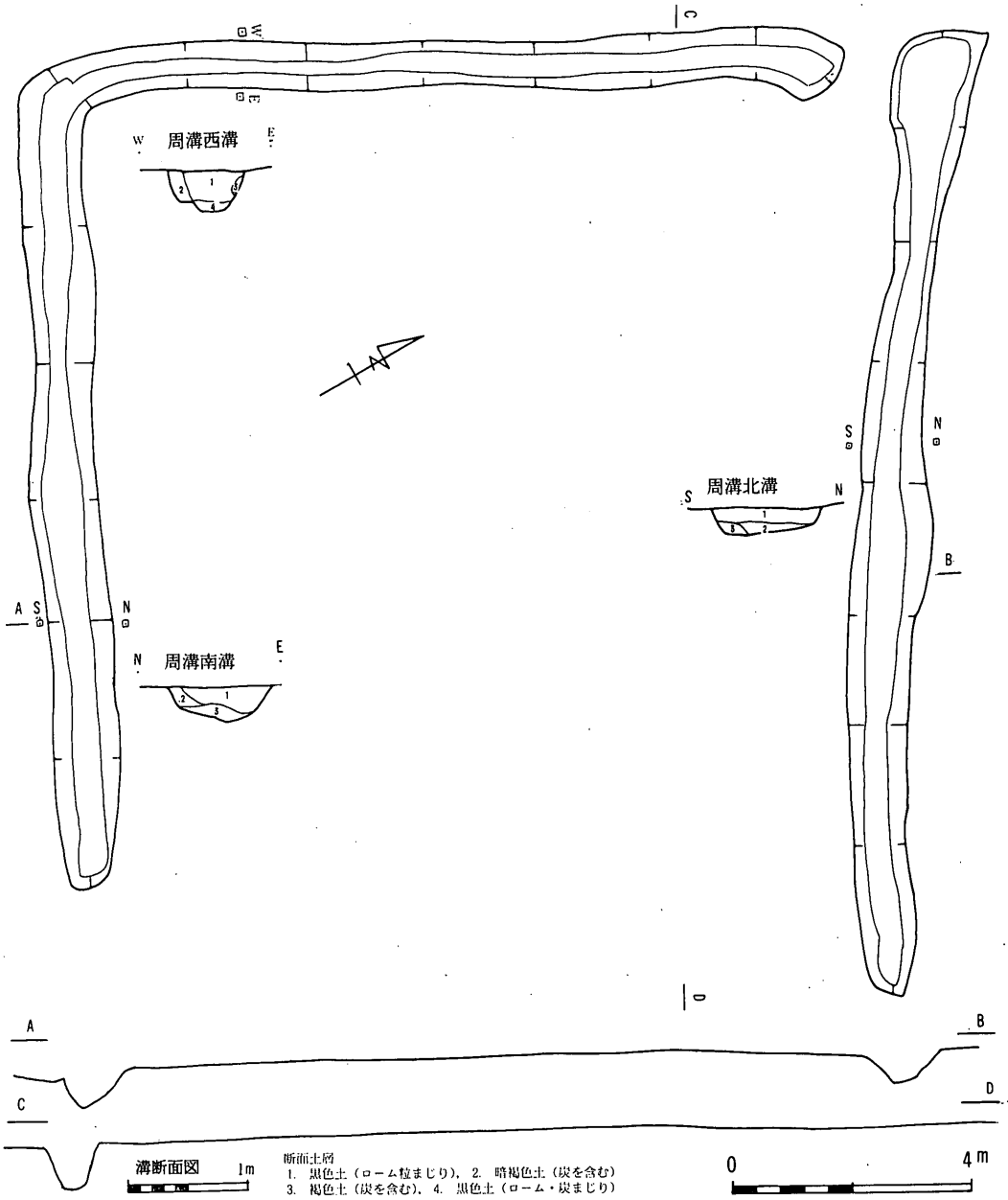
溝址Ⅰ（第69図）

調査区域の南端にあり，11号住・38号住の南2mから南の段丘端部へ約15m延びて落ちている。幅1.9～2.5mあり，大半は約2.2m幅である。深さは北で15cm，中・南で40cmと流れ沿って深さをましており，ゆるいカーブをなしており，洪水時の流路である。

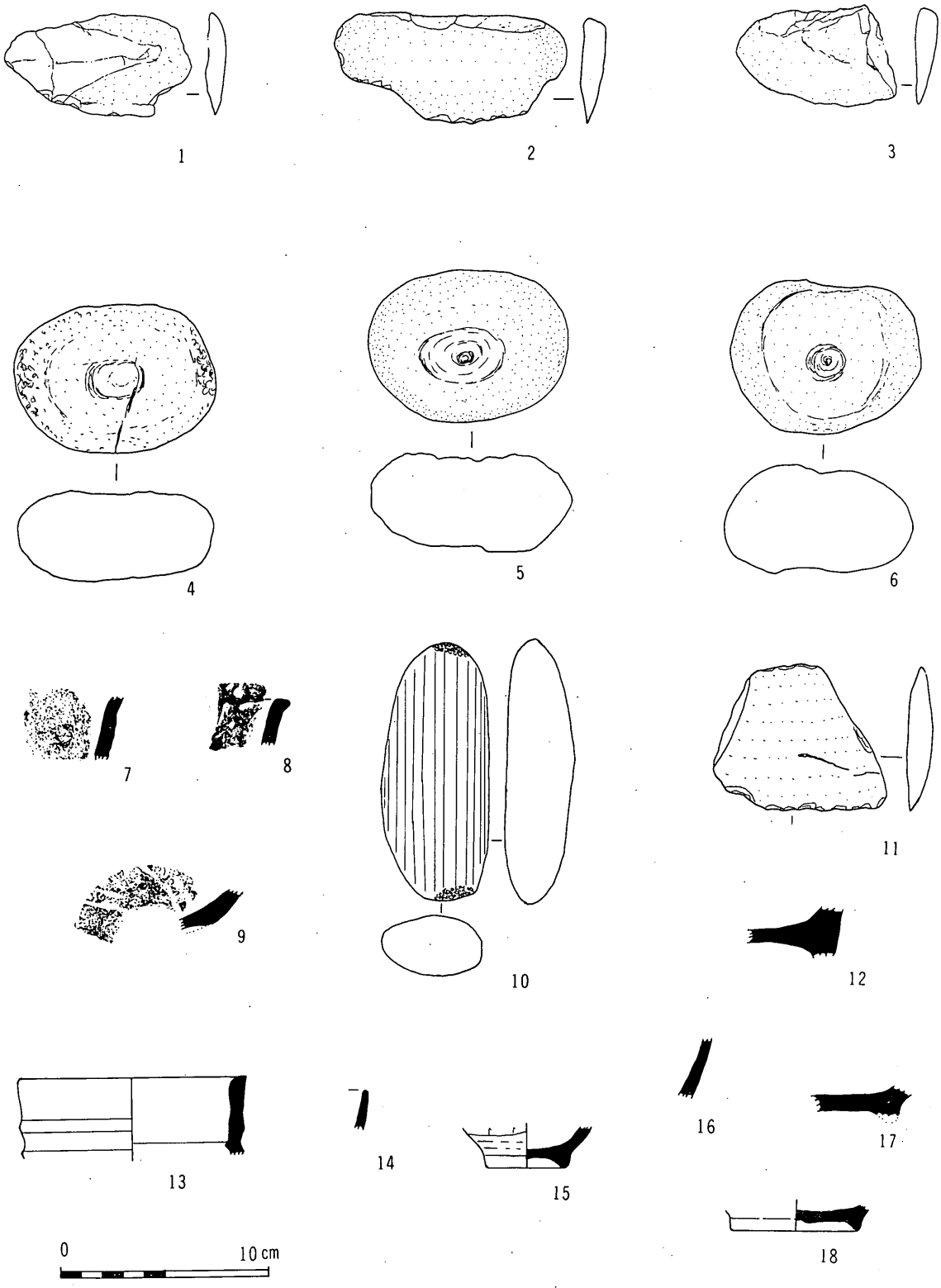
溝址Ⅱ（第69図）

溝址Ⅰの西26mにあり，最南西端に検出された。北側はさらに北に進むとみるが，調査除外区で不明，南に12m余延びて段丘崖に落ちる。幅1.5〜2.1mあり，大半は幅1.7m前後である。北側の調査区境から2.2mの間は，流れのよどみをなしたとみる幅2.1m，深さ20cmの凹みがあり，それより南は幅1.6m前後，深さ10cm内外と深くなる。溝の西側の壁は直に近く，東壁はゆるやかに底部に至る。溝址Ⅰに比して流れはゆるやかで，洪水の余波の流れを受けた自然流路とみたい。

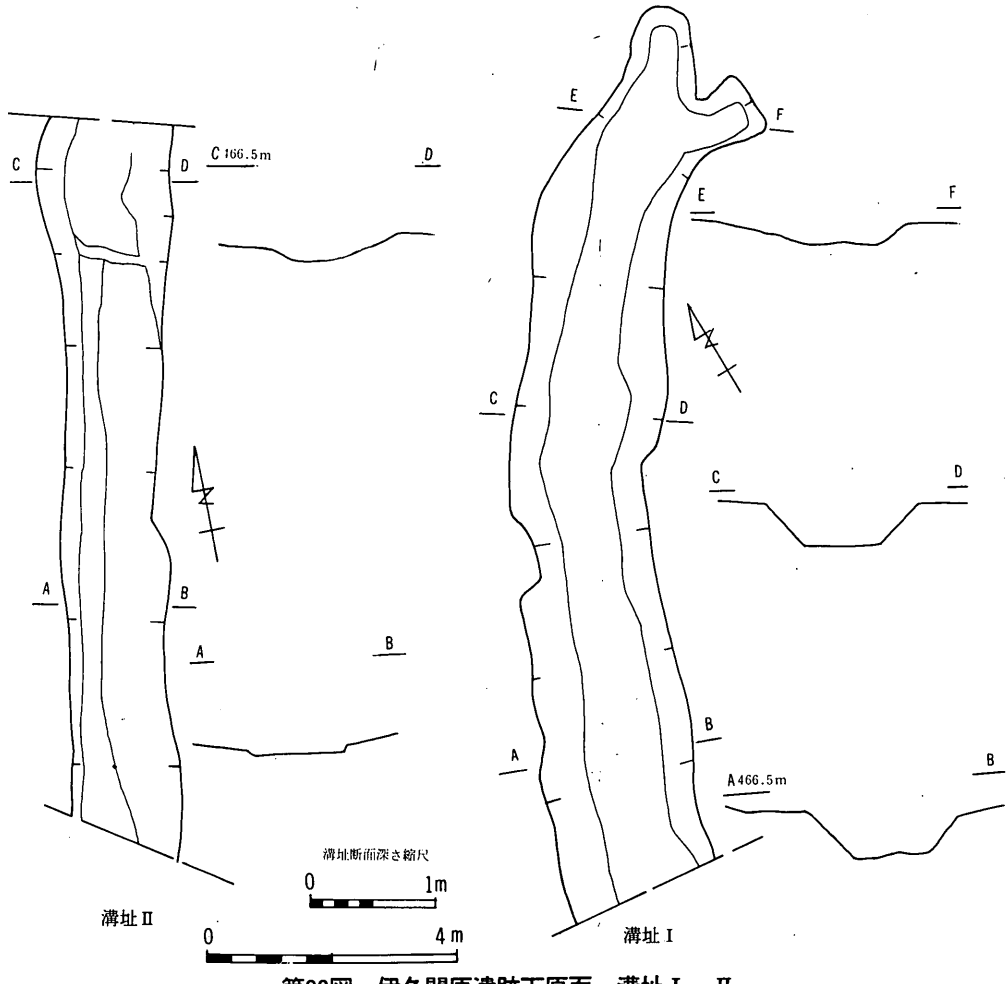
遺物（第70図11・12）は，流れこみのもので11は横刃形石器，12は台付甕の底部片であり，縄文中期後半Ⅲ期にみるものであり，この期以後の洪水流路とも思われる。



第68図　伊久間原遺跡下原面　方形周溝Ⅰ



第70図　伊久間原遺跡下原面　集石炉Ⅰ・Ⅱ号，竪穴遺構，溝址Ⅱ，柱列址Ⅰ，方形周溝Ⅰ出土遺物（1：3）
1～3…集石炉Ⅰ，4～6…集石炉Ⅱ，7～10…竪穴遺構，11・12…溝址Ⅱ，13～15…柱列址Ⅰ，16～18…方形周溝



第69図　伊久間原遺跡下原面　溝址Ⅰ・Ⅱ

8．伊久間原遺跡下原面発掘調査出土石器一覧表（表２）

打……打石斧，横刃……横刃形石器，敲……敲打器，硬……硬砂岩
凝……凝灰岩，砂……砂質，黒……黒曜石

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
1住	7	10	石皿	花	13	14.2	1,230	一部欠け
〃	〃	〃	石鏃	黒	1.3	1.3		
〃	〃	12	敲	花	6.0	4.6	180	
〃	〃	13	磨石	花	8.2	7.6	350	一部欠け
9住	9	20	石鏃	黒	1.9	1.1		一部欠け
〃	〃	21	〃	〃	2.2	1.2		
9住	9	22	石鏃	黒	2.2	1.5		
〃	〃	23	ナイフ形石器	〃	2.9	1.1		
〃	〃	24	磨石	花	13.1	7.4	620	風化
〃	〃	25	〃	〃	7.2	7.0	320	
13住	11	26	石鏃	黒	1.0	0.6		一部欠け
〃	〃	27	石錐	〃	1.0	0.3		基部半折れ

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
13住	11	28	剥片石器	黒	1.2	2.0		
〃	〃	29	台石？	花	9.3	8.7		風化
〃	〃	30	磨石	硬	5.4	3.8	65	
〃	〃	31	〃	緑泥岩	4.2	4.7	40	
〃	〃	32	台石	硬	15.7	9.5	790	
14住	13	24	台石	花	9.3	10.8	760	
〃	〃	25	〃	〃	8.1	10.8	595	
〃	〃	26	磨石	硬	7.4	10.0	408	
〃	〃	27	〃	花	6.4	6.8	210	雲母多
〃	〃	28	凹石	緑色岩	5.1	6.5	152	
〃	〃	29	敲	花	8.6	5.1	240	
17住	15	17	台石	砂岩	17.4	9.7	870	
〃	〃	18	磨石	硬	7.3	5.6	150	
〃	〃	19	石匙	頁岩	3.3	4.4		
〃	〃	20	石匙？	チャート	1.6	3.8		基部を欠く
38住	19	1	石匙	〃	2.6	4.2		
〃	〃	2	剥片石器	〃	2.7	3.4		
〃	〃	3	石匙	黒	1.4	2.9		一部欠け
〃	〃	4	石鏃	〃	2.1	1.6		〃
〃	〃	5	磨石斧	緑色岩	9.4	6.0	335	折れ
〃	〃	6	石棒	砂岩	12.6	6.0	700	
〃	〃	7	横刃	硬	6.7	11.3	120	
〃	〃	8	〃	〃	5.4	7.5	92	
〃	〃	9	〃	〃	5.6	7.5	75	
〃	〃	10	〃	〃	5.5	6.2	30	
〃	〃	11	〃	〃	3.7	6.3	31	
〃	〃	12	敲	〃	7.5	3.7	68	
〃	〃	13	横刃	〃	5.1	5.7	50	欠け
〃	〃	14	敲	〃	8.1	3.0	60	
〃	〃	15	打	凝	10.3	3.0	40	
〃	〃	16	台石	花	8.9	10.6	765	
〃	〃	17	敲	ホルンヘルス	5.6	7.4	310	
〃	〃	18	敲	硬	12.4	4.6	305	

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
38住	19	19	磨石	硬	6.8	8.1	168	
〃	〃	20	〃	〃	5.1	5.1	165	石棒頭部？
これら石器の他に黒曜石・チアート片多数あり								
11住	23	31	飾玉	ロウ石	1.5			折れ
〃	〃	32	石匙	チャート	2.8	4.4	9	
〃	〃	33	〃	〃	2.7	3.5	5	
〃	〃	34	剥片石器	凝	2.4	3.7	7	
〃	〃	35	〃	チャート	1.3	2.4	4	
〃	〃	36	〃	ハリ質安山岩	2.5	2.8	7	
〃	〃	37	〃	〃	4.5	2.3	11	
〃	〃	38	〃	凝	2.5	3.6	4	
〃	〃	39	〃	ハリ質安山岩	0.9	2.2		欠け
〃	〃	40	〃	チャート	2.8	2.0		
〃	〃	41	石錐	タンパク石	4.3	1.5	3	
〃	〃	42	〃	黒	2.1	1.6		
〃	〃	43	尖頭器	〃	2.8	2.2	3	
〃	〃	44	石鏃	〃	1.7	1.6		
〃	〃	45	〃	〃	1.6	2.0		
〃	〃	46	〃	〃	1.6	1.5		
〃	24	1	凹石	花	7.1	8.9	383	
〃	〃	2	礫器	硬	10.2	10.4	380	
〃	〃	3	敲？	粘板岩	12.2	2.7	80	
〃	〃	4	凹石	花	9.6	8.9	506	
〃	〃	5	礫器	硬	7.5	9.8	223	
〃	〃	6	磨石	〃	5.8	7.2	187	
〃	〃	7	横刃	〃	3.8	6.7	38	
〃	〃	8	〃	〃	5.6	7.0	56	
〃	〃	9	〃	〃	4.6	6.5	32	
〃	〃	10	〃	〃	5.3	9.0	5.5	
〃	〃	11	〃	〃	4.4	6.9	3.0	
〃	〃	12	打	〃	9.6	5.5	180	刃部欠け
〃	〃	13	敲	花	5.2	7.0	200	

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
11住	24	14	磨石	硬	5.6	4.2	53	
〃	〃	15	打	〃	5.5	3.4	47	刃部欠け
〃	〃	16	〃	凝	7.5	4.0	102	〃
〃	〃	17	〃	〃	9.1	3.7	50	
〃	〃	18	〃	硬	8.0	3.7	43	刃部欠け
以上の外，黒曜石・チャート片の多量の出土をみる								
30住	28	1	石棒	緑色岩	19.2	6.4	1,260	
〃	〃	2	打	硬	13.3	5.0	188	大型
〃	〃	3	〃	凝	10.3	4.2	90	
〃	〃	4	〃	〃	11.2	4.7	155	大型
〃	〃	5	〃	〃	12.0	4.0	110	大型
〃	〃	6	横刃	硬	5.7	10.7	91	
〃	〃	7	〃	〃	6.8	9.0	130	
〃	〃	8	横刃	〃	5.4	9.0	58	
〃	〃	9	〃	〃	5.5	6.2	50	
〃	〃	10	〃	〃	5.2	8.3	42	
〃	〃	11	〃	〃	4.7	6.8	40	
〃	〃	12	石匙大	〃	6.3	9.2	90	
〃	〃	13	〃	〃	6.6	8.0	45	
〃	〃	14	凹石	花	7.4	8.6	400	風化著しい
〃	〃	15	磨	〃	8.7	9.7	590	
〃	〃	16	鏃	黒	3.2	1.6	3	
〃	〃	17	〃	〃	1.2	0.8		
〃	〃	18	〃	〃	1.7	1.0		
〃	〃	19	石匙	ハリ質安山岩	2.2	6.0	10	
〃	〃	20	剥片石器	黒	1.6	2.0	4	
〃	〃	21	〃	粘板岩	2.3	5.0	11	
4住	30	9	打	凝	10.2	3.2	75	
〃	〃	10	〃	硬	9.0	4.8	85	折れ
〃	〃	11	剥片石器	黒	2.5	3.4		
3住	35	6	磨	輝緑岩	7.6	5.3	220	折れ
〃	〃	7	敲	砂岩	10.3	3.3	70	
〃	〃	8	磨	〃	4.7	3.3	60	

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
〃3住	35	9	敲	砂岩	6.0	5.6	215	
2住	〃	10	磨	硬	6.5	6.7	110	
6住	〃	12	鏃	黒	2.1	1.5		
〃	〃	13	〃	〃	1.5 1.5	1.2 1.2		上部欠け
〃	〃	14	磨	硬	4.7	5.9	64	
10住	〃	17	石匙	チャート質	10.2	4.8	47	（縦長）
〃	〃	18	打	硬	9.2	4.1	83	刃部折れ
〃	〃	19	〃	〃	8.6	8.7	230	基部折れ
〃	〃	20	横刃	〃	7.7	5.5	92	刃部折れ
〃	〃	21	打	ハリ質安山岩	5.0	3.2	25	
〃	〃	22	横刃	硬	4.0	7.1	40	
〃	〃	23	敲	〃	5.1	2.8	32	
12住	〃	24	石鏃	黒	1.8	1.2		
15住	〃	28	大型横刃	硬	8.1	15.2	260	
20住	49	4	横刃	硬	5.3	6.7	30	
26住	〃	9	打	凝	13.2	5.2	145	
〃	〃	10	〃	〃	12.3	5.0	120	
29住	〃	16	〃	硬	7.0	7.5	90	基部欠け
32住	〃	18	〃	〃	12.0	4.5	115	大型完形
33住	〃	21	〃	粘板岩	7.0	6.2	110	刃部・基部折れ
〃	〃	22	〃	硬	6.0	7.2	119	基部折れ
〃	〃	23	〃	〃	5.0	4.7	55	〃
34住	〃	26	〃	凝	10.8	3.9	103	大型完形
5住	54	11	打	硬	9.7	5.4	73	
〃	〃	12	敲	砂岩	7.7	2.9	55	
〃	〃	14	横刃	硬	5.0	8.5	45	
8住	〃	20	打	〃	9.4	6.0	175	刃部折れ大形

土壙，集石炉Ⅰ・Ⅱ，竪穴，溝址

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
土10	59	4	打	硬	10.2	4.4	56	
土14	〃	5	磨石斧	砂岩	12.2	5.3	31	刃部折れ
〃	〃	6	横刃	凝	6.7	5.8	32	
土20	〃	10	鏃	黒	0.9	1.1		一部欠け
土23	〃	12	横刃	硬	5.8	6.4	48	
土28	〃	18	打	〃	13.7	3.6	100	
〃	〃	19	〃	凝	10.2	4.4	56	
〃	〃	20	横刃	硬	5.5	6.3	42	
〃	〃	21	〃	〃	5.1	8.4	63	
集石炉Ⅰ	70	1	横刃	〃	4.8	9.0	41	焼け著しい（左側ススけて黒ずむ）
〃Ⅱ	70	2	〃	〃	5.0	11.0	85	
〃Ⅰ	〃	3	〃	〃	4.6	7.3	40	焼け（黒ずむ）
〃Ⅱ	〃	4	凹石	花	7.1	9.4	422	
〃	〃	5	〃	〃	7.3	9.7	480	
〃	〃	6	〃	〃	7.0	9.1	512	
竪穴	〃	10	敲	硬	12.6	5.2	368	
溝址	〃	11	横刃	凝	7.1	8.0	95	

Ⅳ まとめ

伊久間原遺跡の調査は，昭和27・29年度に最初の調査が行われ，昭和52年度に伊久間原面と下原面北側と中央部の１部発掘調査がなされ，昭和53年度畑灌水工事に伴う立合調査が実施された。その結果，381軒の住居址の存在が確かめられた。しかし，今次調査区は，下原面の最南西端部にあり，伊久間原遺跡での調査が全くなされていない唯一の残された地区であった。

今次の調査の結果，住居址38軒・土壙32基・集石炉２基の他柱列址・竪穴遺構・方形周溝・溝址等が検出された。これらについて各時代毎概観することで，まとめとしたい。また，調査区の微地形と遺構との関連も考えてみたい。

調査区の微地形は，北から東は上段の伊久間原原の緩い段丘崖が下原面へと下がり，下原の中央部から北は平坦な面をなしているが，南端部は南北130ｍで比高３ｍとなる。大降雨の際は上段面より比高17ｍの段丘崖を流れ落ちる洪水は，この南端部を削って一気に浸蝕崖を下ったものとみる。土層をみると，10㎝前後の耕土（表土）下は，ロームの耕作攪乱があってローム層となっており，耕土は薄く，直にロームとなることは，表土の流失を物語っている。

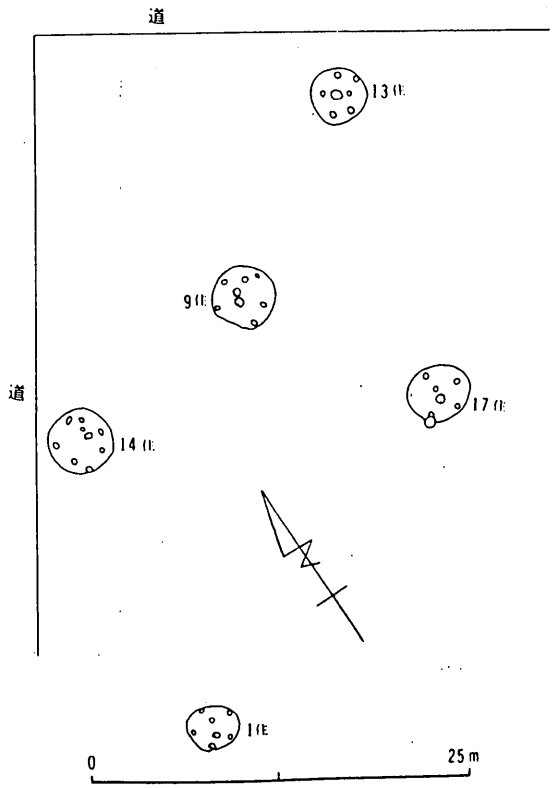
調査された38軒の住居址のうち，竪穴住居址の形態をなすは11軒のみで，他は壁は削りとられ，炉址と柱穴の検出によって住居址を確認したものであり，地形的影響によるものと受けとめられる。

縄文早期末

住居址５軒が，調査区の北西部に南北25ｍ，東西32ｍの範囲に東西方向に並ぶ，円形の竪穴住居址である。壁高は北の住居址は深く，南は浅い。各住居址の共通点は，地床炉でその近くに柱穴をもつことである。この柱穴は，壁に沿って配置する主柱穴に比し，深い掘りこみである。中心の柱を軸にして円錐形状の屋根であったの説もあり注目される（第71図）。

縄文早期土器（第72図）東海系の土器群であり，深鉢で鈍い尖底となるものと丸底がある。主体となる土器は，２～５㎜と薄手の硬い典型的なオセンベイ土器であり，その他，厚みをもつ土器・貼布帯・縄文を施す土器等四類がみられる。

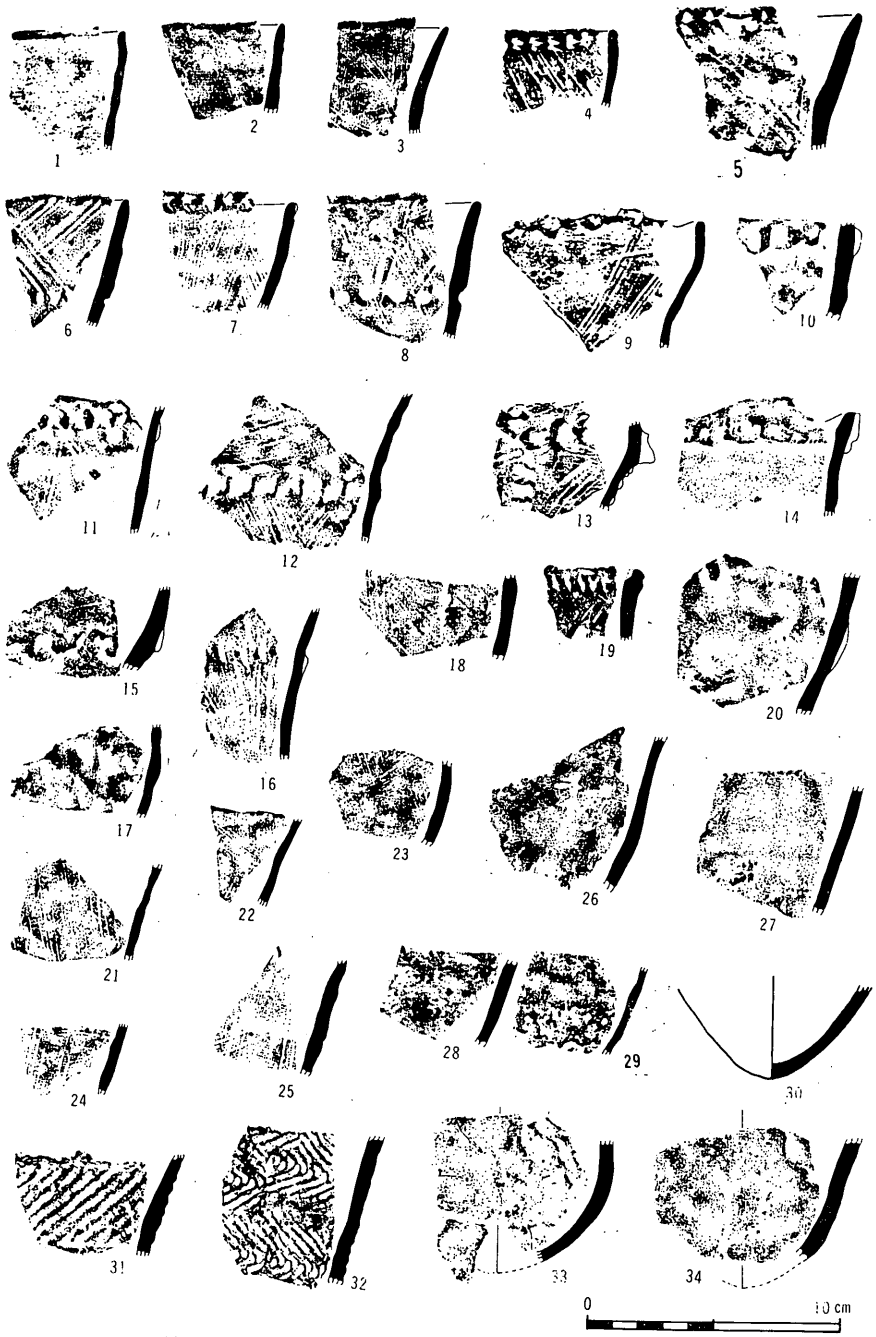
① 薄手土器には無文と条線文土器があり，暗褐色・黒褐色を呈す。条線文をもつものには，



第71図　伊久間原遺跡下原面 縄文早期末住居址分布図

口端に刻み（7），圧痕を施す（9），口縁に押引列点をもつ（4），口端から条線を下ろす（3・6）等がある。条線は櫛状具によるが多く，半截竹管によるものもある。条線文には平行する（4），羽状（6・7），逆三角形をなす（9），菱形格子目（3・25）があり，12にみるように頸部とみるくびれ部に爪形圧痕をめぐらし，その上下に羽状条線を施す一点がある。

② 口縁に横位の隆帯を貼布し，それを櫛・箆・半截竹管等で爪形文・斜沈線を施し，その下は無文となる（10・14・15），条痕を施す（11・13・16・19）がある。14は内面を折り返し肥厚させたとみられ，波状口縁をなす。13は横位の貼布帯から折れてやや低い縦の隆帯を下げる一例がある。これら土器はやや



第72図　伊久間原遺跡下原面　出土縄文早期末土器

厚みをまし，5～6㎜となり，黄褐色・褐色を呈し，胎土に雲母が多くみられる。

③ 器の厚みが5～8㎜，明るい黄褐色または褐色を呈す一群の土器である。口端に刻みをつけ，それより櫛状具による浅い条線による逆三角を施す（5），平縁の口端より半截竹管の条線を逆三角形に下ろし，口縁下部に竹管による刺突文をめぐらし，さらに櫛状具による交差する条線を施す（8）がある。胴部は無文となるとみられ，隆帯を残す（17・20）等があり，指圧痕を著しく残している。

④ 31・32にみる縄文施文土器がある。胎土に僅か繊維を含み，特徴として黒曜石の紛末が混入されていることである。9号住を除き各住居址より2・3片程が出土しており，出土量は極めて少ない。

石器の出土は少なく，5住址出土計で，石鏃6・石錐1・石匙2・剥片石器2の小形石器に，石皿1・台石5・磨石8・敲打器2・凹石1である。これに反し，黒曜石・チャート片が各住居址から多く出土している。

縄文前期

前期中葉の住居址と後半住居址各1軒が，調査区の南端近くに検出され，中葉住居址の上に後半住がのっていた。

中葉住居址は径約7ｍの円形，壁高80～68㎝の竪穴住居である。床面は張り床となるが，凹凸があり，平坦でない。壁が高いため南壁を半円に二段掘りこむ出入口がつき，その下段は粘土を枕状に固めて並べ，崩れを防いでいることに特徴がみられる。

土器は，関東系の黒浜式を主体に，関西系の北白川下層Ⅱ式がはいっており，完成品はないが量は多く，当地方ではこの期の出土が少なかっただけに注目される。石器は早期に比し多くなり，横刃形石器が多いのが目をひき，打石斧の出現がみられる。

後半住居址は，中葉住の上に構築され，径5.1～4.7ｍの楕円形をなし，壁高は50㎝前後である。壁の状態をみると，堅く，しっかりしており，人工的に下層住を埋めて作ったとはいえない。後半住のまわりに残る中葉住の覆土は固く，一時的な豪雨によって埋められた後に構築された住居址とみたい。

土器は，関東系の諸磯ａ式を主体に，北白川下層Ⅱｂ式を伴出している。石器は多く，打石斧の数を増してくる。飾玉1個出土があり，黒曜石片が中葉・後半住居址より多量に出土している。

縄文中期

中葉期の住居址ではっきりしたのは2軒と土壙1基がある。30号住より完形の装飾把手付深鉢形土器の出土が注目された。諏訪地方の藤内Ⅱ式に比定される土器で，石器の出土量も多く，打石斧・横刃形石器が増加し，生活の変化がみられてくる。

中期後半期とみる住居址は，すべて壁は削られ，炉址の大きさ，石囲炉であったとみる石の抜かれた痕跡等が，この期の住居址の存在を知る手掛であった。

縄文後期

三軒の住居址が検出されたが，壁はいずれも削りとられていた。炉址の覆土より出土した土器で時期を知ったものであり，後期後半の加曽利Ｂ式に比定されるものである。

壁が削りとられ，炉址と柱穴によって住居址と認めた中には，縄文早・前・中期の土器片の出土をみたのがあるが，出土は僅かで，また，出土状況も不安定で，はっきりその時期は決めがたい。

土壙32基の中で，はっきりしているのは，土壙Ⅰ群の後期土器の出土をみているものと，土壙28号の縄文中期中葉の土器の出土したもののみで，他ははっきりしない。

集石炉Ⅰでは，横刃形石器とみるが3個出土しているが，はっきりしない。集石炉Ⅱより凹石3個の出土は注目さるべきであるが，その時期は把握できなかった。

溝址のⅠ・Ⅱは調査区の最南端の段丘縁部に検出され，洪水時の自然流路とみるものである。溝址Ⅱの底部より横刃形石器と縄文中期Ⅲ期とみる台付土器片の出土をみる。下原南端部を襲った上段面を流れ落ちた洪水の一時期を示すものとみられる。

中世では，柱列址（建物址？）出土に青磁片・鉄紬椀等があり，囲溝址出土に椀片・鉄鏃があり，中世末のものである。上段面にあった伊久間域跡に関連する遺構とみる。

今次，下原面調査で弥生・古墳時代の遺構・遺物の検出は皆無である。上段の伊久間原面調査で，弥生中・後期，古墳時代各期の集落が調査され，下原面の北側調査では弥生後期の住居址・方形周溝墓が検出されているに反し，下原南端部では弥生・古墳時代についての遺構皆無は，注視すべきである。おそらくこの区域の自然環境が大きく影響しているものと受けとめたい。

おわりに，本次調査にあたって御指導いただけた先生方の御教示，地元の方々の御理解・御協力，作業にあたられた方々の御骨折りのあったことを深謝したい。

（佐藤甦信）

図版Ⅰ 遺跡

伊久間原遺跡下原面南側

同上 発掘調査区域（中央道路の上）

図版Ⅱ 遺跡群

北西調査区遺構群（北より）

同　　上（南より）

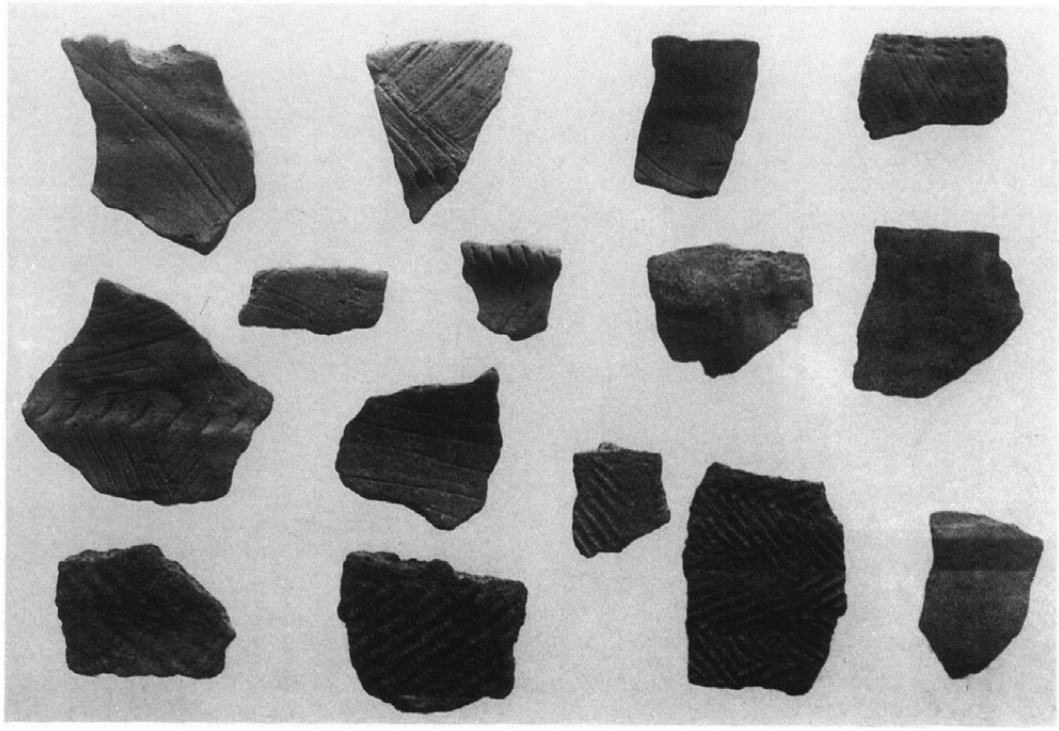
図版Ⅲ 遺構・遺物

縄文早期末　1号住居址

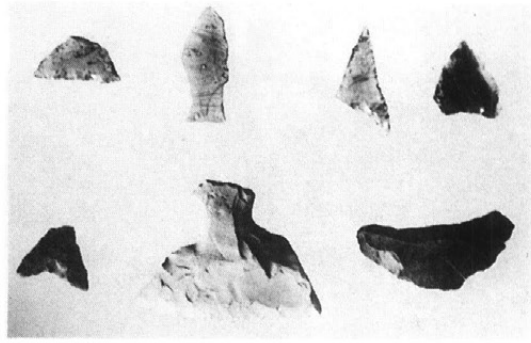
同上 9号住居址

縄文早期末　14号住居址

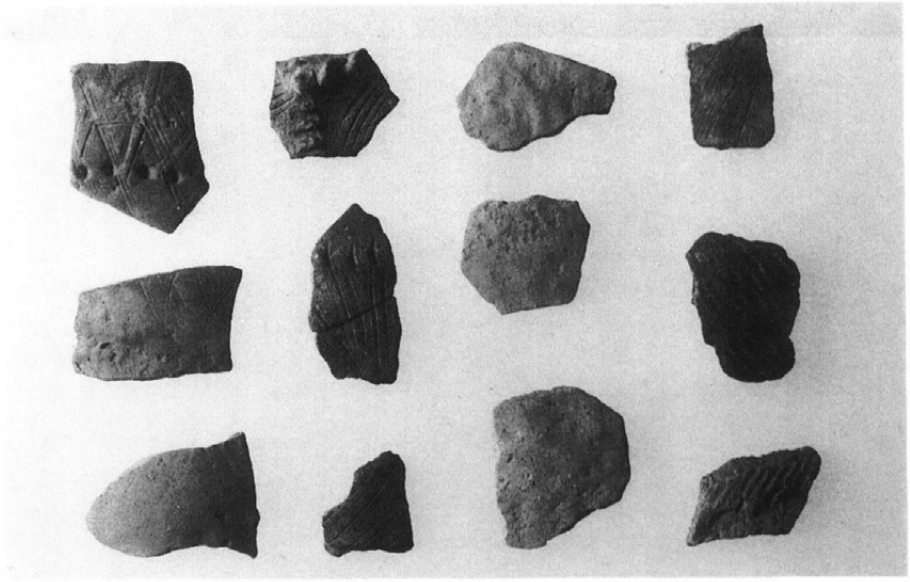
同上 17号住居址

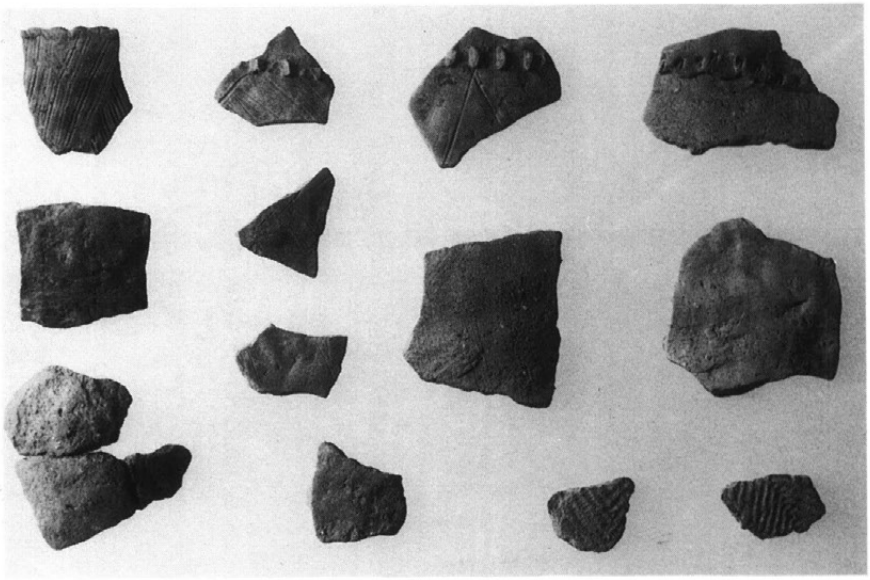


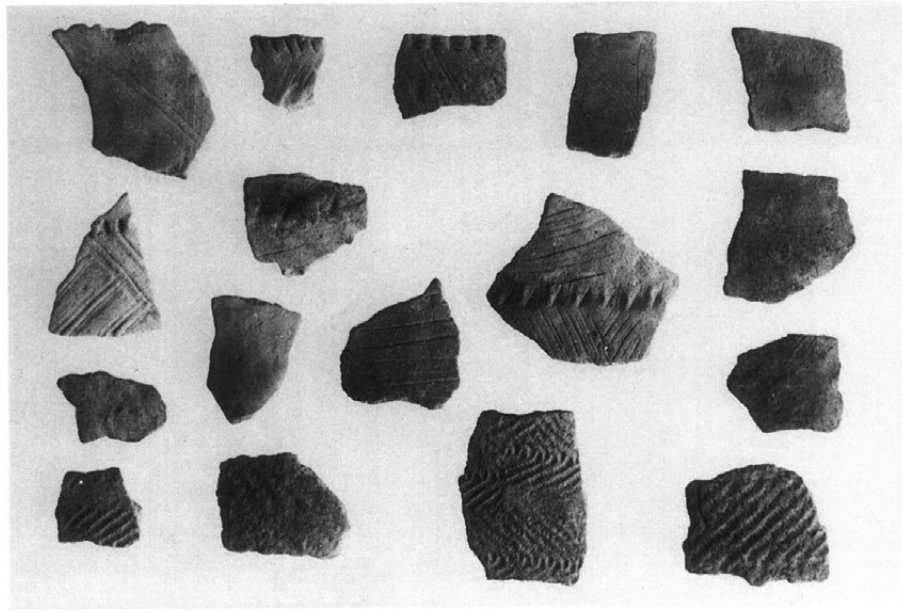
縄文早期末
13号住居址と出土土器



縄文早期末 石器

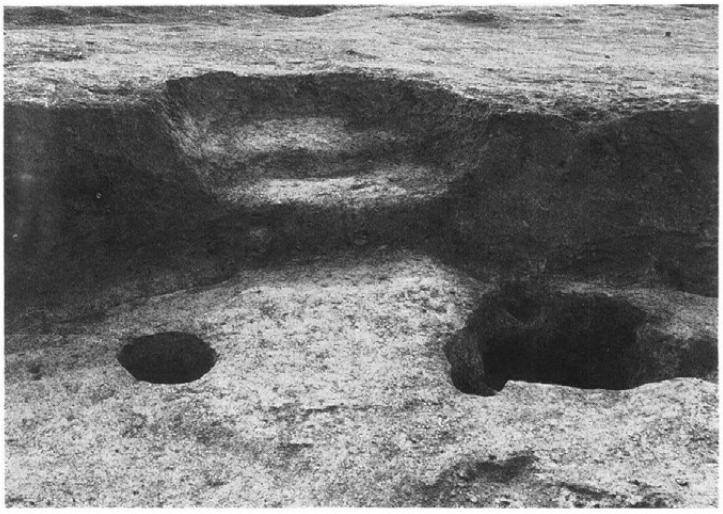




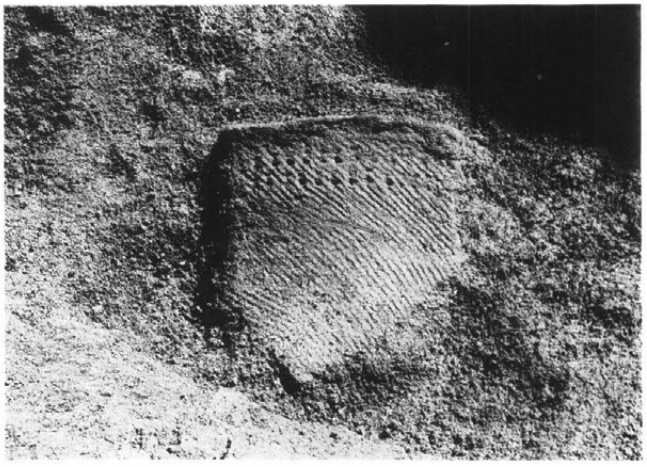


縄文早期末住居址出土土器

縄文前期　38号住居址



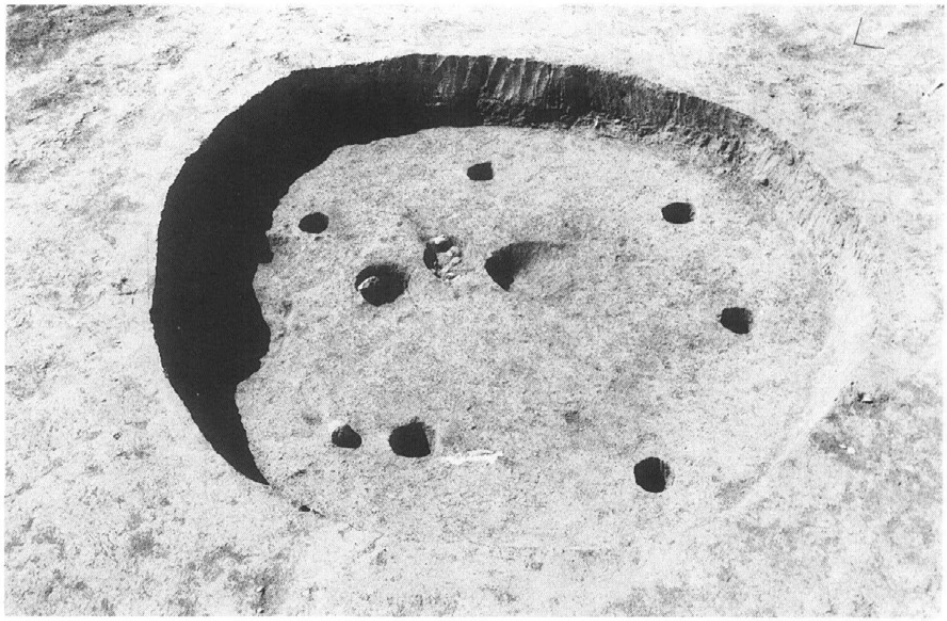
38号住居址　出入口部



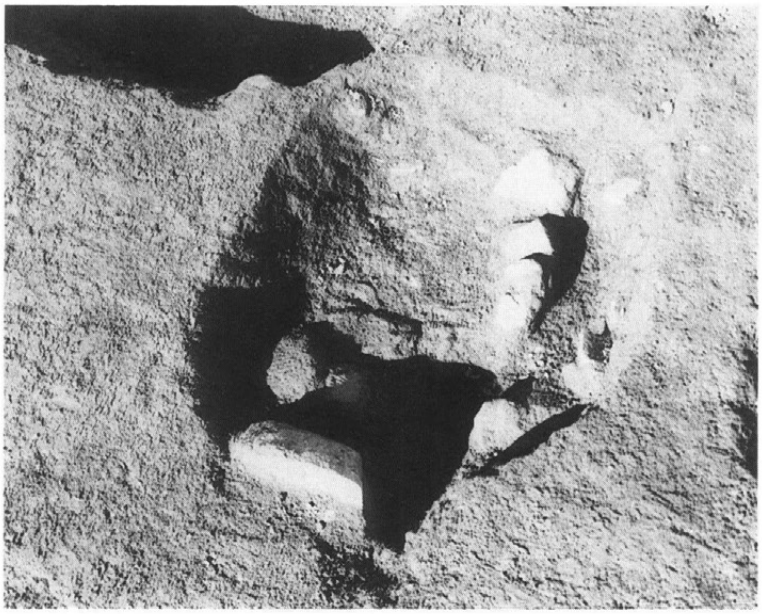
同上 土器出土状況

38号住居址出土土器（縄文前期）

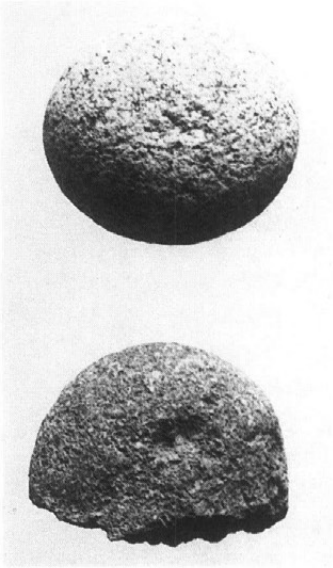
38号住居址出土石器



11号住居址

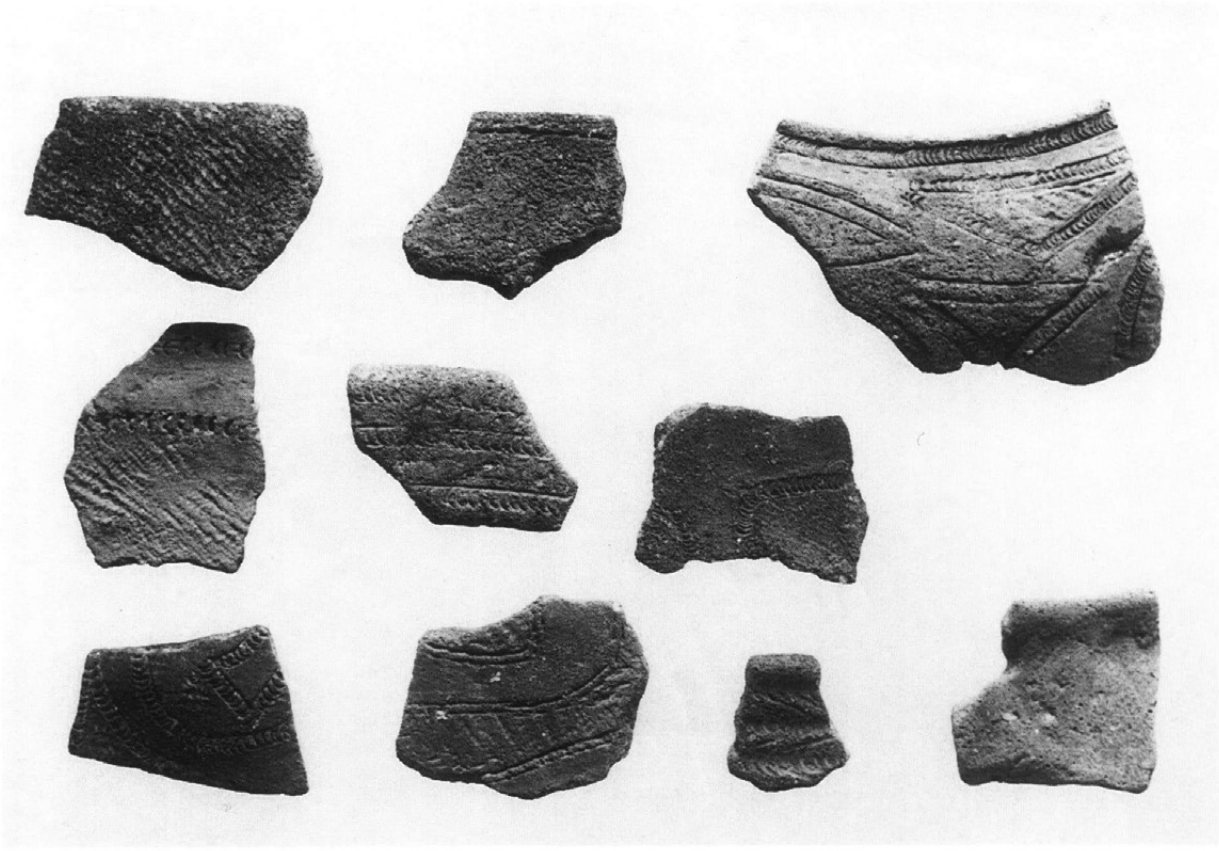


11号住居址 炉址

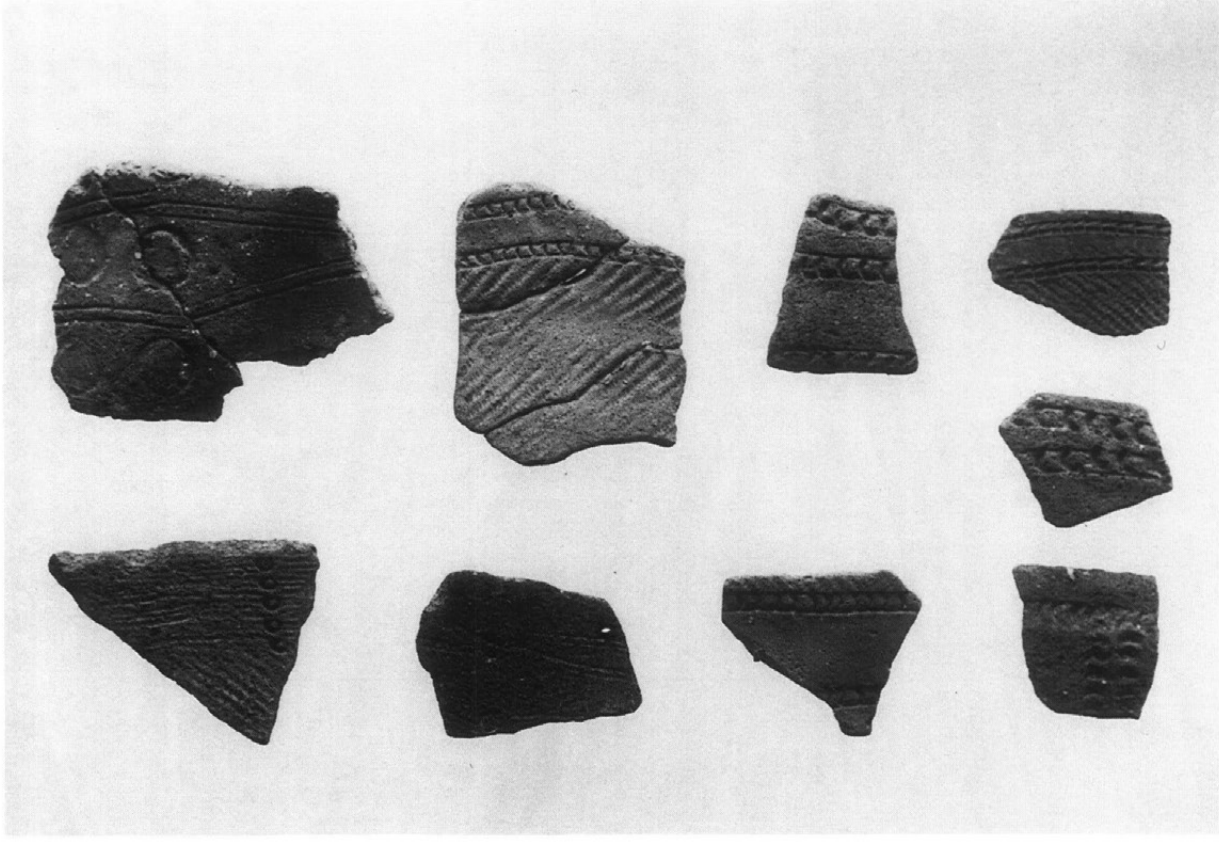


11号住居址出土凹石

11号住居址出土 小形石器



11号住居址出土土器（縄文前期）



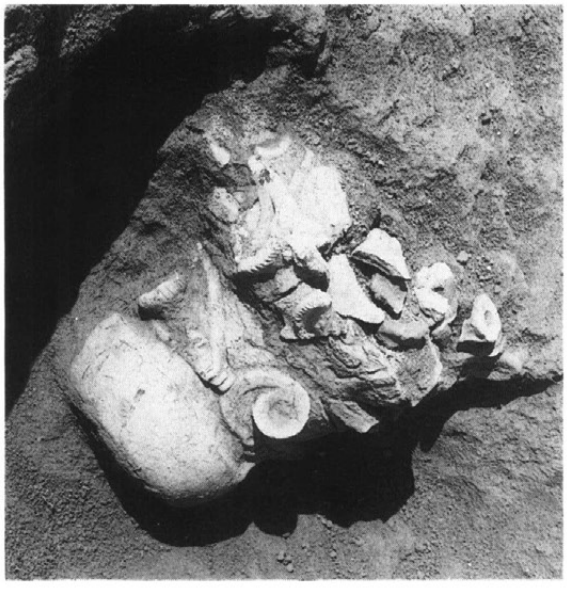
11号住居址出土土器（縄文前期）

縄文中期　30号住居址

正　面

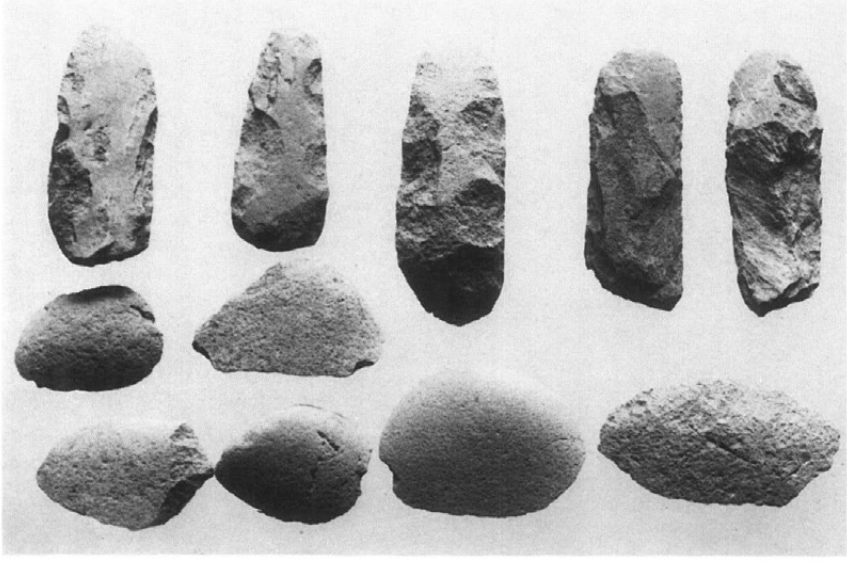
同住居址出土深鉢（中期中葉）

側　面

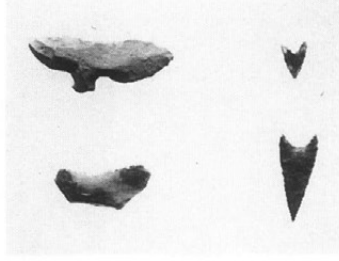


30号住居址（深鉢出土状況）

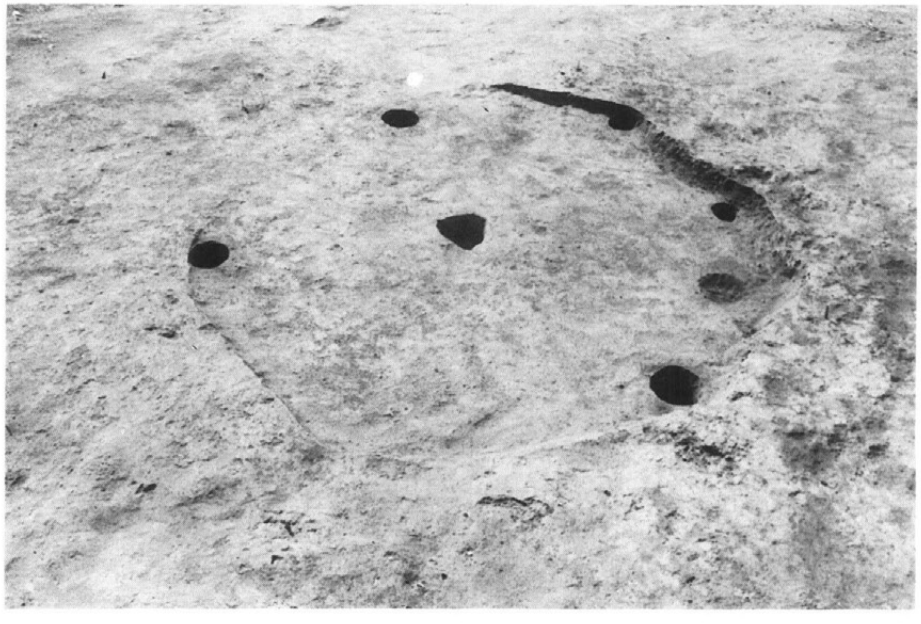
30号住居址出土土器



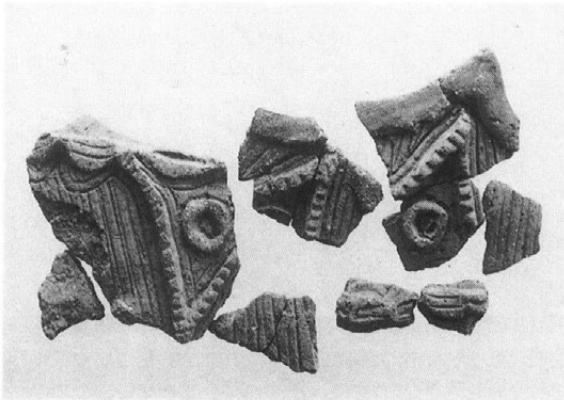
30号住居址出土
打石斧・横刃形石器



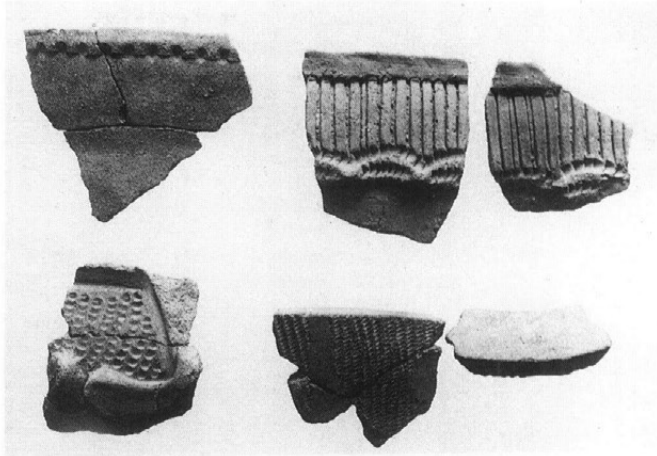
30号住居址出土小形石器



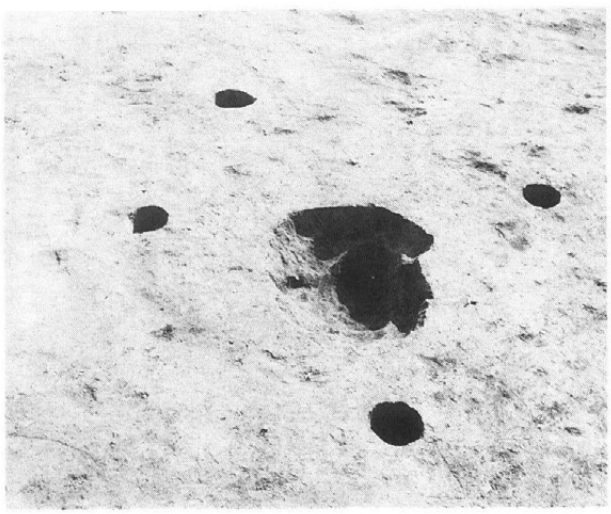
4号住居址



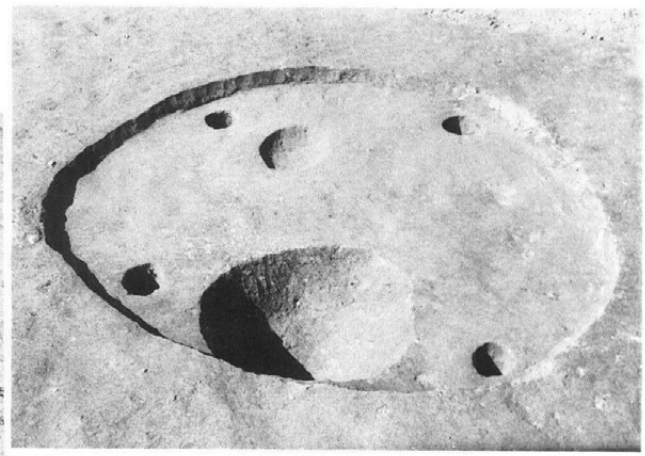
4号住居址出土土器（縄文中期中葉）



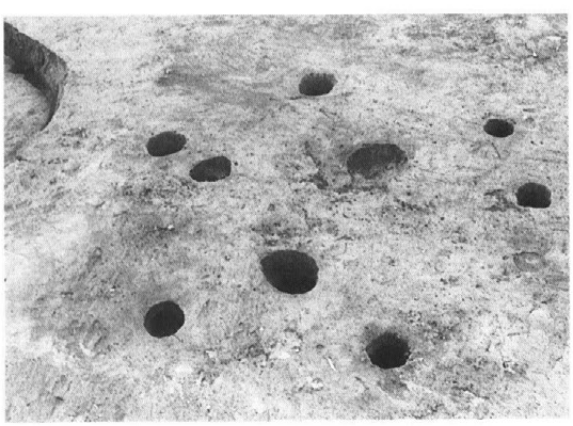
4号住居址出土土器（縄文中期中葉）



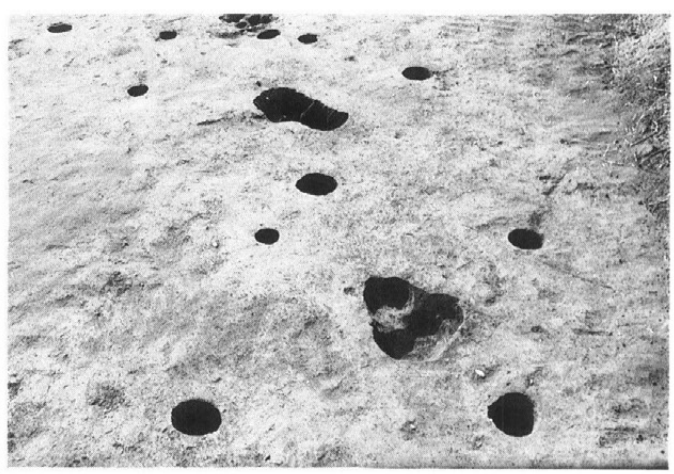
2号住居址



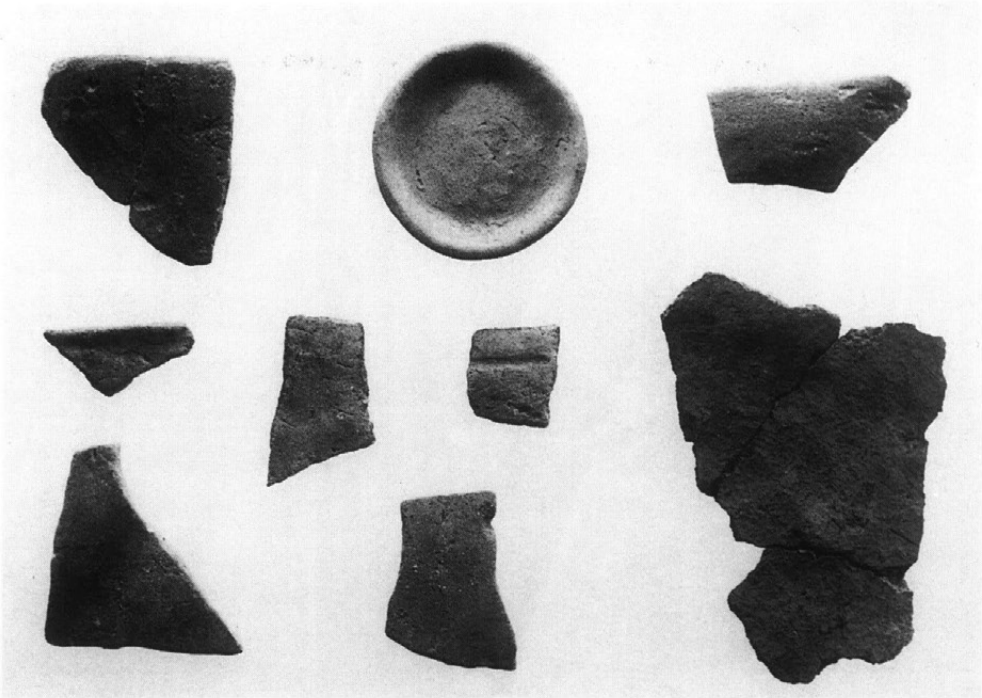
19号住居址・土壙24号



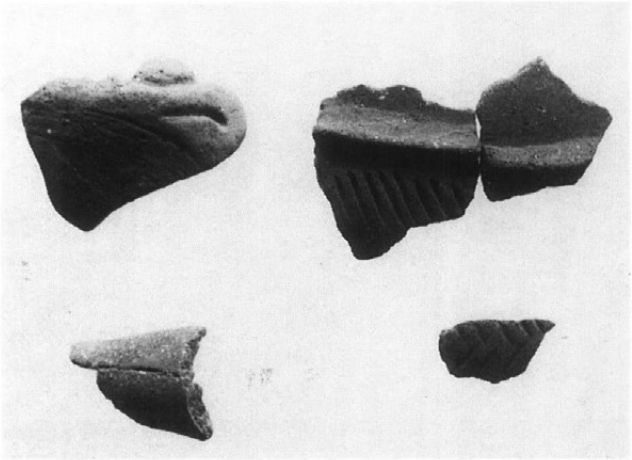
10号住居址

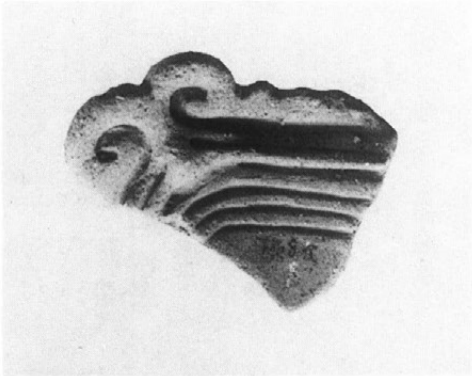


25号・26号・28号住居址



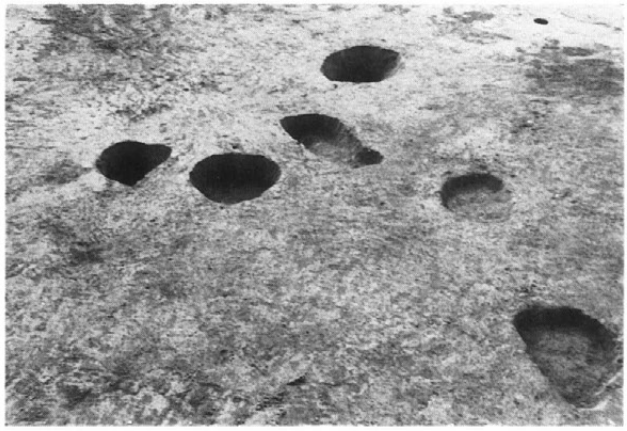
8号住居址出土遺物（縄文後期）上の中一耳栓





5号住居址出土土器一縄文後期
（左側上左土器は表面，右の写真はその裏面）

土壙群Ⅰ



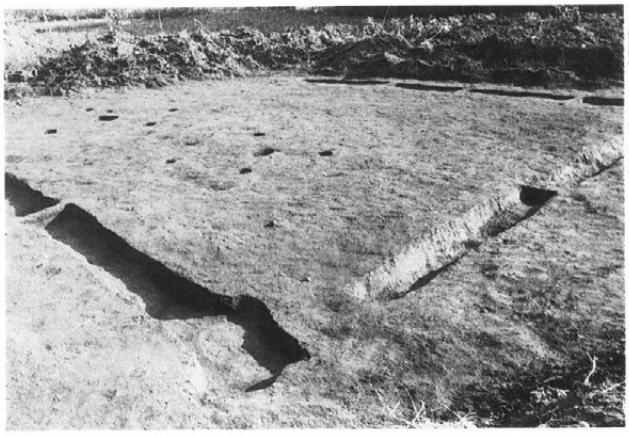
土壙群Ⅱ

集石炉Ⅰ 上部

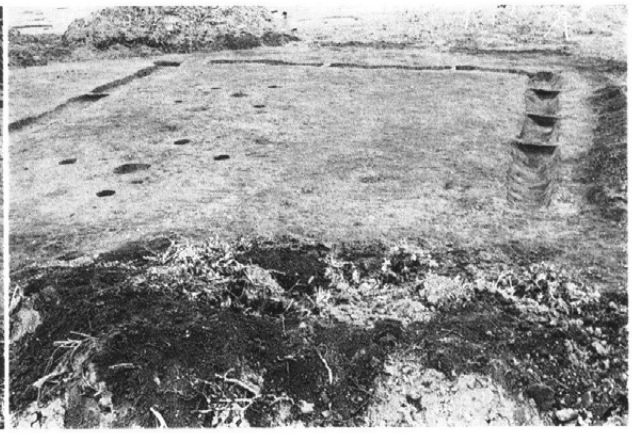
集石炉Ⅰ 底部

集石炉Ⅱ 上部

集石炉Ⅱ 底部



方形周溝（北面側より）



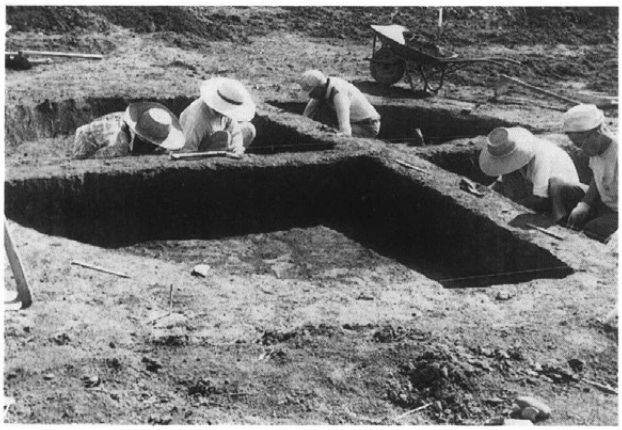
方形周溝（東より）

図版Ⅳ 発掘スナップ

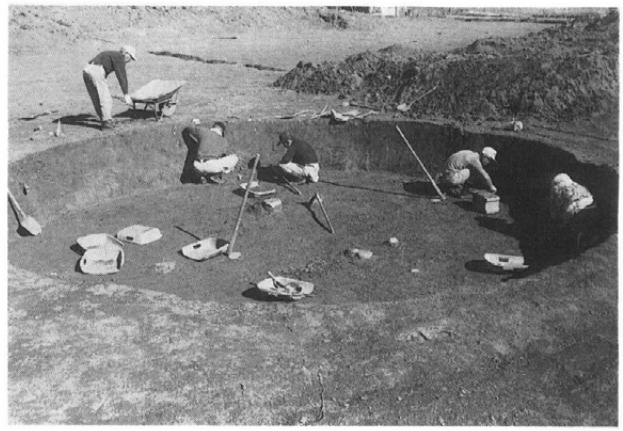
調査にかかる

住居址の調査

調査団



11号住居址調査



38号住居址調査—深くて苦労する

調　査　組　織

1．伊久間原遺跡下原面調査委員会

中川　勲	喬木村教育委員会委員長
下岡輝男	喬木村教育長（前）
下岡重尊	〃　（現）
原　義人	喬木村教育委員
桐生文雄	〃
鈴川英人	〃
原　五郎	喬木村文化財保護委員会委員長
黒川良一	喬木村歴史民俗資料館専門主事
塩沢久一	小渋土地改良区伊久間事業所
矢沢　武	〃
吉川邦夫	〃
牧内友春	伊久間区長

2．調　査　団

団　長	佐藤甦信
調査員	今村正次
〃	市沢英利
〃	牧内住子
調査補助員	松下真幸
〃	田口さなゑ

3．作　業　員

福島明夫	柳沢八重子	下岡米男	丸山尚志
松尾　研	原　礼三	原　イトシ	近藤ちよゑ
吉川京子	野島むつへ	川口千歳	木村広信
湯沢恵子	大原久和	原　芳美	川口範子
下岡ちずか	鈴川あつ子	三石加代子	佐藤いなゑ

4．指　導　　長野県教育委員会文化課

5．事　務　局

柳沢治人	喬木村教育委員会事務局長
市瀬武文	喬木村教育委員会社会教育係長
永井宗寿	喬木村教育委員会社会教育係

伊久間原遺跡下原

— 1991. 3 —

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

印刷　長野県飯田市通り町1－2
株式会社　秀　文　社